

カストリ・グループと初期青銅器時代の エーゲ海

周 藤 芳 幸

はじめに

紀元前三千年紀にキクラデス諸島と呼ばれるエーゲ海の島々 (Fig. 1, 2) に展開した初期青銅器時代の文化は、その特徴的な遺物に対する美術的評価のために前世紀から広く注目を集め、とりわけ純白の大理石製石偶 (marble figurine) は、世界各地の美術館や博物館によって収集され、また個人コレクションの対象となってきた。ギリシャ国内においても、グーランドリスのコレクションに基づくキクラデス文化美術館に展示された土器や石偶その他の遺物は、アテネ考古学博物館にある学術調査による資料に比肩する内容を誇り、かつて我が国でも「ギリシャ美術の源流展」と題して公開されている¹⁾。しかし、そのような一般的関心とは裏腹に、本土やクレタに比較すれば、初期青銅器時代のキクラデス文化内容に対する研究は、ごく近年までむしろなおざりにされてきた観があり、次章で見るように、前世紀の末にはツンドスを筆頭とするギリシャ人考古学者や在アテネ・イギリス考古学研究所の手によって、他の地域に先駆けてキクラデスで組織的な発掘が行われていたことを考慮するならば、今日の状況、即ち後に本稿でも議論で扱う基本的な編年上の混乱を始めとするギリシャの他地域と比べての研究の立ち遅れは、やや意外でさえある。それでは、このような状況は、何に起因しているのだろうか。

まず、キクラデスの集落遺跡に共通する現象であるが、多くの遺跡で、層序関係を観察するに足る堆積が、しばしば浸蝕によって失われていることがあげられよう。実際、複数の文化層が重なりあい、内容を異にする文化の前後関係を明らかにしうる遺跡は、後述するように極めて少ない。

次に、島ごとの遺跡の分布調査の精度がまちまちであることが指摘されよう。ミロスのように、全島をカバーすることを意図したフィールド・サーヴェイの行われている島もあれば、ナクソスのように、多数の遺跡が数えられていながら不完全な報告のためにそれらの同定の困難な島も存在する²⁾。

さらに、少なからぬ遺跡が部分的にはあっても試掘されているにもかかわらず、ギリシャ側による発掘成果の大部分が、エヴィアのマニカのような貴重な例外を除いてAAA誌やAD誌のクロニカなどに断片的な概報の形で公表されるにとどまっており、調査された遺跡の全容が把握しがたいことがあげられる。

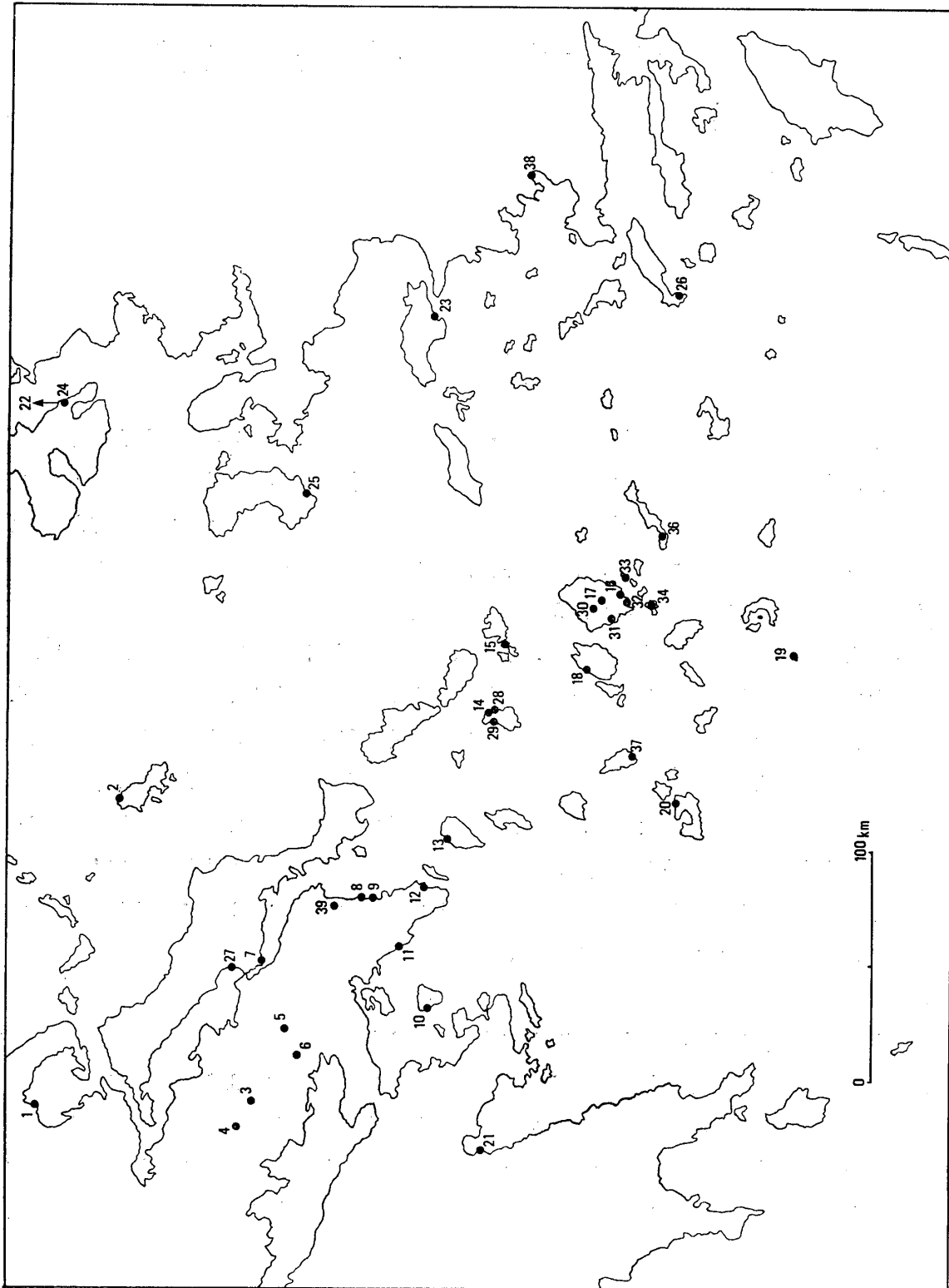


Fig. 1. Map of the South Aegean and sites mentioned in the text. (See. Table 1)

それに加えて、早い時期に調査の行われた遺跡については、今日の我々が研究上の関心から必要としているような情報が乏しく不完全であるという事情もある。この中には、ミロス島フィラコピ遺跡のように、当時の発掘日誌の公刊、未公開資料を含む出土遺物の再検討、及び新たな発掘によ

って、初期の知見が大幅に増補されている遺跡も存在する傍ら、シロス島ハランドリアニ遺跡のように、ドーマスによる僅かな追加発掘を除けば依然としてツンダスによる概報が唯一の一次資料であり、600基以上にも及ぶ墓域の具体的な内容がほとんど分からない遺跡もある³⁾。

また、主たる情報源である墓から得られる資料が美術的価値をもつために、学術的な調査の及ぶ前に盗掘・破壊される遺跡の多いことはいうまでもない⁴⁾。

これらの要因は、複合して様々な困難を引き起こしている。まず、コンテキストがもともと不明な、あるいは我々の前に明らかにされていない、即ちそれについて何らかの解釈が必要とされながら、それ自身に基づいて議論することの不可能な資料が極めて多いということ。また、より深刻な問題として、長い期間に渡って居住され（重なりあった層位があり）かつ組織的な調査が行われるとともにその成果が公表されている遺跡が、少なくとも初期青銅器時代に関しては、フィラコピの他にはケア島アイア・イリニ遺跡しかないということ。

とりわけ、後者の影響は大きい。なぜならば、その結果、この時期のキクラデスの歴史が、ほとんどこの2遺跡で観察された層序関係によって語られてしまうという傾向が否めないからである。勿論、ある地域全体の歴史が、そのなかで最も調査の行き届いている遺跡からの知見によって代表されるという傾向は、さして珍しい現象ではない。事実、先に筆者は、ほぼ同じ時期のギリシャ本土における「レルナ中心主義」を批判したことがあったが、そこで筆者が提示した問題点は、そのままキクラデスにも当てはまるであろう⁵⁾。後に見るように、フィラコピとアイア・イリニの内容は、相互に矛盾こそきたしていないように見えるものの、一方であまりかみあってもいないのである。これは、それらが、キクラデス全体を視野におくとき、ともに西に偏し、しかも南北に隔たっている（Fig. 1）ことと無関係ではありえないが、そのために、キクラデスの初期青銅器文化を構成する下位の文化グループ間の関係が論じられる場合には、それらの間に観察される文化内容の相違が、時間差（編年上の位置の相違）を含意しているのか、あるいは地域差（同時期における空間的な分布の相違）に由来するののかという点が、必然的に議論の焦点とならざるを得ない。

しかし、以下の章で概観するように、限られた資料の丹念な検討、断片的な知見の地道な統合作業によって、初期青銅器時代のキクラデスの様相は、研究者によってカストリ・グループ、レフカンディ I 文化、EC III, EC II B, EC III Aなどと多様に呼ばれている一群のアッセンブリッジを歴史的にいかに位置付けるかという問題を除いては、今日ほぼ解明されているといっても良い状況にある⁷⁾。本稿の課題は、残された問題点を研究史の再検討を通して浮き彫りにする（I）とともに、その文化内容を個別的に議論することからこの文化グループの具体的な在り方と特徴を示し（II）、結論として従来のそれに代る新たな初期青銅器時代のエーゲ海の歴史像を構築する（III）ことにある。

改めて述べるまでもなく、先史時代のギリシャ本土とエーゲ海の文化は孤立した現象ではない。とりわけ初期青銅器時代の最盛期には、クレタはやや圏外にあるとしても、ギリシャ本土とキクラデスの文化には、一見しただけでもかなりの共通する部分がみられる。しかも、キクラデスの様相

については未だ不明な点が多く残されているものの、その時期のギリシャ本土では、既に集落の都市化が進み、いくつかの遺跡における大規模な回廊付建築の存在からは、それまで見られなかった社会の一定の複雑化が推定されている⁹⁾。そして、そのギリシャ本土においてこの齊一的な文化が崩壊していく過程にインド・ヨーロッパ語族であるギリシャ民族の到来を推測する立場が(考古学的証拠はかなりネガティブなものであるにもかかわらず)あることは、かつて別な場所で論じた通りであり⁹⁾、

ほぼ時期を同じくするキクラデスでの状況に正しい光を当てることは、純粋に考古学的な課題であるにとどまらず、いわゆるギリシャ史の黎明を探る上でも、意義のあることであろう。なぜならば、地理的にギリシャ本土と当時の先進地域であるアナトリアとの間に介在しているのがキクラデスの群島であり、そこに連綿と営まれた文化グループの中でも、そのしばしば「アナトリア的」と称される異色の遺物によって特徴付けられているのが、我々がここで問題とするカストリ・グループ他の名で知られるものに他ならないからである。

I-1 調査史

ベントなどの旅行者による発掘や記述を別とすれば、キクラデスにおける本格的な考古学的調査は1890年代末から1900年代初頭に始まった¹⁰⁾。シュリーマンとスタマタキスの後を継いでミケーネの調査を続行していたギリシャ考古学協会のツンダスは、1894年にアモルゴス、1897年にはシフノスとシロスの「キクラデス時代」の遺跡を発掘し、その成果をキクラディカと題する2編の論文に

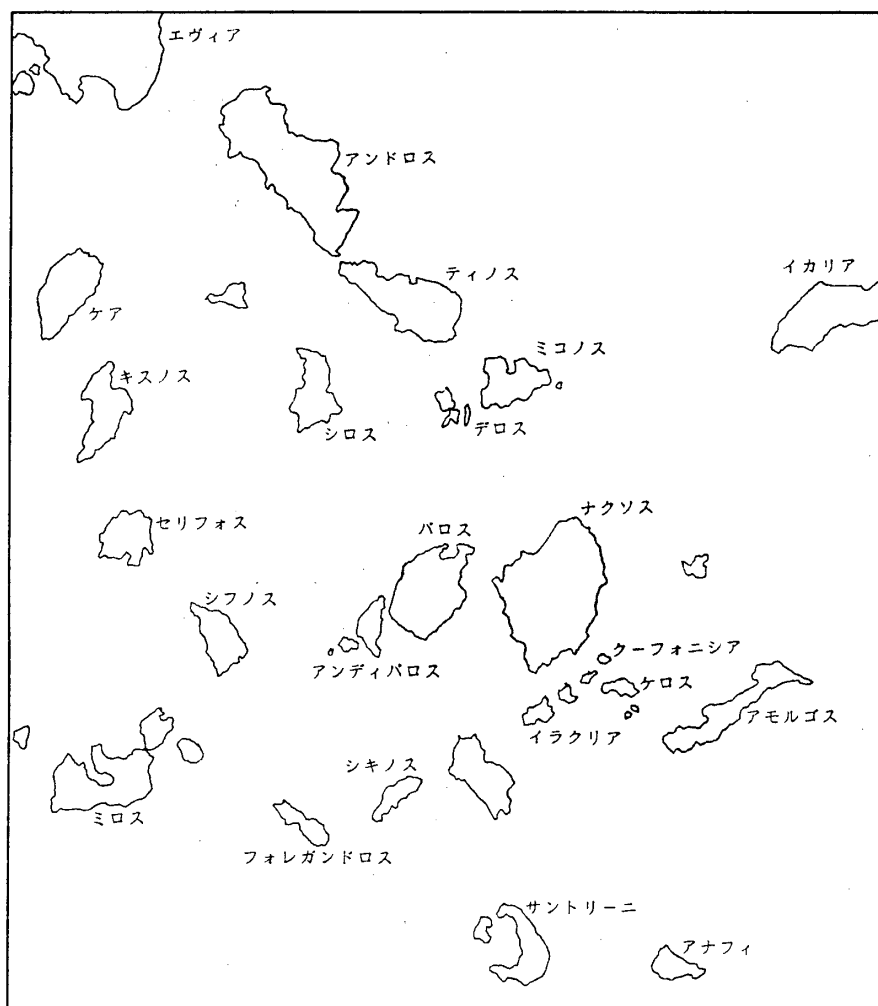


Fig 2. Map of the central Aegean islands.

まとめ、A E誌に発表している¹¹⁾。また1896年には、古典的メロスの発掘のためにミロス島へ赴いていたイギリス考古学研究所の調査団が、発掘地点を北岸の先史遺跡フィラコピに転じ、その発掘は1899年まで続けられた。この調査の詳細については1904年に正式の報告書が刊行されているが、このモノグラフは、その客観的な記述の正確さにおいて当時の水準をはるかに凌ぎ、今日なおキラデス文化研究の基本文献となっている¹²⁾。なお、その間の1896年には、調査団の一員であったエドガーが、同じミロス島のホーラ平野北東端にあるペロスの小規模な墓域を発掘している¹³⁾。一方、キラデスからは離れるが、エヴィア（エウボイア）のマニカでは、1905年にパパウヴァシリウーが堅穴墓という構造を特徴とする墓域の調査を行い、その報告書は1910年に公刊されている¹⁴⁾。

このように列挙してみると、この初期の十年余りの間に初期青銅器時代キラデスの主な文化要素がほとんど出尽くしていることが明らかとなる。即ち、ペロス、シロス、フィラコピ I 市の文化内容は、大まかにいって、それぞれEC I、EC II、EC IIIという伝統的な3時期区分の基礎となっており、後に触れる文化グループ編年では、これらの遺跡がエポニム・サイトとして用いられているのである。ちなみに、クレタにおける編年の基礎となったエヴァンズのクノッソスでの調査が始まるのが1900年（報告書が刊行され始めるのは大戦を挟んだ後の1921年）、本土の編年の基礎となる資料を提供したコラクウの発掘がブレーゲンによって行われたのが1914年から翌年にかけて（報告書の刊行は同じく1921年）であるから、いかにキラデスの調査が幸先の良いスタートを切ったかということが理解されよう¹⁵⁾。

ところが、それに続く約半世紀の間、キラデスの先史文化研究は、クレタや本土の場合とは対照的に、ほとんどめぼしい進歩を見ることがなかった。それには、前章で触れたキラデスの遺跡の特性もさることながら、人々の関心が、めざましい発見の相次いだクレタと本土に向けられていったことが指摘できよう。事実、フィラコピの調査で中心的な役割を果たしたマッケンジーは、クノッソスの発掘でもエヴァンズのもとでアシスタントとして活躍し続け、トロイにおけるシュリーマンに対するデルプフェルトのような役割を果たしたのである。こうして、フィラコピの追加調査（1911年）、ルーベンゾーンによるペロス島パリキア遺跡の報告（1917年）を最後に、初期の盛んな調査は下火になり、途中ナクソス島グロッタ遺跡などの発掘は行われたものの、1960年に至るまでは、それまでの知見を大きく変えるような調査が行われることはなかったと言える¹⁶⁾。

その情勢を一転させたのが、1960年に開始されたカスキーによるケア島アイア・イリニ遺跡の調査、そして1967年にマリナトスによって始められ、その発掘現場での不慮の事故による急逝の後はドゥーマスによって引き継がれているサントリーニ島アクロティリ遺跡の発掘である¹⁷⁾。後者は本稿で扱う初期青銅器時代には、さしあたり直接的な影響を与えていないが、前者はそれまでフィラコピからの知見に拠るしかなかったキラデスの初期から中期青銅器時代の文化の推移に、オルターナティブな視点を提供することとなった点で重要である。我々が問題としている時期に関するモノグラフこそ未だ刊行されていないものの、1950年代にアルゴリスのレルナを発掘し、そこでの知見から従来の本土の初期青銅器時代の編年観を大きく修正した経歴を持つカスキーは、このアイア

・イリニに対しても、ヘスペリア誌上で建築遺構と土器の変遷について詳細に報告している¹⁸⁾。

一方で、1962年には我々が問題とする文化グループのエポニム・サイトであるシロス島カストリ遺跡がマリア・ボッセルトによって再掘され、その概報が1967年に発表されている¹⁹⁾。また1964年から1966年にかけては、エヴィアのレフカンディがイギリス考古学研究所の手で調査されているが、青銅器時代に関する本報告は未だ刊行されておらず、1968年に出た概報が唯一の情報源となっている²⁰⁾。

同じ1960年代には、ギリシャ側の調査もドゥーマスやザフィロプルーらによってナクソスやケロスで活発に展開されたが、それらについてはAD誌などから概要を断片的に知り得るにすぎない。

サントリーニ島アクロティリ遺跡の調査は、1970年代に入ってから華々しく続けられたが、我々にとってより関心があるのは、この時期にフィラコピが再び脚光を浴びた点であろう。既にレンフルーはマッケンジーの調査日誌をタイプライティングで公にしていたが、1974年にはバーバーが1911年の追加発掘の際の資料を当時の野帳などをもとに改めて検討し、そこからフィラコピの層序を再構成している²¹⁾。更に、1974年から1977年にかけてはレンフルーによる同遺跡の再発掘が行われたが、後期青銅器時代の聖域についての報告は出ているものの、初期青銅器時代については限られた情報しか公表されていない²²⁾。また1970年代末には、1920年代にデロス島キンソス山で発掘された初期青銅器時代の遺物もマックギリヴレイによって再検討されている²³⁾。

しかし、1970年代を特徴づけているのは、それまでの知見の蓄積の上に立つ総合的な研究が著され始めたことであろう。1972年に出版されたレンフルーの「文明の出現」はその代表的なものであり、優れた理論的背景のもとに初期青銅器時代のエーゲ海の様相がまとめられ、今日なおエーゲ海先史考古学の基本文献となっている²⁴⁾。また、多くの資料がそこに由来する墓域については、豊富な発掘事例に基づくドゥーマスの研究が発表されている²⁵⁾。多分に美術書的な体裁はとっているものの、ドゥーマスらも寄稿しているティンメの「キクラデスの美術と文化」の出版も、この傾向に沿うものといえよう²⁶⁾。また、同じ時期に、アクロティリの学際的な調査をきっかけとしたキクラデス考古学史初の国際シンポジウムがドゥーマスによって組織され、その成果が公刊されていることも特筆されなければならない²⁷⁾。

このように、1970年代を、過去の調査の総括に基づく統合化の時期とするならば、続く1980年代は、その統合の過程で犠牲となった文化グループ内の細かな差異、ある遺物カテゴリーの在り方から見た従来の編年に対する疑問と修正が次々に提出され（本稿もまたその趨勢の上に立つものであるが）、1970年代にひとまず獲得されたかに見えた歴史像に対する反省と論争の時期であると位置づけることができる。議論の詳細は編年の項で触れることにして、1980年代に行われた主な調査を振り返るならば、まず挙げられるのは、 Sampson を中心とするエヴィアのマニカの発掘と、とりわけ詳細なその報告書の刊行であろう²⁸⁾。青銅器時代全体を視野におくならば、LCⅢの大規模なアクロポリスが発掘されつつあるパロス島ククナリエス遺跡の調査とそれに伴う後期青銅器時代の様相の研究など、指摘すべきものは多いが、こと初期青銅器時代に関しては、新たな資料の公表は

常に期待されているものの、むしろ現在の課題は、これまでの調査の蓄積によって我々に知られている情報を整合的に解釈できるモデルを提出することであり、その試みは既にその緒についている。本稿もまた、以上のような研究史をふまえ、その要請にそって一定のモデルを構築することを意図していることは言うまでもない。

I-2 編年観の推移

エーゲ海の他の地域との関連においてキクラデス諸島の青銅器時代にも編年的枠組みを与えようとする試みは、フランクフォート、オーベルクラによって古くから行われてはいたが²⁹⁾、該地域の考古学的調査に直接携わる研究者によって編年観が最初に表明されたのは、管見に触れる限りでは、1964年に発表されたシロス島ハランドリアニ遺跡についてのカスキーによるエッセイにおいてである³⁰⁾。

ハランドリアニの墓域とカストリの城塞を単一の遺跡複合（それを彼はハランドリアニ遺跡と呼んでいる）と考えていたカスキーは、独特の形態を備えた周壁のレルナでEHⅡに存在した同様の城壁との並行関係、デパと通称される明確にアナトリア的な土器の器形のトロイにおける出土状況との比較から、これ（正確に言えばカストリ遺跡の文化内容）を、本土のEHⅡ、クレタのEMⅡに並行するものという意味でECⅡと命名し、それに先行するであろうところの文化内容を、その内容を限定することなくECⅠと名付け、既によく知られていたフィラコピⅠ市の内容をもってECⅢとしたのである。ツングスによって発掘されたハランドリアニの墓域については、カスキーはそれをカストリの城塞と同時期であると言明するにとどめているが、既にレルナの調査を通してEHⅡの文化（土器組成）がソース・ポートの存在によって特徴づけられるという認識に達していたカスキーにとっては、それを副葬品中に含むハランドリアニの墓域をECⅡに位置づけることに躊躇はなかったであろう³¹⁾。彼の編年観によれば、アオリストのECⅠには、ペロスの文化内容の他に今日一般に後期新石器時代に置かれるケアのケファラ遺跡の文化内容が想定されていたことが見てとれる。興味深いことは、その編年表の中でECⅡとECⅢの間だけがEHⅡとEHⅢの間同様に二重線によって区切られている点であり、カスキーがキクラデスにおける文化の変化を本土（特にレルナ）のそれに対応するものとして理解しようとしていたことが窺われる。

このようにして、キクラデス諸島の初期青銅器時代にも伝統的な三時期区分が設定されたわけであるが、これに対し、それまでに知られていた考古学的証拠を総合的に編年することを意図したレンフルーは、その著作の中で、従来のエーゲ海先史考古学で採用されていたのとは全く異なる原理に立脚する編年のシステムを提言した。これがいわゆる文化編年である³²⁾。

ギリシャ本土とクレタの青銅器時代は、伝統的に三時期区分法によって編年されているが、これは所与の時期を初期・中期・後期に大きく分け、必要に応じてそれをさらに三段階に区分することを編年の骨子としており、その具体的な各称はアルファベットと数字の組み合わせで示されている。たとえば、LHⅢA2と表記すれば、それはギリシャ本土の後期青銅器時代の第3期（別な言い方

をすればミケーネ時代盛期)の前期,かつ,そのなかでも遅い(新しい)時期に言及していると思われる。しかし,それは現実的な解釈ではない。実際には,それは編年的にそこに置くのが妥当であると考えられる遺物・遺構などの考古学的証拠に付随する諸属性の総体を合意している。即ち,編年の単位となるアルファベットと数字による表記は,時期と文化内容を同時に(柔軟かつあいまいに)示しているのである。

文化編年を提唱する研究者の従来システムに対する批判の焦点は,まさにそこにある。空間的・時間的な広がりのもとに展開される文化は,その及ぶすべての地域で齊一に変化するものではない。ある時期に同一とみなし得る文化のもとにあっても,一定の時間を隔てた後に,そのなかのある地域では全く新しい文化要素が支配的になり,別の地域ではもとの文化要素が依然としてドミナントであるというような事態は,十分起こり得ることであろう。そのような状況に対して無理のない歴史像を構築するためには,編年の単位である文化内容から時期を示す語を除かなくてはならない。

このような認識に立ちつつ,レンフルーは,ギリシャ本土の初期青銅器時代に3つの文化グループ(エウトレス文化—従来のEH I, コラクウ文化—同じくEH II, ティリンス文化—同じくEH III)を認めるとともに,キクラデスにも同様の遺跡(島)名をかぶせた3つの文化グループを定義し,特に時期に言及したい時にのみ,両地域に共通してEB I, EB II, EB IIIというタームを使うことにしたのである。結果を先取りすれば,少なくともギリシャ本土に関しては,レンフルーのシステムは今日既に全く使われていないとあって良い。理由は様々であろうが,まず文化編年による表記では,歴史的なパースペクティブが失われがちになるという点が挙げられよう。即ち,EH IIと表記すれば該文化の歴史的な位置が一目瞭然であるものを,コラクウ文化と呼ぶと(レンフルーに従ってEB IIという注釈をつけない限り)それが表に出てこないという点である。また,従来のシステムが,三時期区分という枠に縛られているために必然的に簡略であることを志すのに対し,文化編年では,理論上は無制限に数多くの文化グループを設定することができ,任意の遺跡の単位コンテクストに由来する考古学的証拠の個性を記述するには都合が良くても,それらを一貫した本質的な共通性と異質性を識別しつつ歴史像を構築するという営為には相応しくないという事情もある。逆に,そのような考古学的証拠が余り多くなければ文化編年も混乱をきたすことなく有効に機能しうるから,その特殊な事情が,レンフルーをしてキクラデスに文化編年を適用すること(そしてその方法をエーゲ海全体に適用すること)を試みさせたのであろう。

レンフルーによれば,キクラデスにおける最初期の初期青銅器文化は,ナクソス島グロッタ遺跡とミロス島ペロス遺跡からの出土遺物によって特徴づけられることから,グロッタ・ペロス(以下G—P)文化と呼ぶことが出来る。グロッタとフィラコピ(プレ・シティ)を除けば大半が墓域であり,その副葬品が標準となる遺物の組成を示している。これに対し,カスキーがEC IIとした文化内容を,レンフルーはケロス・シロス(K—S)文化と命名しているが,その基準となっているのがツンダスによって調査されたシロス島ハランドリアニの墓域の文化内容であることは言うまで

もない。後に問題とするように、該期の集落としては、ハランドリアニの城塞(即ちカストリ遺跡)やナクソス島のパノルモス遺跡が例示されている。フィラコピ I 市の内容をもってキクラデスにおける初期青銅器時代の最終段階が構成されることは、当然予期されるであろう(フィラコピ I 文化)。またこれらは、それぞれが EB I・EB II・EB III を代表する文化であり、その下位にカストリ・グループやアモルゴス・グループなどのバラエティが存在するとされた。そして、レンフルーの議論の眼目は、この3つの文化が、バラエティという形での地域差はあったにせよ、大筋においてキクラデス全体に共通して継時的に存在したというものであった。

こうして、文化編年の方法にはわかに流行の兆しを見せ、1977年にはドゥーマスもこの流れに沿って初期青銅器時代のキクラデスに8つの地域グループを認め、それらに基づく編年を行っている³³⁾。彼はナクソス島ラックゼス遺跡で自ら行った発掘により、それまでに知られていたG—P文化のそれよりも更に限定された(つまり古相の)土器組成を特徴とする文化内容が見出されたことから、G—Pをペロス・ラックゼス(P—L)文化と改称した他はレンフルーの構図を引継ぎ、そのもとに、それらの地域グループを配置したのである。ドゥーマスによれば、P—L文化には、ラックゼス・グループ、ペロス・グループ、プラスティラス・グループの3つが含まれる。羽状刻文や梨形の壺といったP—L文化に特徴的な要素とフライパンのようにK—S文化に特徴的な要素とを合せ持っているカンボス・グループは、その過渡期にあるものと理解される。K—S文化は、シロス・グループによって代表される一方で、カストリ・グループとアモルゴス・グループもこれに含まれるが、カストリ・グループとアモルゴス・グループとは共にフィラコピ I に並行し、時期的にはEB IIIに位置づけられる。

この最後の点は、いささか居心地の悪い印象を与える。なぜならば、時期的に区別されるべきものが同一の文化に含まれてしまうからである。そのこと自体は文化編年の特性を考慮すれば問題ではないが、それならば何故P—L文化・K—S文化といった中途半端な枠を設定しなくてはならないのか。実際、ドゥーマスは後にこの「文化」という枠を放棄して、EC I・II・IIIという伝統的な時期表示と自らの文化グループとを組み合わせる折衷的な立場をとり、さらに最近では個々の文化グループをも伝統的な時期表示で代替しよう(例えばカンボス・グループをEC II Aと表記するように)しているようである³⁴⁾。

しかし、編年のシステムと呼称に相違はあっても、ここまでのところは、アモルゴス・グループやカストリ・グループのフィラコピ I 市に対する関係が余り明確になっていなかったという点を別とすれば、初期青銅器時代キクラデスの歴史の概略は、レンフルーの提示した線でほぼ見解がまとまっていた模様である。しかし、残されたその点こそが、やがて重要な問題を提起することになるのである。しかし、それに立ち入る前に、その論争のきっかけを与えた研究を振り返っておく必要がある。

1980年に、バーバーとマックギリヴェイは、既に流行が下火になっていた文化編年を廃止して伝統的な編年に立ち戻ることを提唱したが、それに付随して、EC IIIに対して二つの下位区分を設定


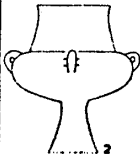
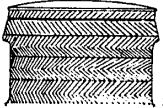


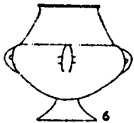
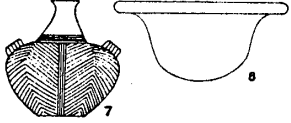
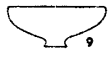





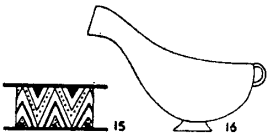




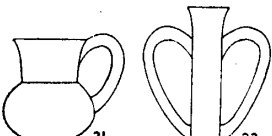



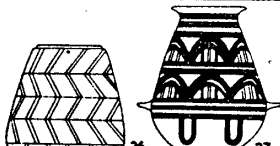
	SMALL BOWL SAUCER	SPHERICAL PYXIS	FRYING PAN	DUCK VASE	FOOTED JAR	JUG	FORMS CONFINED TO SPECIFIC PERIODS
I KARIS							
							
II	 						
III _A							
III _b							

Fig 3. Early Cycladic vase forms, reproduced from Barber and MacGillivray (1980) p. 148. ILL. 2.

すべきことを説いた。即ち、従来 EC III の基礎資料であったフィラコピ I 市（正確には I | ii/iii）やパロス島パリキア遺跡の内容を EC III B、ケア島アイア・イリニ遺跡の第 3 期（土器フェイズ C = アイア・イリニ III）をはじめとするカストリ・グループの内容を EC III A として、両者の差は地域差ではなく時間的な差であると主張したのである³⁵⁾。

実際には、バーバーらも認めるように両者（文化グループで言えばカストリ・グループとフィラコピ I・グループ）が明確に層位的に重畳して検出されている遺跡は未だに存在しない。しかも、これに先立ついくつかの論文では、バーバーはカストリ・グループをある時はフィラコピ I—iii より早いもののアモルゴス・グループなどと同様に漠然と EB III の地域性を示すものとしたり、またある時はそれをフィラコピ I—iii が南キクラデスで盛行していた時期に北キクラデスに存在した文化である（即ちそれらの差は地域差である）と規定していたのであるから、1980 年になされた主張はいささか唐突な観を与える³⁶⁾。それでは、何がバーバーをしてその編年観を転換させるに至らしめたのか。

一つは、フィラコピ遺跡出土遺物の再検討を通して、同遺跡 I—iii の文化内容が、少なくとも外部（特にギリシャ本土のアルゴリス地方）との並行関係を重視する限り、中期青銅器時代に接近して置かれなくてはならないという認識に達したことが挙げられよう³⁷⁾。とりわけ、フィラコピ I の

バレル・ジャーと中期ヘラディックのマット・ペインテッド土器との関連は否定しがたい上に、フィラコピ I に特徴的なダック・ヴァーズは、本土では明確に中期ヘラディックのコンテクストからしか出土しない³⁸⁾。また、もう一つの理由となったのは、シロス島アイオス・ルーカスの墓域にある墓の一つから、フィラコピに特徴的な円錐形ピュクシスとカンタロス形のミニュアス土器が共伴して出土している事実であり、バーバーはその共伴関係が追葬などによるものではないことを立証する過程で、フィラコピ I がエーゲ海の他地域との関連では、EB というよりも MB の初めに並行するであろうという編年観を強くしていったものと推察される³⁹⁾。

ともあれ、フィラコピ I を MB とオーヴァーラップするように位置付けるからには、キクラデスにおいて他地域の EB III (少なくともその古相) と並行しているのは何かという問題が新たに生まれ、それをバーバーはケア島アイア・イリニ遺跡で層位的に確認され、レフカンディ I の名でクローズ・アップされつつあった文化と同一の内容を持つカストリ・グループに求めたのであろう。こうして彼は、初期青銅器時代キクラデスの各時期を特徴づける土器組成を表に示し (Fig. 3)、これでキクラデスの編年は伝統的な三時期区分の修正案という形で確立されたかに見えた。ところが、カストリ・グループに EC III A という編年上の地位を与えて、K-S文化 (EC II) とフィラコピ I 文化 (従来の EC III) を一連のものとして把握しようというバーバーの試みに対しては、EC III A の他地域との並行関係 (既に指摘したように、バーバーが EC III A に下位区分を設定せざるを得なくなった最大の理由は EC III B の他地域との並行関係であり、EC III A のそれは副次的にしか考察されていなかった) をめぐって新たな問題が提出されることになる。それが、いわゆる EB III ギャップ論争である。

I-3 EB III ギャップ論争とその含意

ギリシャ本土、とりわけレルナを始めとするペロポネソス半島北東部 (アルゴリス) の諸遺跡で EH II 末に看取される文化の断絶を解釈するために、西アナトリアからの侵入要素の在り方に着目していたラッターは、1979年のモノグラフで EH III の土器組成の起源を論じつつカストリ (レフカンディ I) ・グループの土器を包括的に扱っていたが、1983年にはキクラデスの文化シークエンスに独自の視点から再検討を加え、本土の EH III に相当する時期のキクラデスには約100年から150年のギャップがあったのではないかと、という新説を提示した⁴⁰⁾。ギャップという言葉は、後にはラッター自身によってニュアンスが弱められてしまうものの⁴¹⁾、少なくともこの時点では「非居住期間」を合意していたことは疑いが無い。また、それに伴って、バーバーらが先に EC III A と呼ぶことを提起したカストリ・グループは、EC II B (EC II A は従来の EC II であるシロス・グループと定義し直された。ここで注意しておく必要があるのは、後者の試みが、一般に受け取られているように単なる呼称の変更を意図している (EC III A と表記しても、EC II B と表記しても、カストリ・グループが編年的に K-S文化のシロス・グループとフィラコピ I 文化の間に置かれることに変わりはない) のではないという点である。ラッターが初期青銅器時代エーゲ海の編年作業を行う

際に基礎としているのは常にレルナにおける層位の変遷であり、ラッターがカストリ・グループはECⅢAではなくECⅡBと呼ばれるべきだと言う時、それは、カストリ・グループの文化内容を示す集落がしばしば後代に続くことなく断絶するという現象が、レルナⅢ(EHⅡ)の「瓦屋根の館」の焼壊を始めとしてアルゴリスの諸遺跡で観察されているEHⅡ末の断絶と密接な関連を持つ歴史的事象として把握されなくてはならない、ということの意味しているのである。

これに対して、バーバーとマックギリヴレイが直ちに反論を展開したのは当然であろう。バーバーは、方法論の問題として、キクラデスの問題は外部からの証拠(本土やクレタとの比較)によってではなくキクラデス内部の証拠によってまず論じられなくてはならないと説き、ECⅢAとⅢBの連続性、具体的にはECⅠからカストリ・グループを経てフィラコピⅠの早い時期(I—ii)まで続く、器表面が暗褐色でしばしば刻文を伴う土器群の存在を強調することによって、ラッターの示唆するギャップを否定する⁴²⁾。一方でマックギリヴレイは、ECⅢAと本土のEHⅢとが時間的に対応することを再三に渡って主張している⁴³⁾。ラッターは、本土のEHⅢにあたる時期にキクラデスではギャップがあったと述べているので、ECⅢAとEHⅢが時期的に並行していることが証明されれば、ギャップを想定する根拠が失われるという論理である。明らかに、同じことを主張するにも、バーバーのあいまいな連続性の強調よりは、マックギリヴレイの議論の展開の方がラッターの説に対して正面から反論を加えているかのように見える。

ところが、興味深いことに、論争が最初に提起された1983年ばかりでなく、それが再び議論された翌年のワークショップでも、バーバーとマックギリヴレイは、共同発表ではなく同様の議論の分担を行っている。即ち、バーバーがECⅢAとⅢBとの連続性を議論すれば、マックギリヴレイはECⅢAがエーゲ海全体から見ればEBⅢであることを示して、共にギャップの存在という仮説を否認する⁴⁴⁾。これは、そもそもの議論の発端である新しい編年観を提示した1980年の論文が共著であったことを考慮すると、いささか奇異な観を与えざるを得ない。基本的に同じ編年観に立ちつつも、両者の間に何らかの表面に出ない意見の相違があるのではないかと推測したくなる所以である。もしこの推測が的を得ているならば、その相違は何をめぐるものであろうか。

筆者は、それがECⅢAの本土に対する相対的な位置づけに他ならないのではないかと考えている。バーバーは、ECⅢAがEHⅢと並行していたことを実証できればラッターの説を決定的に崩せることを知悉しつつ、その可能性に対して内心否定的なのではないかと見られる筋があるのである。実際、カストリ・グループはEHⅡともEHⅢとも排他的には比較できない。逆に、カストリ・グループをEHⅡと比較しようとする議論も、EHⅢと比較しようとする議論も、それなりに説得力を持つ証拠を提出してきている。ラッターもマックギリヴレイも自説に都合のよい資料を提示してこと足れりとしているが、両者よりも状況に通じているバーバーは、そのような比較の困難を認識して、あえて別な線で議論を構築しようとしているのであろう。

しかし、そのような事態、ある文化グループが隣接地域で明確に時期と内容を異にする二つの文化グループと比較し得るという事実は、何を意味しているのであろうか。最も単純な解釈は、問題

の文化グループが時間的にそれらの間に介在する（あるいは両者とオーヴァーラップする）と考えることであろう。G—P文化とK—S文化の双方の文化要素を備えたグループ（カンボス・グループ）が時間的に両者の間に位置づけられていることは既に見た通りであり⁴⁵⁾、カストリ・グループをEC II—IIIという更に別の名称で呼ぼうとする立場は、まさにこれに倣っている⁴⁶⁾。しかし、単純な解釈からは、単純な歴史像しか生まれてこないであろう。それ以外の解釈の可能性は、存在しないのか。

I—4 問題の提起

二つの文化の比較は、双方の文化内容（現実的には土器を始めとする遺物の組成や葬制の実態、セツルメント・パタンなど）が明確に規定されて初めて可能となる。これまで紹介してきた議論の中では、果たしてその基礎的な手続きが十分に行われてきているであろうか。答えは、否である。少なくとも、アルゴリスにおけるEH II及びIIIのそれを除いては否である。

問題は二重である。まず本土においてアルゴリス以外、とりわけ後述するように北キクラデスと直接的な関係を持っていたと考えられるアッティカの様相が不明であること。そして、鍵となるカストリ・グループの内容が、立ち入って検討されていないこと。

アッティカ及びヴィオティアの初期青銅器時代については別途論じる予定であり、詳述は避けるが、要点だけを述べるならば、それらの地域にレルナ（アリゴリス）で確立されたギリシャ本土のヘラディック文化圏に広く妥当するとみなされている編年体系をあてはめることは、はなはだ危険であると言わなくてはならない。例えばマックギリヴレイは、ラフィーナ（アッティカ）の住居址A床面からの遺物について論じる際に、EH IIのライトフォルムであるソース・ボートとソーサーがアッティカではEH IIIにも存続したと述べている（これは彼がそれらに伴って出土したカストリ・グループの土器をEH IIではなくEH IIIに置く根拠の一つとなっている）が⁴⁷⁾、この陳述は、事実としては認められる可能性があっても方法論的には誤っている。なぜならば、我々はカスキーとともにソースボートやソーサーの存在を特徴とする時期をEH II、彩文土器やミニュアス土器の登場する時期をEH IIIと呼ぶと約束したのであり、何らかの限定を付加するか、新たなアッティカの地域的編年体系を提示することなくソースボートがEH IIIにも存在すると主張することは、論理的に矛盾をきたすからである。

一方で、カストリ・グループ（EC III, III A, II B, レフカンディ I etc.）と一口に呼ばれている文化内容は、具体的にはどのような要素から構成されているのであろうか。確かにレンフルー以来、ドゥーマスやバーバーらによって様々な定義が行われてきたが、それらは第二部で検討するように、必ずしも相互に一致している訳ではない。また、それらがセットで出土することはきわめてまれであり、通例は、その漠然とした土器組成の一例が存在すれば、その遺跡はカストリ・グループの遺跡と呼ばれている⁴⁸⁾。しかも、カストリ・グループの特性が云々される時、ほとんどの場合に、それは個々の要素（具体的には土器の器形）とその相互関係の緻密な検討を経ずして、ある

目立った要素だけでアオリストのグループ全体を代表させることができるかのように、議論が運ばれている。デパのように明確にアナトリア的な器形が存在するだけで該グループのすべての内容がアナトリア的であると判断したり、エポニム・サイトのカストリが防御指向的な立地をとっていることを理由に該文化グループがエーゲ海に展開した時期は騒乱の時期であると特徴づけてしまうのは、まさにこの傾向の表れに他ならない。

以上のような観察から導き出される認識、そしてそれが要請する課題は、以下のように整理することが出来る。まず、カストリ・グループの内容を究明することが、初期青銅器時代のキクラデスの文化変遷の実像を理解する鍵であること。そのためにも、これまでカストリ・グループを認定する基準とみなされてきた要素を、改めて洗い直すこと。次に、それらの各々の遺跡における出土コンテキスト、他の要素との共伴関係を明らかにすること。更に、それらを通してこれまでに概観してきたような研究史の経緯の中であいまいなままに残されてきたカストリ・グループの像を新たに提示するとともに、それを初期青銅器時代のエーゲ海というコンテキストの中に正しく位置づけること。そして、それを初期青銅器時代の終末という先に述べたようにギリシャの先史時代の中でも最もクリティカルな時期の歴史事象を理解する一助とすること。

Ⅱ カストリ・グループの検討

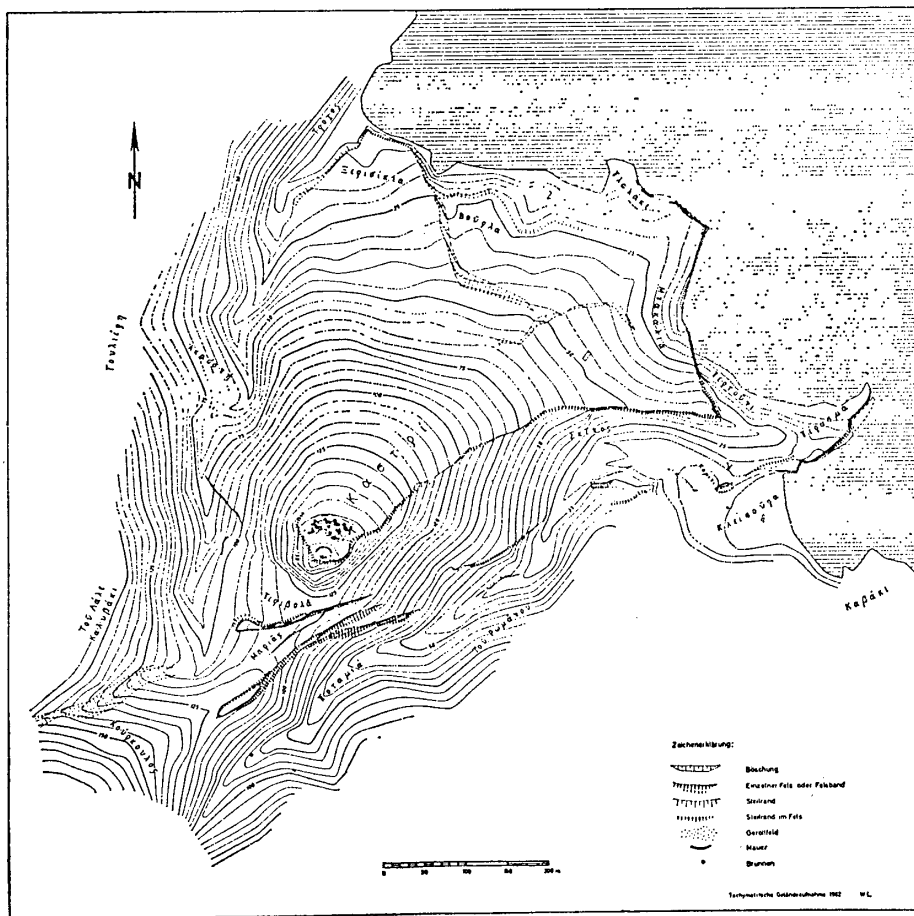
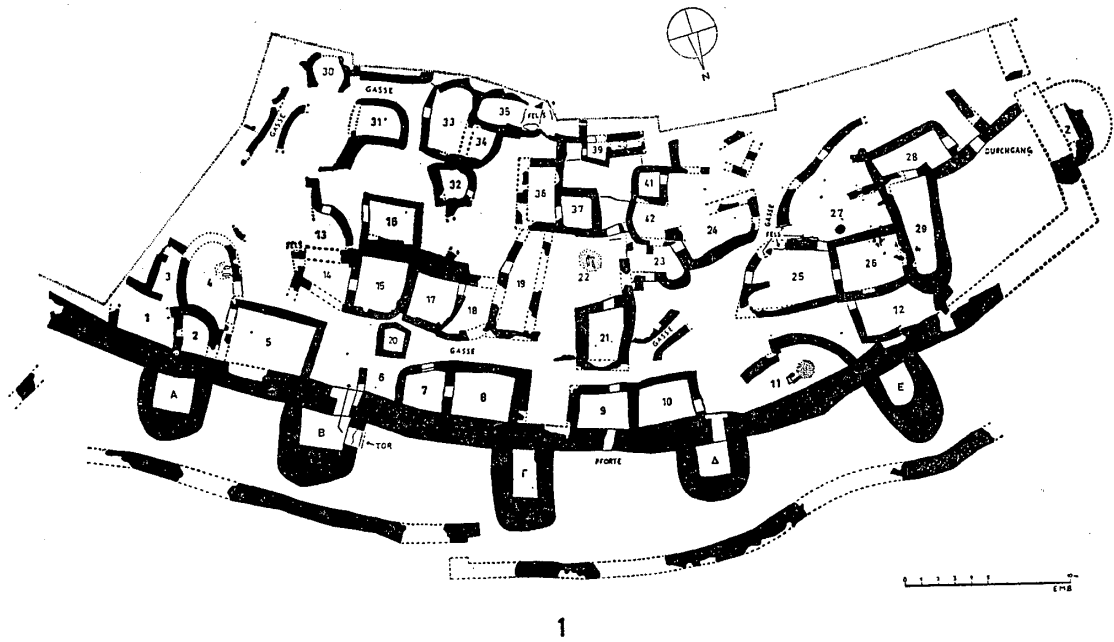
Ⅱ-1 カストリ・グループのタイプ・サイト

これまで提示されてきているカストリ・グループの定義は、次章で見るように、多かれ少なかれその出発点をシロス島カストリ遺跡の出土遺物に置き、エヴィア島レフカンディ遺跡、ケア島アイア・イリニ遺跡からの知見を主に参照して行われている。従って、ここではそれらの遺跡の立地上の特性、確認されている遺構及び出土遺物の特徴について、初めに述べておきたい。

地理的にキクラデス諸島のほぼ中心に位置するシロス島 (Fig. 2) は、植生に乏しい(とりわけ海に面した側は乾燥した岩肌がむき出しになっているのが通常である) キクラデスの島々の中でも最も不毛な印象を与える島のひとつで、面積も比較的小さいが、東岸にあるその中心市エルムーポリは、中世以来、海上交易の、また宗教上の要地であり、現在なおキクラデス県の県庁所在地として繁栄している。アテネの外港ピレアスを出てエーゲ海の島々に向かうフェリー・ボートの多くがエルムーポリに寄港するため、ローマン・カトリックの丘(アーノ・シロス)とオーソックスの丘という双子の丘の斜面に広がる美しい家並の遠景、瀟洒なテロニオン(税関)の建物と港の賑わい、そしてドックから聞こえてくる力強い槌音の響きは、観光に大きく依存する他の島の港とは全く異なる色彩と活気を伝えて、エーゲ海を旅する者には親しい風景となっている。

ピレアスからの船は、エルムーポリに入港するに先立って島の北東端をまわりこみ、東岸の岩斜面に沿って南下することになるが、南にコースを変えて間もなくすると、頂きの鋭く尖った直線的なプロフィールを持つ裸の岩山が海際からそそりたっているのが視界に迫ってくる(Plate I-1)。こ

カストリグループと初期青銅器時代のエーゲ海



2

Fig 4. Settlement plan (1) and map (2) of Kastri

れが、前世紀の末にツンドラスによって、また60年代の初めにボッセルトによって発掘されたカストリの城塞である⁴⁹⁾。陸路エルムーポリから行くには、まずアーノ・シロスまで登り、そこから更に山あいに入って放棄された段段畑の目立つ標高400mほどの高地を北に歩き続け、ハランドリアニの寒村に達する。ツンドラスが大規模な墓域を発掘したのがここである。カストリの城塞は、そこから深い峡谷を隔ててすぐ北にあるが、カストリの頂上からは東に向かって稜線が走り、そのハランドリアニ側は急峻な崖となっているために、ハランドリアニからアプローチするのは見掛けほど容易ではない (Fig 4. Plate I-2)。

二重の城壁は、唯一の緩斜面が広がる海(北)側に面して設けられ、内壁には少なくとも五つのU字形稜堡がほぼ等しい間隔をおいて外に向かって張り出し、集落への出入りもその稜堡の一つ(B)を通して行われていたものと見られる (Fig 4)⁵⁰⁾。周壁の内部には、一つないし二つの部屋からなる不整形の小さな家屋が密集している。3つの部屋 (R 4, 11, 22) で石組みの炉が見つかるが、そのうちの一つ (R11) の炉 (Plate A-3) では、焼けた土器片や炭と共に青銅の鉋滓が検出されている。R11からはるつぼも出土しているが、同様のるつぼはツンドラスによる調査の際にもR 5, 20から出土している。R11からは、黒曜石の石刃や各種青銅製品も一括して出土している。

出土遺物の中でまず土器について見ると、水差し状土器、ベル・カップ、口縁が外反し胴部に刻文をともなり小鉢 (以下カラード・ピュクシスとする)、デパス・アンフィキューペロン (以下デパと略)、アスコス (以下プロト・ダックヴァーズとする)、浅鉢、シャーレ状土器などの器形が見られる (Fig 5.)。水差し状土器は、いずれも20cmから30cm程度の器高を有していたとみられ、頸部の径が比較的大きいものとより細長い頸部が上に突出するものとの変種があり、把手は管状である。ベル・カップは器壁が直立し、その把手の上端は口縁より低い位置にある。浅鉢の器形は、大理石製の例を除いて、足部を欠いている。

金属器には、青銅の短剣、槍先、手斧などの工具があり、特にR11からの資料は、知られている限り、砒素ではなく錫を含む青銅で作られているようである。なお、ツンドラスによる発掘の際には、銀製の頭飾り (ダイアデム) も出土している。石製品には、大理石製で足部を持つ浅鉢、化粧材用と見られる鼓状の磨石、黒曜石の石刃などがある。石偶はない。

エヴィアはクレタについてギリシャで2番目に面積の広い島であり、本土のヴィオティア及びアッティカに平行して、その北東に狭い海峡を挟んで延びている。本土とエヴィアとが最も近接するハルキスで橋を渡り、ヴェネチアの塔が林立する肥沃なレランティン平野を南下すると、ヴァシリコという小村に至るが、ここから海に向かって道を辿ると、頂部の平坦なマウンドが海際から穏やかに隆起しているのが目に入ってくる。これが長さ約500m、幅約120m、頂部の海拔約17mの規模を持つレフカンディのクセロポリスである (Plate II-3)。発掘は、土地所有権の問題がからみ、頂部の北東端の限られたグリッドで行われているのみであるが、そこでは、部分的に地表下8.5mに達する層位が得られている⁵¹⁾。

問題の遺物アッセンブリッジは、最下層のフェイズI (レフカンディI) に由来している。フェ

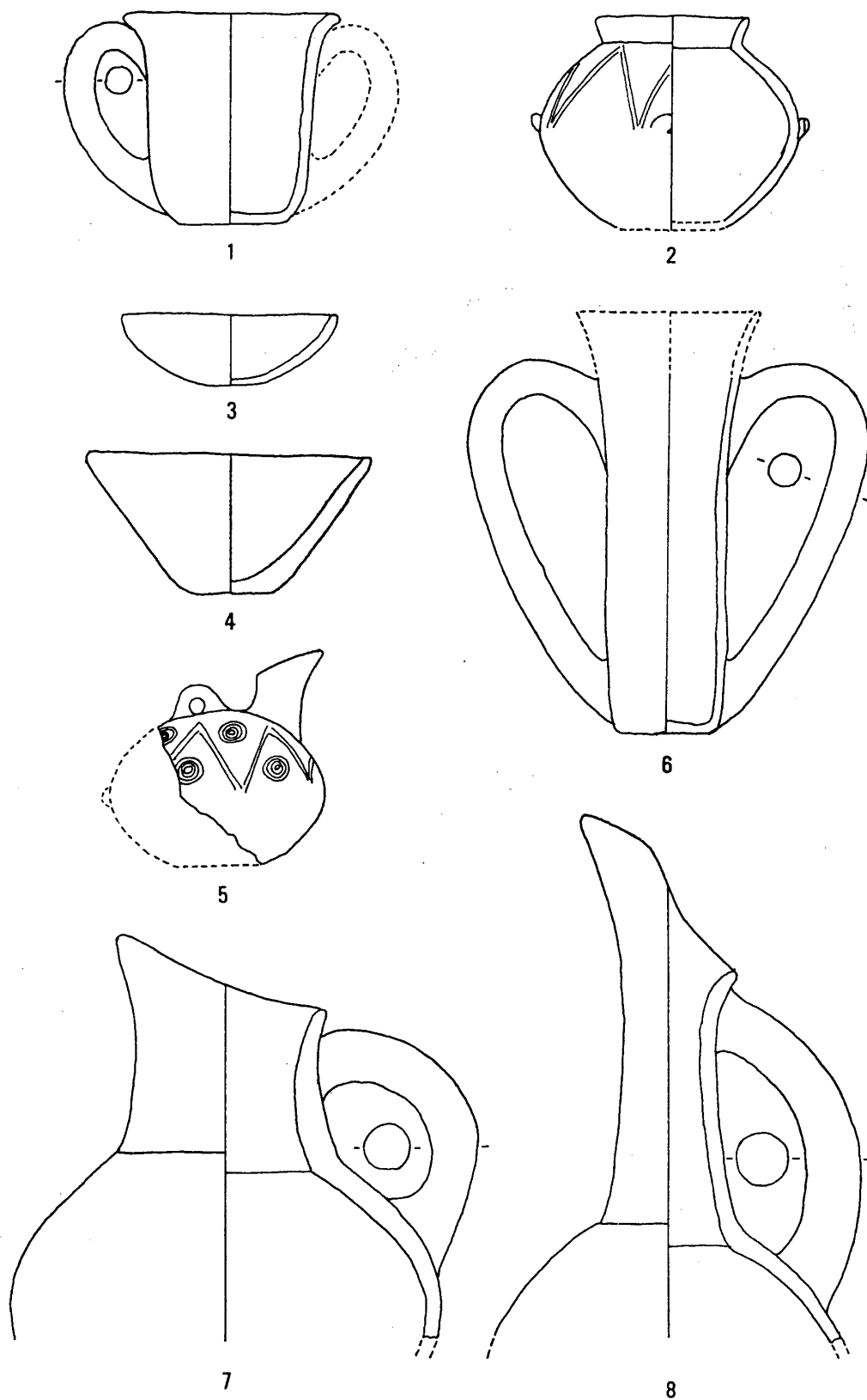


Fig 5. Finds from Kastri

イズ I の中でも複数の層位が観察されているが、それらの間に大きな文化内容の差はないと考えられている。土器の器形には、浅鉢（プレート状の例、口縁の内傾する碗状の例を含む）、ベル・カップ（特徴的な把手を欠く例も含む）、多数の片把手付きカップ、そして僅かながら水差し状土器が存在するという（Fig 6）。建築遺構については確定的なことを言い得る状況ではなく、土器以外の出土遺物についても情報はない。

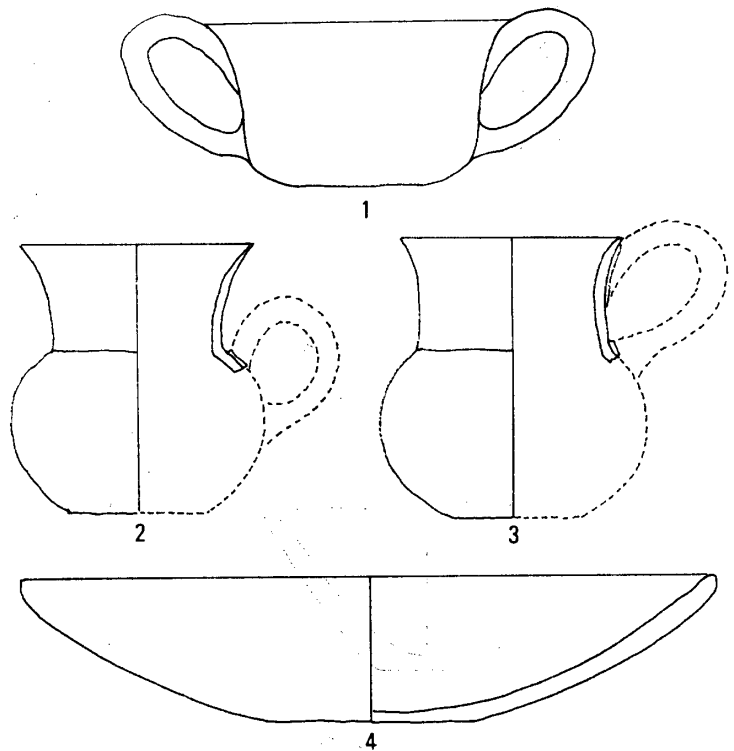


Fig 6. Finds from Lefkandi

クレタやドデカニソスを含むエーゲ海の南半の主な島々が、今日ではピレアス（時に

ラフィーナ）の港から出る大型フェリーによってギリシャ本土と結ばれているのに対し、ケア島だけは、アッティカ南部のラヴリオンの小港と結ばれている。従ってケアに渡るためには、アテネの中心部から何らかの交通手段によってラヴリオンに出なくてはならず、その不便さが、この本土に最も近いエーゲ海の島を観光産業による自然破壊と俗化から守っているとも言えるだろう。ラヴリオンを出港した船は、今日無人島となっているマクロニシとの間の海峡を進み、約2時間後にケア北西端にあるメイン・ポートのコリシアに入港する。アイア・イリニの遺跡は、このコリシア及びヴルカリという二つの集落がそれに面する内湾の最も奥まったところに位置する小さな低い半島上に立地している⁵²⁾。

我々が問題とする土器群は、同遺跡神殿参道下の赤褐色土層、住居址E及びD、建築遺構Ⅹの埋土、住居址FのR1下及びその北の初期青銅器時代層などから検出されており、土器フェイズCとして把握されたそれは、アイア・イリニⅢ期を特徴づける資料となっている。主な土器の器形には、片把手付きカップ、ベル・カップ、浅鉢などがあり、少数ながら、デパと水差し状土器、彩文を伴うカップも存在する。住居址E（Plate II-1）では、ソース・ボートを特徴とするアイア・イリニⅡ期の住居（R1-2）の壁を一部利用する形で新たな住居が建てられ（R3-7）、住居址Dは、更にその一部を利用して作られている。Ⅲ期の土器は、R1-2の床面を覆う硬い赤色埋土中に、ベル・カップ及び浅鉢の器形で初めて現れ、続くR3-7では、R3の床面直上から黒色磨研の片

把手付きカップが出土している。R 3とR 7とが石材によって埋められているのに対し、R 2及びR 4—6の床上には赤色埋土があり、その中から片把手付きカップ、デパ、浅鉢、レンズ形の胴部を持つ水差し状土器などが出土している。それらの上には住居址Dの床に貼られた板石があり、それはR 1—2の硬い赤色埋土の上まで延びている。この板石による床面上からもⅢ期の土器が報告されているが、その内容は不明である。その更に上を、遺跡全体に広がりEB末の同遺跡の放棄を示すとされる焼土層が覆っている。それ以外の建築遺構における該期のシーケンズは分からないが、少なくともアイア・イリニでは、カストリ・グループの文化内容を含む時期が、一定の時間幅を持って存在したようである。なお、ここでも土器以外の遺物に関する情報は乏しい。

Ⅱ—2 カストリ・グループの定義

カストリ・グループを初めて明確に独立した文化の下位単位として認定したのは、レンフルーである。彼はハランドリアニ出土の特徴的な黒色磨研の土器群に現れる器形と隣接するカストリからの資料を比較し、それらの間にはカラード・ピュクシス以外に共通する器形が存在しないものの、レフカンディ及びアイア・イリニからの資料と対比するならばそれら全体を単一の文化グループとして把握できるという認識に達し、これをK—S文化のカストリ・グループと名付けたのである⁵⁹⁾。そして、これをK—S文化の後半に置き、対外的にはEBⅢに位置付けられると考えた。

これに対し、墓の形態を論じたドーマスは、やはり土器の器形に着目しつつ、カストリ・グループの特徴を次のように定義した。「カストリ・グループの土器は、茶色から黒色を呈し、器表面は顕著に磨研されている。その器形は、アナトリアのEBⅢのそれと類似性を示し、キクラデスとアナトリアとの密接で直接的な関係を暗示している。最も特徴的な土器の器形は、球形に近い胴部と幅の広い頸部をもつ片把手付きカップ、デパ、水差し状土器、カラード・ピュクシス、その変種でチューブ状の注口部を持つもの、やはりチューブ状の注口部を備え円錐形の足部を持つボウル、それにプロト・ダックヴァーズであり、それらはキクラデスに広く分布していた。」

一見して明らかなように、カストリ・グループとは言うものの、ドーマスの定義には二度に渡るカストリ遺跡の調査からは全く知られていない土器の器形が含まれている。片把手付きカップ、注口部を持つピュクシス、注口部を持つボウルの3器形がそれである。なぜ、それらがカストリ・グループの文化内容に含まれているのか。ドーマスは明言していないが、これは彼が主にハランドリアニを始めとする墓域での観察によって得られた知見を基にしているからだと考えられる。一方で、ベル・カップが定義の中で言及されていないのは、それがハランドリアニの墓域からは出土していないためであろう。だし、もしそうであれば、やはりハランドリアニにないデパが含まれているのは、一貫性を欠くようにも思われる。

レンフルーの仮説を継承してエヴィアのレフカンディⅠ文化とキクラデスのカストリ・グループが、アイア・イリニⅢを介して同一の文化として把握できるとするラッターは、やはり特徴的な土器の器形に着目しながら、ドーマスの定義からハランドリアニ（及びナクソス）でしか見られな

い注口部をもつ器形を除外し、むしろアイア・イリニの資料を基本としつつ、浅鉢（プレート）、片把手付きカップ、ベル・カップ、水差し状土器、デバ、刻文の施されたカラード・ピュクシスを挙げている⁵⁵⁾。これらのうちカラード・ピュクシスだけが、ラッターがこのリストを提示した当時にアイア・イリニからは知られていなかったが、それも同遺跡から出土していることが今日判明している⁵⁶⁾、この器形をもってカストリ・グループの基本的と土器組成とみなすことは、ある程度説得力があると言えよう。これに続けてラッターは、それらのうちカラード・ピュクシスを除く5器形までが西アナトリアに由来するものであることを論じているが、その議論は余り根拠のあるものではない⁵⁷⁾。

バーバーとマックギリヴレイによる編年観については先に紹介したが (Fig 3)、そこではプロト・ダックヴァーズが生かされ、ベル・カップが言及されていない。浅鉢の代表として壁面の湾曲し足部を備える例（即ち、典型的なEH IIのソーサーの器形）が挙げられている点は、疑問が残るところであろう。ただし後には、浅鉢は壁面のプロフィールが直線的なものと定義し直され、ベル・カップも付け加えられている⁵⁸⁾。むしろ問題は水差し状土器の例であり、後に議論するように、ラッターがカストリ・グループの水差し状土器とする器形（細長い頸部が突出し、胴部には刻文を伴わない）とは明らかに異なる型式の土器が示されている。

以上の代表的な研究者による見解からは、次のような点が明らかとなろう。まず、カストリ・グループの文化内容が論じられる際には、資料的制約から、差し当たり土器の特徴的な器形だけが議論の主な対象とならざるを得ないこと。カストリ・グループを特徴づけるとされる器形のレポート

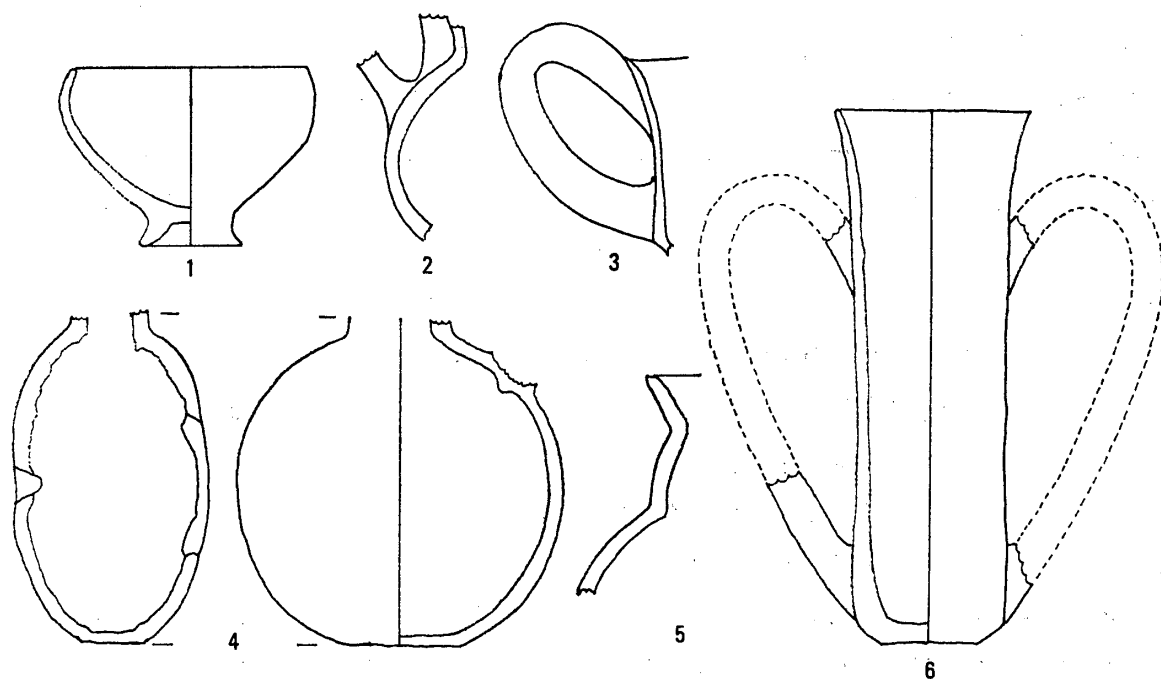


Fig 7. Finds from Ayia Irini

リーには、各研究者が共通して認めているもの（片把手付きカップ、デパなど）と、そうでないもの（プロト・ダックヴァーズなど）があること。そのような差異を生じる原因が、おそらくは文化グループを認定する際の手続きの相違（カストリやハランドリアニのような個別的な遺跡をタイプサイトとしてその内容を重視するか、先に内容的に類似する複数の遺跡を取り上げてその共通点を重視するか）にあるであろうこと。水差し状土器を始めとして、問題の器形のいくつかは再検討の余地を多分に残していること。

ここでは、文化グループとしてカストリ・グループが存在したという積極的な仮説のもとに、その仮説の要請に従って上述の二つの手続きの後者を選択し、カストリ、レフカンディ、アイア・イリニの遺跡の少なくとも2遺跡に共通して現れる要素を、次章で個別的に検討していく。

Ⅱ—3—1 片把手付きカップ

カストリ・グループの片把手付きカップは、円筒ないし逆円錐状の頸部と球形の胴部からなる器体に一つの管状の把手が付く。器高は10cmから15cmで、しばしば赤褐色ないし黒色の器面は強く磨研されて光沢を示し、磨痕が良く残っている例では通常それが横方向になされたことが観察される。頸部と胴部との間は、はっきりと段をなしていることが多い。逆円錐形を呈する頸部には、器壁が湾曲するものと直線的なものがあるが、後述するシフノスのアクロティラキ142号墓では両者が共伴しており、その相違に特に意味はないようである。それに対して把手の付く位置を見ると、1. 把手上端が口縁部に発する例（アイア・イリニ C43 など）、2. 頸部の途中から延びる例（ハランドリアニ392号墓出土例など）、3. 胴部につく例（レフカンディ出土例など）があり、これを基準として、3タイプを設定することができる。ただし、タイプ1であっても管状の把手の上端が頸部の中ほどから頸部に沿って立ち上がる例も多く、タイプ2との差異は連続的である。

このカストリ・グループの片把手付きカップは、キクラデスでは北西よりの島々、即ちケア・シフノス・シロス・ナクソス・デロスから、その例が報告されている⁵⁹⁾。既に言及したように、二度に渡って調査が行われているにもかかわらず、エポニム・サイトのカストリからは出土例が知られていない。ツンダスによって発掘されたシフノス島アクロティラキ遺跡142号墓は、この時期の墓としては異例の豊かな副葬品によって有名であるが、その中に4点の片把手付きカップが含まれている。赤色磨研の例はタイプ2の把手を、器表面にベージュ色のスリップが施された例はタイプ1の把手を備えている（Fig 8—5）⁶⁰⁾。ハランドリアニからは少なくとも3点が出土しており、タイプ3の1点は、同遺跡で注口部付きの器形にも現れる特徴的な黒色磨研の技法を特徴としている。ナクソスでは、少なくともパノルモス及びカストラキの集落から出土しており、タイプ2のカストラキ出土例は、底部が穿孔されている⁶¹⁾。この他にも出土例は知られているが、コンテクストの詳細は不明である。デロスのキンソス山からは、少なくとも16例が報告されている⁶²⁾。

エヴィアでは、レフカンディの他マニカから、アッティカでは、エギナのコロナ、ラフィーナの住居址A、トリコス第3採掘口付近などから知られている⁶³⁾。マニカと、アッティカに近接す

るケアのアイア・イリニでは、1から3のすべての例が知られており、レフカンディでも1と2の中間形が3と共存している。これに対しエギナ例はおそらくタイプ1、ラフィーナからの2例とトリコス例は、いずれもタイプ2である。エヴィアの北に浮かぶスキロス島パラマリからも、近年タイプ1の例が報告されている⁶⁴⁾。

カストリ・グループの片把手付きカップが分布する北限は、管見に触れる限りでは、マグネシアのヴォロス近郊であり、ペフカキアでは、試掘坑Ⅱから1例出土している⁶⁵⁾。把手の位置は不明である。

ヴィオティアでは比較的多くの出土例が知られており、あるいはこの器形が同地に起源した可能性を暗示しているかのようである。オルコメノスからの例は、いずれも管状ではなくリボン状の把手を備えている (Fig 8—2) が、これはEHⅡの土器に見られる一般的特徴からの影響であろう。同遺跡の報告書には、アイア・マリナからも1例出土しており、それが管状の把手を備えている点でキクラデスのそれに形態的に近いことが言及されている⁶⁶⁾。シーヴァでは、この器形は土器グループBの一要素として把握され、5地点で出土しているが、そのうちの1例は焼壊したアプス部付建築遺構の床面から検出されている⁶⁷⁾。エウトレシスからは2点出土しているようであるが、公にされているのは断片1点のみである⁶⁸⁾。これらの例は、いずれもタイプ1に分類できる。

北エーゲ海では、リムノス島ポリオクニ遺跡「黄色」期と「赤色」期に存在するが、カストリ・グループの片把手付きカップに把手や頸部の形状に近いのは「赤色」期の例であり、常にタイプ3の特徴的な把手を備えている (Fig 8—7)⁶⁹⁾。

北アナトリアに入ると、カストリ・グループの片把手付きカップは、それほど一般的でなくなるようである。アナトリアのエーゲ海沿岸部における青銅器時代の文化内容が論じられる際に常に参照されるトロイでは、この器形に対応する土器は存在しない。2つの把手を持つ器形には、その他の点でカストリ・グループの片把手付きカップに近いものもあるが、これはエーゲ海では全く知られていないアナトリア独特のものである (Fig 8—9)。アナトリア沿岸部のレスボス島セルミ遺跡、キオス島エンポリオ遺跡でも、その周到な調査にもかかわらず、問題の器形は報告されていない。

しかし、南下してサモス島のヘライオン、南アナトリアのイアソス、やや内陸のアフロディシアス、キリキアのタルススなどからは、カストリ・グループの片把手付きカップとみなしうる器形が報告されている (Fig 8—10)⁷⁰⁾。ただしそれらの多くは、エーゲ海から出土する例に特徴的な器形の均整を失っている。興味深いことに、アナトリアからの例は、そのほとんどがタイプ3の把手を備えている。

片把手付きカップという器形は、K—S文化 (あるいは本土のEHⅡ) より先行する文化には全く現れないが、アッティカ及びエヴィアには、カストリ・グループのそれとは明確に区別されなくてはならない例がある。それはアッティカのアイオス・コズマスから大量に出土しているものに代表される器形であり片把手付きカップとはいえ、器高に比して胴部径 (並びに口縁部径) が大きいために、全体がしばしば上下に押し潰されたような形状を示すとともに、把手は多くの例で口縁部

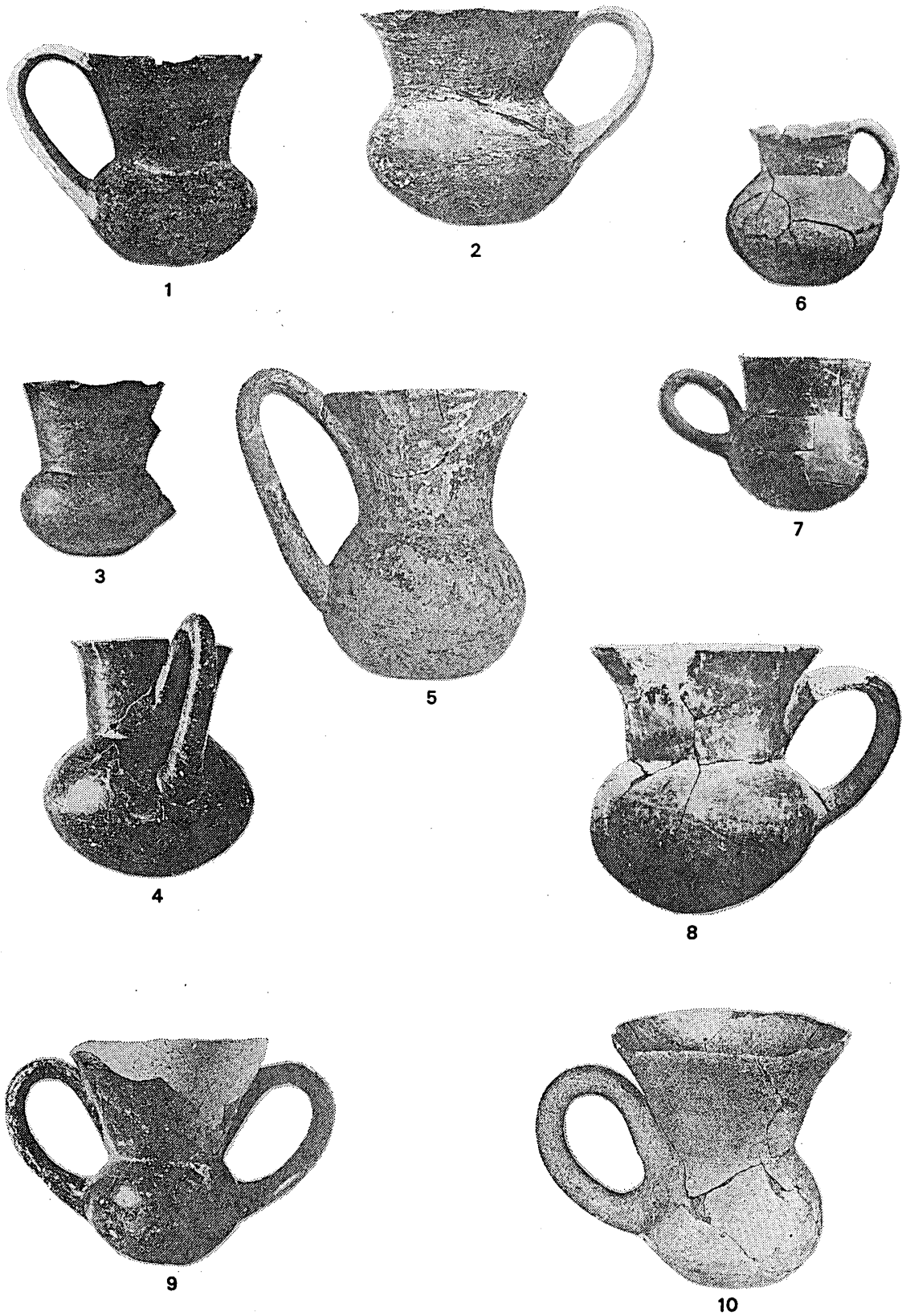


Fig 8 Various one handed cups of the Kastri group and related shapes.

から上に延びる（カストリ・グループの片把手付きカップでは、1の例で把手が口縁より顕著に突出することは少ない⁷¹⁾。しかし最大の特徴は、カストリ・グループのそれを特徴づける器表面の赤色ないし黒色磨研がほとんど観察されないことであろう⁷²⁾。

興味深いことに、このアッティカ及びマニカのヴァリエーションは、常にカンボス・グループの（より正確には本土タイプの）フライ・パンと共伴する⁷³⁾。アイオス・コズマスにおいては勿論のこと、マラトンのツェピ遺跡においても、9号墓でこの組み合わせが知られ⁷⁴⁾、マニカではサプーナ・サケララキスの新発掘による7号墓で、このタイプの片把手付きカップが6点ものフライ・パンと共伴している⁷⁵⁾。サプーナ・サケララキスは、この事例をもって「マニカでは片把手付きカップがフライ・パンと共伴することは決してない」という Sampson の観察は誤りであることが判明したと主張するが、これは全くの認識不足であり、このヴァリエーションを識別するならば、Sampson が正しく観察しているように、少なくともマニカでは、フライ・パンとカストリ・グループの片把手付きカップは、相互に排他的に副葬されている⁷⁶⁾。このように、問題の変種は限られた地域でソース・ポートや本土タイプのフライ・パンと共存したものであり、カストリ・グループとは関連の薄いアッティカ土着の文化グループ（さしあたり呼称は与えられていないが）の一要素として理解されなくてはならないであろう。

II-3-2 水差し状土器

水差し状土器 (beaked jug) は、球形もしくはレンズ状の胴部に先端部が様々の形状を呈する頸部を備える器形の総称であり、この器形そのものは、タンカードの場合と異なって様々な時期に豊富なヴァリエーションを伴って存在していたようである。トロイ関連の土器の研究においては、この種の土器の形態の細分は事実上困難であるとして放棄され、Sampson を始めとするエーゲ海の資料に立脚する研究者は、明らかに異なるカテゴリーに属すると思われる各地の水差し状土器を漠然とした器形の類似に頼りつつ同一視しているため、我々が拠るに相応しい形態分類は存在しない⁷⁷⁾。そのため、ここでも最初にカストリ・グループの3つのタイプ・サイトから出土している例の特徴を明らかにし、次にプライマリーなそれと同一視できるもの、間接的根拠によりそれと関連すると考えられるもの、そして最後にこれと直接的な関係を求めにくい（カストリ・グループの要素とみなすことができない）ものについて検討していく。水差し状土器の形態分類は極めて困難であり、ここでは上記の方法によって、器形の属性そのものを出発点とする検討は避ける。

カストリでは、水差し状土器は2種類の器形で現われている⁷⁸⁾。一つは比較的頸部の径が大きく長さの短いもの（タイプ1, Fig 5-7）、もう一つは頸部が細長く突出するものである（タイプ2, Fig 5-8）。タイプ1の二例は全く同一の胴部径（16.75cm）を示し、器高はいずれも20cm強であったと推定される。うち一例は、茶色のスリップが施されている。これに対し、明褐色のタイプ2例は器高が25cm程度あったものと推定されるが、その五分の三は頸部である。器面は顕著に磨研され、口縁部プロフィールはS字状に緩やかにカーブしている。いずれも把手は管状であり、胴部は



Fig 9. 1. Type 8 beaked jug from Spedos cemetery on Naxos, 2. collared pyxis from Mt. Kynthos, 3. spouted collared pyxis from Naxos, 4. painted footed cup from Akrotiraki on Siphnos, 5. Type 5 beaked jug from Chalandriani on Syros, 6. Type 5 beaked jug from Chalandriani.

装飾を欠いている。両ヴァリエティ共に独立した口縁部は作り出されておらず、頸部がそのまま口縁に続いている。ツンダスの発掘でもこの種の土器が出土したようであるが、詳細は不明である⁷⁹⁾。

アイア・イリニでは、水差し状土器は3種類のヴァリエティで存在している。まず、短く口径の大きい頸部を持つ器形(タイプ3, Fig 7—5), レンズ状のフラスコ(タイプ4, Fig 7—4), そして胴部に比べて極めて小さい頸部を備える例(タイプ5)。タイプ3と5では、カストリ出土の例とは異なり、外反する嘴状の口縁部が内傾する頸部から独立して作り出されているが、タイプ3の頸部が膨らみを帯びているのに対し、タイプ5のそれは円錐形を呈する。また、タイプ3が粗製かつ大形であるのに対し、タイプ5は比較的小形でしばしば胴部に刻文を伴っている。タイプ4の例は頸部を欠いているが、おそらく細長く突出する頸部を伴っていたであろう。

レフカンディでは、水差し状土器は僅かな断片でしか出土しておらず、同地においては何らかの理由によりこの器形は一般的でなかったらしい⁸⁰⁾。

このように、カストリ・グループのタイプ・サイトから出土する水差し状土器は5カテゴリーに分類できるが、カストリとアイア・イリニのそれに全く共通する要素が存在しないことは、注目値しよう。その状況は、ハランドリアニからの出土遺物に目を転じれば、更に明らかである。即ち、ここでは169号墓からタイプ5の例(Fig 9—5, 6)が知られる他は、プライマリーなカストリ・グ

ループの水差し状土器の器形は存在せず、新たに彩文を伴う一群の土器にその器形が現れている(タイプ6)。その頸部は十分に長くテーパの弱い円錐形を呈しているが、口縁部は頸部から連続的に外反する。同じシロス島アイオス・ルーカスからは、トレフォイル状の特徴的な口縁を持つ例(タイプ7)が、知られている⁸¹⁾。また出土コンテキストは不明であるが、グーランドリス・コレクションには、短い円筒状の頸部に外反する口縁が付き、しかも把手に刻文を伴う例(タイプ8)が収められている。これはドゥーマスによってカストリ・グループの文化内容であると注記されており、いずれも器高が10cmから15cm程度の小形のものである⁸²⁾。これに関連し、アッティカのアスキタリオからは、ソース・ポート状の注口部を持つ例(タイプ9)が知られ、やはり把手背面に刻文が施されている⁸³⁾。

タイプ1は、キクラデスでは余り一般的ではなく、管見の及ぶ限りでは、サントリーニに近いクリステリアナで大形のタイプ3とともに出土しているのみである⁸⁴⁾。ナクソス島ローディナゼスからの一例は、頸部上半を欠いているが、このタイプの可能性もある⁸⁵⁾。ギリシャ本土では、エウトレスでEHⅡのコンテキストから類似の器形は知られているが、粗製と言っても良いカストリ例とは比較し難い上に、本土の土器の通例に漏れずその把手は管状ではなくリボン状である⁸⁶⁾。エギナではⅢ市で、発展した段階のソース・ポートと共存している⁸⁷⁾。アナトリアではタルススに類例があるが、レスボスやアナトリアのエーゲ海沿岸には、このような器形は存在しない⁸⁸⁾。

細長い頸部を特徴とするタイプ2は、キクラデスでは他に類例がなく、その周辺部にあるエヴィアのマニカ、及びアナトリアに分布している。マニカからの出土例は、口縁部の形状は様々であるが、いずれもこのタイプに特徴的な長く突出する頸部を持つ⁸⁹⁾。カストリからの例が示すS字状の口縁部のプロフィールは、ここでは現れないが、その特徴こそがアナトリアを指向していることは、タルスス出土例などからうかがえる⁹⁰⁾。マニカからは、口縁部が槌状を呈し先端で開く例が知られるが、これもアフロディシアスに類例がある⁹¹⁾。

タイプ3も類例が少なく、アイア・イリニ例の他には、先に言及したクリステリアナ出土例を指摘し得るに過ぎない⁹²⁾。

タイプ4のレンズ状フラスコは、マニカ及びポリオクニ「黄色」で知られている⁹³⁾。マニカ出土の例の中でパパヴァシリウーの調査に由来するものは、同地のタイプ2例と同じく槌状で先端の開く口縁を備えている⁹⁴⁾。

タイプ5に至って初めて、我々はエーゲ海である程度の広がりをもって分布する型式を認めることが出来る。アイア・イリニ出土例については不明であるが、ハランドリアニ例は片把手付きカップや注口部付きの器形、ピュクシスなどと共通する黒色磨研の手法を特徴としている。その中の1例は、胴部が前後に長い合せ貝のような形を呈するが(Fig 9—5)、これと酷似する例がペフカキアから出土している⁹⁵⁾。縦方向に4本ないし5本一組の刻文を施す装飾も、同一である。やはり黒色磨研による例は、ナクソスからも出土している⁹⁶⁾。クリステリアナ出土例は、ハランドリアニやナクソスからの例に比べると大形(器高22cm—33cm)で、それらと同様の器形と器面調整(黒色

あるいは茶褐色磨研)を特徴としていることから報告者はこれらと同じグループに含めているが⁹⁷⁾, その装飾は隆線で施されており, サモスのヘライオン出土例とともに, 別のグループを構成するものかもしれない。このグループの例は, キクラデス以外では, レスポス島セルミ遺跡から知られているにとどまる⁹⁸⁾。

タイプ6は, 器形もさることながら, むしろ彩文という装飾様式によって認められるグループである。ハランドリアニ例は, 同地の他の彩文土器(ピュクシス, ラッパ状の脚部を持つ浅杯など)に繰り返して現れるモチーフによって装飾されている。ナクソス島では, フィロゲス(28号墓)でスペドス・ヴァラエティの石偶と共伴し, スペドス(10号墓)では, 小形の例が彩文によるソース・ボートに伴って出土している⁹⁹⁾。アッティカでは, これと比較し得る例がアスキタリオから知られている¹⁰⁰⁾。他地域に, 類例はない。

タイプ7のアイオス・ルーカス例は, カントロス形のミニュアス土器と共伴し, バーバーはこれをフィラコピ出土の例と比較して, 彼のいうECⅢBに編年する¹⁰¹⁾。トレフォイル状の口縁部はエーゲ海では異質な形態であり, アナトリアのヨルタン, タルススなどに類例がある¹⁰²⁾。

タイプ8に属する水差し状土器は, いずれも頸部が胴部に比べて小さく短いという特徴を指標としている。スペドス15号墓の例は, 通常の管状ではなくリボン状の把手を備えているが, その把手には, グーランドリス・コレクションの例と同様に, 刻文の装飾が施されている¹⁰³⁾。同遺跡17号墓には, いずれもこのタイプに属する2例の水差し状土器があり(Fig 9—1), うち1例は彩文によって装飾され, タイプ6との近親性をうかがわせる¹⁰⁴⁾。やはりスペドスの22号墓出土例は, このタイプのものとしてはやや大形であるが(器高18.5cm), 15号墓出土の例と同様に, 刻文の施されたリボン状の把手を持っている¹⁰⁵⁾。このようにコンテクストの知られている類例がすべてスペドスの墓域に由来していることは, グーランドリス・コレクションに収められている例もまた, ナクソスからもたらされたものであることを推測させる。なお, アモルゴス島のスタヴロスやイアナゼスからの例も, このタイプに含めて良いかもしれない¹⁰⁶⁾。

問題は, タイプ6以降のどれがカストリ・グループと関連するかという点である。Fig 3. に示されているように, バーバーはタイプ6の水差し状土器をシロス・グループを示す遺物とみなしている。これは典型的なEHⅡの内容を示すアスキタリオに類例があることから支持されよう。しかし, 後述するように, カストリ・グループの要素に彩文土器が伴う事実は否定できず, 彩文をもつことを理由にカストリ・グループと無縁であるとみなすことは出来ない。

タイプ8にもまた, 同様の問題が付随する。これらの例が出土するナクソスの墓域では, これらは決してシロス・グループの特徴的な遺物とは共伴しないので, 独立したグループをなしていることは明らかである。ただし, それを他の場所でカストリ・グループと呼ばれているものと直接に対比することは難しい。

これに対し, タイプ7は明確に時期が下がる。タイプ9はキクラデスに類例がなく, 片把手付きカップの項で述べたアッティカ土着の文化グループと関連があるようである。

II-3-3 ベル・カップ

ベル・カップは、口縁部の外反する杯に相對する2本の管状把手がつく器形をさす。把手の上端は口縁部の直下に発して弧状に伸び、その下端は杯の底部に至る。片把手付きカップの場合と同様に、把手が口縁部の高さを越えて上に大きく出ることはない。少なくともエーゲ海から知られている例は、比較的齊一的な器形をとる。

この器形に至って初めて我々は、カストリ・グループのタイプ・サイトと仮定した3遺跡に共通して存在する遺物を問題とすることになる。カストリでは、胴部がやや深く器壁のストレートな例が、一例報告されている(Fig 5-1)。アイア・イリニでは、より湾曲した器壁をもつ黒色磨研の例を始めとして、種々の器形でかなり一般的に存在していたらしい(Fig 7-3)。レフカンディでも、この器形は片把手付きカップと並んで多く出土し、報告されている例は、胴部が浅く口径が広い(Fig 6-1)。

キクラデスでは、デロス島キンソス山から、少なくとも11点が知られている¹⁰⁷⁾。No. 64と129の2例は、レフカンディ出土例と共通する特徴を示し、No. 421はカストリ出土例のストレートな器壁を、No. 436はアイア・イリニで知られるカリネートされた底部を備える。従って、細部において僅かに相違を見せるタイプ・サイトの3遺跡からの諸例は、デロスからの証拠により、同一範疇に含まれるものとして理解されよう。またナクソスでは、出土コンテクストは不明ながら、アピラソス博物館の収蔵品に黒色磨研の例が存在する¹⁰⁸⁾。

エヴィアでは、マニカにも類例が3点存在する¹⁰⁹⁾。スキロス島パラマリ遺跡からは、底部のカリネートされた例の断片が知られる¹¹⁰⁾。

アルゴリスのレルナでは、レルナⅣ(EHⅢ)のコンテクストから、この器形を模した石製品が知られており、カストリ・グループをEHⅢ比較する議論に常に引用される¹¹¹⁾。

北エーゲ海では、ポリオクニの「赤色」に双把手の杯が存在するが、 Sampson も指摘するように、キクラデスの例とは形態がかなり異なる¹¹²⁾。即ち、胴部は鐘状というよりはむしろ碗状であり、口縁部は外反する代りに内傾し、底部もキクラデスの例が偏平であるのに対し、ポリオクニ例は丸底である。Sampson は、サモス島ヘライオンからの例がキクラデスのものに近いとするが、これも胴部は碗状に近く底部は丸底である¹¹³⁾。

興味深いことに、トロイを始めとするアナトリアの諸遺跡では、この器形はきわめて稀である。

II-3-4 デパス・アンフィキューペロン

デパ(デパス・アンフィキューペロン)と総称される土器については、説明を要しないであろう。トロイにおけるライト・フォルムの一つとして、その特徴的な器形はエーゲ海とアナトリアに広く認められているが、一方でこれに対する型式学的研究は未だ十分には行われていない。差し当たりここでは、ポズヴァイトの形態分類に従うことにする¹¹⁴⁾。

カストリからは6例のデパが出土しているが、そのうちの4例は、ボズヴァイトのタイプⅠヴァリアント a に分類されている(Fig 5—6)。タイプⅠは基部が平底であり、a は把手の下部が基部につくとともに、胴部が基部に向かって細くなる特徴を備えていることを示す。アイア・イリニからの1例も、このグループに分類されている。他にサモスのヘライオンとペフカキアに類例があるが、やはり分布の中心はアナトリアであり、トロイではⅡ d 並びにⅡ g のコンテクストから知られている。

カストリ出土の1例は、タイプⅠヴァリアント c に属しているが、このヴァリアントは中程で膨らみを帯びた胴部を指標としている。エーゲ海域では、やはりペフカキアに類例がある。トロイでは同じくⅡ d とⅡ g に存在するが、アナトリアの中でもその分布はむしろ内陸(ないし東部)にあったらしく、類例はアラカホユック、キュルテペやタルススで知られている。

カストリからの残り一例は基部が円錐形を呈し、その特徴を指標とするタイプⅢに分類されている。このタイプはアイア・イリニで2例(Fig 7—6)、ペフカキアとサモスで1例知られている。トロイでは1例がⅡ d に存在する他は、すべてⅢに由来している。従って、少なくとも同地では、時期的に後出のタイプである。

ギリシャ本土では、ヴィオティアのオルコメノスから小形のデパが1例出土しており、その丸く突出する基部の形態からタイプⅡに分類されている。このタイプのデパはエーゲ海に類例がなく、トロイではⅡ g のコンテクストに存在する。

なお、カストリ・グループのタイプ・サイトの一つであるレフカンディからは、デパは報告されていない。

Ⅱ—3—5 浅鉢

カストリからは、円錐形の浅鉢(Fig 5—4)が1点、脚部を欠く大理石製の浅鉢(Fig 5—3)が2点、脚部を備える大理石製浅鉢が1点報告されているが、これらはいずれも典型的なシロス・グループの内容であり、一般にカストリ・グループの要素とは見做されていない。従って我々は、このエポニム・サイトにおいて、他の2つのタイプ・サイト及びこれまでその関連で言及してきたカストリ・グループの要素を持つ遺跡では全く見られない大理石製の浅鉢という伝統的なキクラデスの文化要素が存在することを確認しつつ、カストリ・グループの浅鉢を、レフカンディとアイア・イリニ出土の資料に求めることにする。

レフカンディの概報では、それぞれ異なった特徴を示す例が図示されている¹¹⁵⁾。1は器壁が緩やかに湾曲する口径の大きいもの(Fig 6—4)、2は直線的な器壁を持つもの、3は碗状で口縁が内傾するもの、4はやや直線的な器壁を持ち口縁が内傾するものである。いずれも脚部を欠き、底部は平担である。1にはアイア・イリニのC—3、4、5が、2にはおそらくC—34が、3にはC—10が、4にはC—35が対応している。ところが、アイア・イリニでは、先行する土器フェイズに脚部を備えるいわゆるソーサーが存在するのは勿論のこと、問題の土器フェイズにもそれと識別し

がたい脚部を持つ例 (Fig 7—1) があり、同遺跡でこの二つの時期が連続的であることを示す証拠とされている¹¹⁶⁾。ラッターは、脚部を欠く器壁が直線的なものだけをカストリ・グループの浅鉢と認定しているが¹¹⁷⁾、アイア・イリニばかりではなく、デロスのキンソス山、マグネシアのペフカキアなどでも、やはり典型的なソーサーの器形が各種の脚部を欠く浅鉢と共存しているため¹¹⁸⁾、これを他から独立的に把握することが出来るか否か疑問が残る。ただしマニカでは、レフカンディの場合と同様に、脚部を欠く浅鉢のみが存在し、いわゆるソーサーの器形は見当たらない。先に我々はカストリに大理石製の脚部を欠く浅鉢が存在することを述べたが、その関連で、ナクソスのスペドス18号墓、19号墓にそれと類似する大理石製浅鉢が副葬されていることが注意される¹¹⁹⁾。

このような状況のもとで他地域に関連する遺物を求めることは、その形態が非特徴的であることと相俟って、極めて困難であるといえよう。ここでは、ポリオクニで、「黄色」期に類例があることを指摘するにとどめたい¹²⁰⁾。

II—3—6 カラード・ピュクシス

カラード・ピュクシスは、シロス島ではカストリとハランドリアニに共通して存在する唯一の器形である¹²¹⁾。丸みを帯びた胴部にはしばしば刻文が施され、それに直立ないしやや外反する低い頸部がつく。縦方向に貫孔する突起状の把手は、大理石製の容器にもしばしば見られる特徴である。カストリ出土の例もハランドリアニ出土の例も、共に器体の表面は黒色でよく磨研されている。

アイア・イリニⅢからは、いずれも刻文を伴う2例の断片が報告されている¹²²⁾。レフカンディでは、類例は知られていない。

キクラデスのその他の遺跡では、デロスのキンソス山で、やはりカストリ、ハランドリアニ、アイア・イリニからの出土例と共通する2本ないし3本の刻線の束によるジグザグが胴部にめぐらされた例 (Fig 9—2) が知られ、黒色磨研のものも含まれる。出土遺跡は不明であるが、ナクソスにも、同様の例が存在する。

サンプソンは蓋が存在しないことを理由にピュクシスと呼ぶことを拒否しているが、エヴィアのマニカにも類例が存在する。その多くは無文であるが、やはりジグザグの刻文を伴う例もある¹²³⁾。管見に触れる限り、ギリシャ本土に類例は存在しない。アナトリア沿海部のサモスのヘライオンには、同様のジグザグ・パタンの刻文が胴部に施された断片があり、やはりカラード・ピュクシスであろうと推測されるが¹²⁴⁾、アナトリアそのものにはこの器形は存在しない。

なお、ドゥーマスも述べているように、ハランドリアニやナクソスから知られている注口部を備えた器形 (Fig 9—3) は、カラード・ピュクシスの変形として把握できよう¹²⁵⁾。

II—4 アソシエーション

Table 1 は、前章で論じたカストリ・グループの要素と考えられてよい土器の器形の、エーゲ海及びその周辺における分布状況を示している。ここでは、本表を基礎としながら、問題の要素が相

互にあるいは対外的にどのような関連のもとで存在していたかを検討していく。なお以下では、ある遺跡で複数のこれらの要素がそれだけで認められるか、あるいはそれらがシロス・グループの文化内容とともに認められる場合これをプライマリーなカストリ・グループの遺跡、これらの一要素が単独で出土する場合これをカストリ・グループの可能性のある遺跡、これらが明白に他地域の文化内容に混じって出土する場合これをカストリ・グループの要素を持つ遺跡として識別することにする。

Ⅱ—4—1 キクラデスの状況

キクラデスでは、タイプ・サイトの3遺跡の他には、どこが我々の認定条件に照らしてプライマリーなカストリ・グループの遺跡であると言えるだろうか。集落遺跡では、まずデロスのキンソス山が、明らかにそれらと並ぶ内容を示している¹²⁶⁾。それらはマックギリヴレイによってグループBに分類されているが、この分類はあくまで外挿的な基準によるものであり、出土遺物全体の中にはソース・ボートのようなK—S文化の指標である土器が含まれている。ちなみに、マックギリヴレイは土器の質 (fabric) による細分を試みているが、グループAの土器 (ソース・ボート、ソーサーなど) が彼の識別する3種の土器の質の全てに現れるのに対し、グループBの土器 (カラード・ピュクシス、ベル・カップ、各種のプレート状浅鉢など) はほぼF2及び3の2種の土器の質に限定されているので、この区分はそれ自身においても妥当であるように見える。ところがこれには例外があり、片把手付きカップだけはF1にも現れている。従って、土器のつくりから判断する限り、少なくとも片把手付きカップとソース・ボートとを無理に別のカテゴリーに入れる必要はないわけである。なお、ここではソース・ボート以外のK—S文化の重要な指標であるフライ・パンや脚部付き容器などは、全く存在しない。

キンソス山以外のいわゆるカストリ・グループの集落と呼ばれている遺跡は、我々の基準によればいずれもカストリ・グループの要素をもつ遺跡と呼ばざるをえない。もっともそれは、出土資料の詳細が不明である点に負うところが大きく、例えばナクソスのパノルモスなどは、発掘者の主張に従いカストリ・グループの遺跡とみなすべきなのであろう¹²⁷⁾。同じくナクソスのザス洞窟は、バーバーがカストリ・グループの存在を主張する遺跡であるが、その遺物内容については全く言及されておらず、判断は不可能である¹²⁸⁾。クリスティアナでは、水差し状土器のみが卓越しており、他に特徴的な土器は無い¹²⁹⁾。

墓域では、初期青銅器時代を通じて厚葬の習慣がないことを考慮するならば、集落の場合と同様の基準を当てはめることには無理があろう。ハランドリアニでは、169号墓でタイプ5の水差し状土器が、392号墓で片把手付きカップと注口部を持つ変形のカラード・ピュクシスが、452号墓で注口部を持つ器形が、374号墓でタイプ6の水差し状土器が出土している。ツンダスは600基ほどの中から僅かに32例を (おそらく盗掘を免れ特筆すべき副葬品が存在したことを理由に) 選んで簡潔に記述しているが、残念ながら前3者はその中に含まれていない。なお、ハランドリアニ出土遺物の

中で注意されるのは、特徴的な黒色磨研の土器群であり、片把手付きカップ、タイプ5の水差し状土器、カラード・ピュクシスに現れている。更に、ツンダスが問題の墓に飛び飛びの番号を付していることは、それらが独自のグループをなしていたのではなく、少数のカストリ・グループの可能性のある墓が広大なシロス・グループの墓域に散在していたらしいことを示唆している¹³⁰⁾。

シフノスのアクロティラキ 142号墓は、平面プランが台形を呈する4体の合葬墓であるが、異例に多くの副葬品を伴っている。その中には4点の片把手付きカップ、少なくとも1点の大理石製小浅鉢、3点の大理石製の鳥の模造品、そして彩文の施された湾曲した胴部にリボン状の把手が付くカップなどが含まれている。興味深いのはこの最後の例で、器形と装飾様式の点で同一と言って良いものが、アイア・イリニⅢ及びハランドリアニ 407号墓から出土している¹³¹⁾。そのコンテクストは、この土器が事実上カストリ・グループに属していると考えなくてはならないことを示しているが、器形(とりわけ把手の形態)も彩文という装飾様式も、いわゆるカストリ・グループの特徴からは大きく外れている¹³²⁾。この土器は、ハランドリアニからは、少なくとももう1点出土している。

この他のカストリ・グループの墓域として言及される遺跡では、その要素は常に水差し状土器に限定される。アイオス・ルーカスは、そのタイプ7の水差し状土器により、明らかに除外される¹³³⁾。問題は、多くのタイプ8の水差し状土器を伴うナクソス南端のスペドスの墓域である¹³⁴⁾。即ち、15号墓では刻文の施されたりボン状把手を持つ例と管状の把手を持つ断片との2例のタイプ8の水差し状土器が、17号墓ではタイプ8と並んでタイプ6の例が、19号墓では2点の大理石浅鉢と共に頸部が長く二重リボン状の把手を持つ例が、22号墓ではリボン状の把手に刻文を伴うタイプ8の例が出土しており、その在り方は、それをカストリ・グループと呼ぶべきかどうかは別として、一つの文化グループの内容を示すものと考えても良さそうである。

同じナクソスにあり、カンボス・グループの墓域であるアイイ・アナルギリに近接するローディナゼスの5基からなる小規模な墓域では、2号墓と4号墓でタイプ1あるいは2ではないかと判断される水差し状土器が出土している。これに共伴する遺物はない¹³⁵⁾。

しかも最も興味深い証拠は、ナクソスの南西部にあるフィロゲス28号墓で観察されているものであり、ここではリボン状の把手を持つタイプ6の水差し状土器に、大理石製の石偶(F A F)が伴っている。これは、タイプ6がカストリ・グループに関連する可能性に対して否定的な証拠とみなしてよいであろう。

以上まとめると、次のようになろう。カストリ・グループの要素を抽出していくと、キクラデスに内部におけるそれらの在り方は、決して斉一的であるとは言い難い。とりわけナクソスの状況は際だっており、ここではタイプ8と彩文を特徴とするタイプ6の水差し状土器が、大理石製の浅鉢や、時には石偶とさえ共伴しながら大量に存在する。フライ・パンやソース・ボート、球形のピュクシスなどがそれに伴うことは全くなく、その点では典型的なシロス文化の内容と一般に規定されているものとは一線を画してはいるが、一方で大理石製品の存在からも、それとの連続性は疑いの

カストリグループと初期青銅器時代のエーゲ海

=settlement=		One handled cup	beaked jug	bell cup	Depas Amphikypellon	Shallow bowl	Collared pyxis	A : K. g. site. B : possible K. g. site. C : site with K. g. element (s)	related material and remark	
1	Pefkakia	★	★		★	★			sauceboat, limited excavation	A ?
2	Palamari	★		★	★	★			sauceboat, limited excavation	A ?
3	Orchomenos	★			★	★			EHII	C
4	Agia Marina	★								
5	Thebes	★							EHII	C
6	Eutresis	★	?						EHII	C
7	Lefkandi	★	?	★		★			limited excavation	A
8	Raphina	★	?			★			deep sauceboat	C
9	Askitario		★						EHII. beaked jug : Type 6, 9.	C ?
10	Kolona, Aegina	★	★			★			EHII. cf. Table 2	C
11	Ag. Kosmas		★			★			EHII. beaked jug : Type 9	C ?
12	Thorikos	★			★	★			EHII. and EHIII with Bass bowl	A ?
13	Ag. Irini III	★	★	★	★	★	★			A
14	Kastri, Syros		★	★	★	★	★			A
15	Mt. Kynthos	★	?	★		★	★		sauceboat	A
16	Panormos								not yet published	
17	Zas cave								not yet published	
18	Paroikia	?	★						mostly ECIIB (Phylakopi I), for ? see Barber(1978) p.318.	C ?
19	Christiana		★							B
20	Phylakopi								typical ECIIB	
21	Lerna				★				stone vase, earliest EHIII	C ?
22	Poliochni R	★	★	?					mainly Anatolian EB	C
	Poliochni G	?	★		★	★			mainly Anatolian EB	C
23	Heraion, Samos	★	★	?	★	★	?		mixed	C
24	Thermi		?						mainly Anatolian EB	C ?
25	Emporio, Chios								mainly Anatolian EB	
26	Aspripetra		★							B
=cemetery=										
27	Manika, Evia	★	★	★		★	★		see Table 3	A ?
28	Chalandriani	★	★			★	★		mostly Syros group	A
29	Agios Loukas		★						ECIIB, otherwise unknown	
30	Rodinades		★							B
31	Phyrroges		★						folded arm figurine	B ?
32	Spedos		★			★			mostly Syros group	B
33	A. Kouphonisi		★						spout of Type 8 beaked jug (Naxos museum), otherwise Kampos group.	C
34	Irakleia		★						Type 6, Thimme(1977), APPENDIX 7	B
35	Stavros		★						Type 8	B
36	Giannades		★						Type 8	B
37	Akrotiraki	★								A ?
38	Iasos	★	★							?
39	Tsepi									

Table 1.

ないところである。また、そこでは、アナトリアとの直接的な関連を示すような遺物は全く共伴しない。

一方、シロスの場合はどうであろうか。カストリの城塞では、デパのようにアナトリア起源の土器と並んで、大理石製の浅鉢のように伝統的なキクラデスの文化要素も存在する。ハランドリアニでも、カストリ・グループの要素はしばしば黒色磨研という特殊なウェアで現れ、それを副葬する墓は明確にフライ・パンやソース・ボートを伴う墓からは識別しうるが、タイプ6の水差し状土器をカストリ・グループの要素とするならば、ここでもまたシロス・グループの彩文土器との関連は皆無とは言えない。彩文土器との関連は、先に述べた胴部の湾曲するカップの存在からも指摘し得る。このシロス・グループとの連続性は、アイア・イリニ、キンソス山などの集落の様相からも推測されるところであり、いずれの遺跡においても、「前代」即ちソース・ボートやソーサーが盛行した時期とカストリ・グループの要素が認められる時期との間に断絶はない。

II-4-2 ギリシャ本土側の状況

エヴィアでは、マニカからカストリ・グループの要素が広範に検出されていることは、これまで度々言及してきた通りである。Table 2 は、サンプソンによる墓と出土遺物の対照表を基礎に作成したものであり、同地におけるカストリ・グループの要素が、個々の墓でどのような遺物と共伴しているかを示してある¹³⁷⁾。

現在までに、調査の内容が公刊されている墓は、200基弱に及ぶが、そのうちの約十分の一の墓から、カストリ・グループの要素が出土しており、それらの墓は報告者によって Π Ε Ι Ι β (E H III) に位置付けられている。浅鉢を例外とすれば、キクラデスの場合と同様に、マニカにおいても一般的に存在するフライ・パンは、カストリ・グループの要素とは共伴しない。サプーナ・サケララキスによる8号墓を除き、大理石製品も同様であるが、近接するレフカンディにも大理石製品が存在しないことを考慮すれば、これはキクラデス圏外の遺跡に共通する現象かもしれない。水差し状土器はすべて頸部の顕著なタイプ2ないしレンズ状の胴部を持つ。これらに伴う他の器形 (Table 2 の g, h) は、他地域に比較できる例が知られていない。

しかし、マニカにおいて注意されるのは、これらのカストリ・グループの要素、そればかりではなくキクラデス的な土器が、すべて墓の副葬品というコンテクストに由来し、並行して調査が進められている集落からは出土しないばかりか、逆に集落で一般的な土器が、墓域には全く存在しないという事実である¹³⁸⁾。この現象は、カストリ・グループに関する遺跡の中で、集落と墓域とが明らかに対を成している遺跡がカストリ以外ではマニカに限られている現在、はなはだ興味深い。

アッティカでは、ラフィーナAの住居址で、少なくとも5点の片把手付きカップが、ソーサー、胴部の深いソース・ボート、アスコスなどと共伴している。水差し状土器も断片的ながら存在したらしく、調査者のセオハリスによってハランドリアニ出土例 (我々のタイプ5) と比較されている

カストリグループと初期青銅器時代のエーゲ海

s, stone objects
m, metal objects

Gr. no.	pottery					remark	s		m		loc.	plan
	a	b	c	d	e		f	g	h	i		
24-27		1									C	t
29					1						C	t
31	1	1									C	t
33		3									C	t
35	1										C	t
37		2							2		C	t
60	1	1		1							M	
61		1		2					1		M	t
65			1								M	
69		1	1								M	t
70		1	1	1					1		M	c
71	2	1	1						1		M	r
100				2		3. frying pans					F	c
102				1		3. frying pans					EL	
110				1					1		EL	c
148		1				frying pan			6		M	
148				1		6. frying pans	1	6			M	
171		2							3		M	r
S-8		1					1				M	

Table 2. Burials with Kastri-related materials at Manika, Evia.

—Key : a. one handled cup; b. beaked jug;
c. bell cup; d. shallow bowl;
e. collared pyxis with incised decoration;
f. marble figurine; g. stone vase;
h. bronze object; i. silver object.

—locality : C. unknown locality by Papavasiliou;
M. land of Beligiani; F. ? ;
EL. land of Eleotrivari.

—plan of chamber :

t. trapezium; c. circle; r. rectangular.

が、残存部から推測されている器高(25cm以上)や器面処理(赤褐色のウアフィルニスで覆われているという)から判断すれば、タイプ1ないし2であろう¹³⁹⁾。

ラフィーナの状況は、エヴィアを隔ててアッティカの反対側にあるスキロス島パラマリの状況と比較出来る。報告されている資料は限られているが、アイア・イリニⅢと並行すると考えられているコンテキストからは、片把手付きカップ、ベル・カップ、それにデパが、ソーサーやソースボートと並んで出土しているのである¹⁴⁰⁾。

EHⅡのライト・フォルムであるソース・ボートとカストリ・グループの要素との共存は、サロン湾に浮かぶエギナ島のコロナ遺跡でも顕著である(Table 3)。ここでは、最初期の水差し状土器はⅡ市の「崖際の家」の床面上の遺物群にソース・

ポートやソーサーなどEHⅡの典型的な文化内容とともに現れ、続く「白い館」が存在したⅢ市に至り、発展した形態のソース・ポートなどに混じって片把手付きカップや水差し状土器が見出されるようになる。しかし、プロト・ミニュアス土器の出現するV市になると、キクラデスには類例のない異形の水差し状土器はあるものの、カストリ・グループの要素は全く姿を消してしまうのである¹⁴¹⁾。

ヴィオティアでは、カストリ・グループの要素の中でも片把手付きカップだけが卓越して存在しており、とりわけシーヴァにおける知見が注目される。なぜならばコンソーラはこれをグループBの土器群に分類しているが、この群には先行するグループA (EHⅡ) の土器群と同様にソーサーやアスコスなどの器形が存在するのみか、EHⅡに特徴的なウアフィルニス器表面に施されている例がかなり存在するからである¹⁴²⁾。

以上まとめると、ギリシャ本土側で見出されるカストリ・グループの要素は、水差し状土器と片把手付きカップにほぼ限定され、そのコンテキストは常に従来の編年で言うところのEHⅡであり、EHⅢではないことが明らかであろう。即ち、それは、ソース・ポートやソーサーに伴うことはあっても、プロト・ミニュアス土器やEHⅢの彩文土器に伴うことはないのである。

STADT	FUNDGRUPPE	one hand- led cup	Type 1. beaked jug	Type 2. beaked jug	shallow bowl	Gefäßformen
II	VI—VIII			*	*	canonical EH II sauceboat saucer. pithos with plastic band
III	IX	*	*	*	*	advanced sauceboat which points to EH III tankard.
IV						
V	XVIII					early EH III assemblage with proto Minyan ware, Helladic tankard.
B R A N D S C H I C H T						
VI						EH III pattern-painted pottery

Table 3. Alt-Ägina

pottery shapes which might represent the Kastri group

II-4-3 北エーゲ海, アナトリア側の状況

北エーゲ海で問題となるのは、近年ドーマスによってカストリ・グループの故地であると主張されているポリオクニである¹⁴³⁾。ここでは、「赤色」期と「黄色」期にカストリ・グループの要素が見られる。まず、「赤色」期には、タイプ3の片把手付きカップ、キクラデスには類例のない異形の水差し状土器、タイプ8(?)の水差し状土器がある。ベル・カップに似た土器もあるが、これがカストリ・グループのそれと同一視できないことは、既に述べた通りである。続く「黄色」期には、各種のデパ、常に脚部を欠く浅鉢、水差し状土器、片把手付きカップなどが存在する。ただしデパの場合、カストリ・グループに現れる器形と共通するものは稀で、半円形の把手を持つ例が多い。水差し状土器には、異形のものもあるが、タイプ1及び2の例が頻出し、タイプ4の例の存在も注目される。

これに対して、ポリオクニに近接するトロイにおいてカストリ・グループの要素が全く顕著でない事実は、トロイが北西アナトリアで最もよく調査の行われてきている重要な遺跡の一つであること、カストリ・グループに対してその西アナトリア起源が繰り返し説かれてきていることを考えるならば、極めて興味深い¹⁴⁴⁾。同じ傾向は、西アナトリア沿海部に位置するキオスとレスボスにおいても看取される。南下してサモスのヘライオンに至り、再びカストリ・グループの要素(片把手付きカップ、浅鉢、カラード・ピュクシス)が現れるが、ここでは既にキクラデス的な水差し状土器は無く、西アナトリア的なそれにとって代わられている。キクラデスには異質な双把手付きカップも多い¹⁴⁵⁾。

イアソスの墓域では、その出土遺物のキクラデスとの関連が報告者によって指摘されているが、そのコンテクストは一貫性を欠いている。即ち、イアソス12号墓には水差し状土器と片把手付きカップが副葬されているが、前者の後傾する頸部はキクラデスではフィラコピI以降の特徴であり、後者はタイプ3の、いわばアナトリア・タイプの例である。加えて、それらと共伴する卵形の胴部を持つ鉢とクラテール状の土器は、キクラデスでは全く知られていない。また、しばしば出土する梨形の壺は、言うまでもなくキクラデスではカンボス・グループのライト・フォルムである。埋葬の形態や明らかにキクラデスからの移入品と考えられる大理石製品の存在から、同地とキクラデスとの接触の事実は確実であるもののカストリ・グループの要素が卓越してあった可能性は低い¹⁴⁶⁾。

カストリ・グループの要素でもある器形が、純粋に西アナトリア的な遺物群の中に散見されるという状況は、アフロディシヤス、タルススなどでも同様である。その際、片把手付きカップは常にタイプ3であること、水差し状土器はヴァラエティがエーゲ海のそれよりもはるかに広いことも注目される。しかし、少なくともタルススの場合には、西アナトリア的な土器に混じって、ベル・カップ、片把手付きカップ、水差し状土器などの器形において、相当数のキクラデスから出土するカストリ・グループの要素と比較し得る例が存在することは注目に値する¹⁴⁷⁾。

II-5 カストリ・グループの諸問題をめぐって

これまで我々は、一定の時間的空間的な広がりをもって存在したと仮定され続けてきた、カストリ・グループについて、それを認定するための文化要素をまず明確に規定するとともに、その個々の要素の在り方を検討してきた。本章では、それによって得られた知見をもとに、カストリ・グループの特徴であると様々な研究者によって指摘されている点を吟味し、その作業を通じて初期青銅器時代後半のエーゲ海及びその周辺の様相を明らかにしていく。

II-5-1 カストリ・グループは汎キクラデス的な現象か？

我々の言葉で表現するならば、この問いかけは、カストリ・グループとして一括できる斉一的な内容を持った文化がキクラデスの各地で繰り返し観察できるか、と言い直すことができよう。これに対する答えは、これまで指摘してきたように、文化グループというあいまいな概念を何によって認めるかにかかっていると良い。即ちそれは、カストリ、アイア・イリニ、レフカンディという相互に決して同一とはいえない要素の組み合わせを示すタイプ・サイトの内容からリスト・アップした項目の、どれだけを共有していれば同一文化グループに属すると見做して良いのか、という点にかかっているのである。そればかりではない。たとえその条件を満たしている場合でも、それらが当該のコンテキストからの出土遺物全体に対して規定的であるか、あるいは圧倒的にキクラデスにおいては異質な文化内容の中にそれが散発的に含まれているか、という点も考慮されなくてはならないであろう。このような問題点を認識しつつ、先に提示した基準に従って我々の手にある知見を洗い直すならば、この問いに対して我々は否定的に答えざるを得ないであろう。

カストリ・グループの要素が複数関連をなして検出されており、それが一定のコンテキストで主体をなして存在するのは、キクラデスでも北西半、より正確に表現するならばケアとデロス、シフノスを結ぶ三角形のゾーンの中に限られる。このゾーンの東端が、かなりの蓋然性でナクソスまで敷衍できるであろうことは、ナクソスのアピランソス博物館収集品からも推測できる (APPENDIX)。それ以外のキクラデスの島々では、カストリ・グループの要素としては、いくつかのヴェラエティの水差し状土器が出土せず、その傾向は既にナクソスにおいて始まっている。

南エーゲ海のみロス島フィラコピ遺跡の再調査において、カストリ・グループの要素がつかいに検出されなかったことは、この点で重要である¹⁴⁸⁾。そこではピットCで、従来のプレ・シティに相当するA1、その上にA2、Bという3層が識別されており、A1がG-P文化に、A2がフライパンやソース・ボートを伴うK-S文化に、BはフィラコピI文化(ただし従来のフィラコピI-iiを特徴づけていたダック・ヴァーズなどの刻文の土器を欠く)に帰せられているが、カストリ・グループの要素は、Bに存在するいくつかの疑わしい断片を除いて皆無である。南エーゲ海にカストリ・グループが現れないことは、更に南のクレタで、カストリ・グループの要素が全く見られないことから納得されるところであろう¹⁴⁹⁾。それは、ギリシャ本土(マグネシア、ヴィオティア、

アッティカ、エヴィア、北エーゲ海、南西アナトリア沿海部といった、それ以外の周辺部で、カストリ・グループの要素が、かなり広範に土着の文化要素の中に入りこんでいることと、著しい対照をなしている。

Ⅱ—5—2 カストリ・グループの集落は存在するか？

これまで我々は土器を中心とする文化内容の同定に議論の比重を置いてきたが、ここで集落の様相にも目配りしておきたい。さて、この問題は、より正確には次のように問われるべきであろう。即ち「カストリ・グループではないK—S文化の集落は存在するか？」と。答えを言えば、勿論存在する、少なくとも存在したはずだ、ということになる。実は、それほどにK—S文化の集落として言及される遺跡はしばしばカストリ・グループの遺跡なのである。レンフルーが「文明の誕生」を公刊した1972年の段階で、彼がK—S文化の集落の例として挙げることができたのは、カストリとパノルモスといういずれもカストリ・グループの遺跡に過ぎなかった¹⁵⁰⁾。その状況は、それから15年たった1987年にバーバーが初期青銅器時代のキクラデスにおける集落の変遷を概説するに至ってもなお大きくは変わっていない¹⁵¹⁾。確かに、アイア・イリニからの情報は加わった。しかし、後述するように膨大な数の墓域が確認されいながら、なぜそれに伴うべきK—S文化の集落の大半が確認されていないのだろうか。

これに対して、カストリ・グループの集落の特徴を述べることは、比較的容易である。カストリ、キンソス山、パノルモスは、いずれも不整形で地階部の床面積が4 m²から6 m²にも満たない小部屋が密集する特異な形態を示しており、組織的なプランは顕著ではない。アイア・イリニの場合はこれと異なり、本土のEHⅡのコンテクストで繰り返し見られる長方形のプランをとっているが、これは前代(アイア・イリニⅡ)の住居址の一部を利用しており、必然的にそのプランをも踏襲したものと見られる。不整形なプランは、キンソス山やカストリの場合には地形的制約によるものと受け取れるが、パノルモスの場合には、遺跡のある丘陵頂部はかなり平坦であり、地形的条件は規定的ではない。キンソス山では判然としないが、カストリとパノルモスでは集落を周壁が囲んでおり、後述するようにカストリ・グループの集落が防御的であるという議論に根拠を与えている。

Ⅱ—5—3 カストリ・グループの集落は防御的か？

これは、急勾配の岩山の頂部に位置するばかりでなく二重の壁によって囲まれたカストリの集落の立地を根拠に、繰り返し主張されてきている論点である。それは、カストリ・グループの時期を騒乱の時代と特徴づける証拠として、たびたび言及されてきている¹⁵²⁾。しかし、それは果たして、他のカストリ・グループの集落とみなすことの可能な遺跡、あるいはその要素を持つ遺跡にも敷衍することの可能な特徴であろうか。また、それはカストリ・グループの遺跡でしか見られない特徴なのであるか。

まず、アイア・イリニであるが、ここがカストリとは対照的(通説に従うならば例外的)な立地

をとっていることは、よく知られている。静かな内海に突き出した低い半島上にある遺跡は、その立地条件からして外敵に対する防御を念頭に置いたものとは考え難く、更に少なくとも該期においては城壁を伴うことさえなかったようである。これは、先に述べたように、同地の該期の集落がソース・ボートの存在を特徴とする前代のそれを受け継いでいるために、カストリ・グループの集落の特徴が表に出ていないためだと解釈することもできよう。しかし、該期に初めて居住の始められた集落の場合は、どうであろうか。レフカンディはまさにそのようなケースであるが、ここも集落の場所としては、アクロポリス状の岩山ではない海辺の低いマウンド状の丘が選ばれている。パノルモスの場合も、集落はやや小高い丘の上にはあるが、その周壁を除けばとりたてて防御が念頭におかれているとは考えられない。それは、後代の（正確な時期は不明）厚い城壁をめぐらしたアクロポリスが、パノルモスの背後の急峻な岩山の頂ぎに実際に存在することからも、逆推できよう。マニカでこれまでに発掘されている集落が、カストリ・グループの要素を示す墓に対応するものか否かについては問題が残されているが、もしそうであれば、ここも内海に面した平地といってもよい緩斜面と低い岬に広がっており、とりわけ防御を意識した立地とみなすことは出来ない。

次に、カストリ・グループの集落に固有の特徴を防御的であると規定するためには、それに前後する、ないしは並行する他の文化グループの集落が非防御的であることが前提されなくてはならないが、先にも述べたように、典型的な、つまりソース・ボートやフライ・パンをライト・フォルムとするシロス・グループの集落の様相が不明である以上は、そのような前提が成立しないことは明らかであろう。シロス・グループの集落が存在した可能性のある遺跡のすべてを考慮することは論者の手に余るが、それらの立地条件は、海岸に隣接する傾向があるというエーゲ海の先史遺跡に一般的に妥当する点を除けば、概して多岐に渡っており、立地だけで防御的か否かを容易に判断することは出来ない。ちなみに、アッティカでは、アイオス・コズマスはマニカと類似した立地をとり、マラトンのツェピは、墓城しか確認されていないものの、周辺地形から勘案して関連する集落はやはり平地にあったものと思われ、共に防御的とは言いがたい。エギナでも、城壁が確認されているのはV市以降であり、カストリ・グループの要素が見られる時期よりはずっと下る。ところがアスキタリオでは、海に向かって延びる小高い尾根の上に営まれた集落は、尾根の続く側から遮断するように壁を築いており、防御的というに相応しい形態をとっているが、ここが典型的なEHⅡの文化内容を示し、カストリ・グループの要素に乏しい（カストリ・グループの遺跡とはみなし難い）ことは、既に指摘した通りである。これに近接し、カストリ・グループの要素をもつラフィーナの場合は、現状では開発によりオリジナルな立地は失われているが、集落はアスキタリオよりはもっと低い海辺のマウンドに位置している。

このように、エポニム・サイトのカストリが堅固な城壁を巡らし、パノルモスの集落も周壁によって囲まれているとはいえ、それをもってカストリ・グループの集落を防御的であるとし、更に該期が騒乱の時期であるとするのは早計に過ぎるであろう。他方、カストリが顕著に防御的である理由については、後に別途考察する。

Ⅱ—5—4 カストリ・グループの墓域は存在するか？

この問題は、レンフルーによって「なぜ公刊されているカストリ・グループの墓は極めて少ないのか」という形で提起されている¹⁵³⁾。そこでは、それがハランドリアニに限られているときえ述べられているが、葬制の特性を考慮するならば、Table 1 に列挙したカストリ・グループの可能性のある遺跡もこれに含めて良いであろう。それにしても、いずれも膨大な数に及ぶ他の文化グループの墓に較べると、カストリ・グループの墓の少なさは注目に値する。更に、次節の問題と直接関わる点であるが、おそらくナクソスのローディナゼスを知られている唯一の例外として、カストリ・グループの文化内容が副葬されている墓だけによって構成されている墓域は、全く存在しないといって良い。言い換えれば、カストリ・グループの墓は常にシロス・グループの墓域の中で散発的に現れる。これは、他の文化グループの墓では見られない顕著な特色である。

Ⅱ—5—5 カストリ・グループの文化内容は、典型的なK—S文化（シロス・グループ）の文化内容を伴わずに存在することができたか？

これは、カストリ・グループの歴史的な位置付けを考える際に最もクリティカルな問題であり、やはりレンフルーによって疑念が表明されている点でもある¹⁵⁴⁾。即ち、レンフルーはペロス・グループとシロス・グループの遺物が一貫して排他的なコンテクストで出土するのに対し、シロス・グループとカストリ・グループの遺物がしばしば共伴する事実から、その点だけに着目するならば、一般に連続的であるとみなされているペロス・グループからシロス・グループへの移行期にまさる連続性を、文化内容から判断すれば断絶性が著しいシロス・グループからカストリ・グループへの移行期に見なくてはならなくなるのではないかと指摘したのである。

既に観察してきたように、墓域については言うまでもなく、集落についても、カストリ・グループの要素とシロス・グループとは要素との共存は顕著である。カストリから伝統的な大理石製品が出土し、アイア・イリニでⅡ期とⅢ期の共通性が強調されていることは、繰り返し述べてきたところであり、残されたレフカンディでは、シロス・グループの要素が現れない代わりに、カストリ・グループとして総括されてきた諸遺跡に一貫して存在する水差し状土器のヴァリエティもまた乏しい。

むしろ、そのような状況は、カストリ・グループがシロス・グループという歴史的な枠組みの中で生じた事象ではなかったか、という仮説に我々を導くであろう。その含意するところは後に考察するとしても、カストリ・グループはシロス・グループから独立しては考えられず、既にシロス・グループの集落が繁栄していた場所のあるものにおいて行われた、複数の独立した文化グループ（シロス・グループ、ヴィオティア及びアッティカの同時期の文化）の接触のプロセスを反映しているように見えるのである。この点については、結論部で改めて検討する。

II—5—6 カストリ・グループは、侵入的か？

従来カストリ・グループは、常に侵入的であると考えられてきた¹⁵⁵⁾。侵入的 (intrusive) という表現は、二重の意味を内包している。一つは、カストリ・グループの文化内容の背後にある人間集団とそれまでのキクラデスの諸文化グループを担ってきた人間集団との間には、明確に断絶があるということ。二つめに、カストリ・グループに関係する人間集団は、キクラデスの外から、具体的にはアナトリアから侵入してきたものであること。

考古学的証拠から設定された文化グループ (型式) と人間集団を安易に同一視することは慎まれるべきであるにせよ、考古学の認識目標からしても、両者は出来るかぎり積極的にリンクさせられるべきであろう。このような立場をとるならば、我々の手元にある資料は、墓域について見た場合に特に、カストリ・グループの要素を持つ墓と他の (とくにシロス・グループの) 墓がアソシエーションにおいては相当程度に排他的であることを明らかにしており、前者の含意を否定するものではないと言って良い。とりわけフライ・パンや石偶のように、シロス・グループにおいて被葬者のアイデンティティに主に関わると考えられるような遺物がカストリ・グループの内容と共伴しない事実は、両者が何らかの点でエミックに異なる集団に属していることを示している。そして両者の差が性差に由来する可能性は、カストリ・グループの墓が極端に少ないことによって退けられよう。時期差の可能性は常に否定できないが、墓の形態にそれを示唆する差がないこと、アクロティラキ 142号墓で4体の追葬 (あるいは合葬) に4例の片把手付きカップが副葬されていることなどは、むしろ両者の差が時期差以外のエミックに異なる人間集団の同時存在を暗示するものと解釈することに対して積極的な証拠であろう。従って、その範囲では、カストリ・グループを侵入的であると規定することに問題はない。

問題は、それがアナトリアに代表される特定地域からの人間集団の侵入を含意しているのか、という点である¹⁵⁶⁾。結論から言えば、カストリ・グループを西アナトリアを起源とする通説は、我々が既に検討してきたように、それらの個々の要素の分布とコンテキストから判断するかぎり、全く支持することが出来ない。カストリ・グループの文化要素の中で明確に西アナトリアに由来する土器は、唯一デパのみである。キクラデスに現れる、即ちカストリ・グループの要素とみなしうる水差し状土器は、独自のヴァリエティ (タイプ 5, 8), 本土にも広がるヴァリエティ (タイプ 6), アナトリアとエヴィアに広がるヴァリエティ (タイプ 2), 北エーゲ海に類例の求められるヴァリエティ (タイプ 4) などがあり、その起源を求める際、特にアナトリアだけを強調しなくてはならない性質のものではない。片把手付きカップに至っては、明らかに本土のヴィオティアとの関係を示唆している。浅鉢の各種ヴァリエティは、EB II のエーゲ海に一般的な器形を継承するものであり、残るベル・カップとカラード・ピュクスは純粋にキクラデス的な器形である。

従って、後者の意味でカストリ・グループを侵入的であると規定することは、その故地をアナトリアに求めるにせよ北エーゲ海に求めるにせよ、誤りとすべきであろう。カストリ・グループは、

エーゲ海各地に展開していた同時期の文化との接触の痕跡を豊かに示すとともに、かなり地域差の顕著な文化グループの総称としてのみ理解可能な、キクラデス土着の現象なのである。

Ⅲ 結語と展望

これまで検討してきたような諸特徴を備えたカストリ・グループとは、どのような人間集団のいかなる歴史的営為の反映なのであろうか。その点について考えるために、まず、これまでの議論によって明らかとなったカストリ・グループの特徴を、もう一度整理してみよう。

カストリ・グループは、空間的には北西エーゲ海とエヴィアに顕著に集中し、その要素は、本土ではマグネシア、ヴィオティア、アッティカに、北にはリムノス、東に向かっては南西アナトリアとその沿海部に広がる。時期については、初期青銅器時代後半と限定するにとどまる。というのは、本土の編年は主にペロポネソス半島北東部（とりわけレルナ遺跡）からの知見に基づいており、それをヴィオティアやアッティカに敷衍することは、おそらく妥当性を欠くからである。即ち、カストリ・グループの要素は本土側ではソース・ポートやアスコスに伴って現れるが、EHⅡの指標とされているそれらの遺物が、ヴィオティアやアッティカにおいても、レルナⅢ（EHⅡ）末と期を一にして消滅したと考える必要はない。

またカストリ・グループの墓は、数十基、ときにはそれ以上から成るシロス・グループの墓域に散発的に存在するが、その中で共伴する副葬品には一貫性があり、フライ・パンや石偶のようなシロス・グループに特有のシンボリックな遺物を含むことはなく、被葬者のアイデンティティを示していると考えられる。集落については、比較考察するほどの資料はないが、知られている例はいずれも小規模であり、それはカストリ・グループの墓の数が少ないことと対応している。

この点は、従来カストリ・グループの時期が短かった為と解釈されてきている。しかし、果たしてそうであらうか。外的な証拠は、いずれもカストリ・グループの要素が単一の遺跡においても複数のコンテクストに由来し、ある程度の時間幅の中で繰り返し現れることを示している¹⁵⁷⁾。編年の項で触れたようなカストリ・グループの編年上の位置付けをめぐる議論は、まさにそのような状況が原因となって生じているのである。

内的な証拠からも、カストリ・グループの遺跡相互の間で見られる文化内容の相違の一端は、時期の差に求められても良いであろう。おそらく最も新しい時期に属するのは、レフカンディである。なぜならば、同地では、問題のレベルの直上から初期のミニュアス土器が出現しており、攪乱であろうとは注記されているが、問題のレベルからさえも若干のミニュアス土器片が検出されているのである¹⁵⁸⁾。これに対して、上限がどこまで遡るかについては、さしあたり掘るべき情報はなない。しかし、一般的な状況は、それがK—S文化（伝統的な本土のタームによればEHⅡ）がある程度発展した段階で現れ始めることを示唆している。一方でこの状況は、カストリ・グループが現れる頃から斉一的なシロス・グループの内容に地域性が目立ち始めることと対応するものとも受け取れる。

このような特徴からは、カストリ・グループという考古学的な現象が、比較的少数から構成されるとともに、きわめて多方面の同時代の文化に触れる機会の多かった人間集団、及び彼らと同一視することは出来ないにしても、彼らと一定の接触があった人間集団の存在を示していると推測されよう。その内容にインターナショナルな色彩が強いのは、おそらく彼らが海上交易を通して当時繁栄していた各地の集落とコンタクトのあった証しであろう。しかし、それだけではない筈である。なぜならば、シロス・グループのフライ・パンにしばしば線刻されているように、この時期までには既に大形の構造船が存在し、エーゲ海に広く分布するミロス島の黒曜石は、はるか以前から海を媒介としたコミュニケーションが成立していたことを物語っている。それでは、何がカストリ・グループを際立たせていたのか。

それが、おそらく冶金術、それも青銅（及び銀と鉛）の冶金術であったことは、ほぼ間違いないであろう。バーバーも指摘するように、青銅が現れるのはキクラデスではECⅡになってからであり、とりわけカストリ・グループに関連するコンテクスト（勿論そればかりではないが）からは、しばしば青銅製品や銀製品が出土する¹⁵⁹⁾。キクラデスでは唯一カストリにおいて青銅冶金の直接的な証拠が残されていることは、既に述べた通りである¹⁶⁰⁾。また、アッティカのラフィーナでも、それがカストリ・グループと直接関連するものか否かは不明ではあるが、近くの砂層から青銅滓を多量に含むピットが検出されている¹⁶¹⁾。より決定的な証拠は、トリコス第3採掘坑（鉛）におけるカストリ・グループの要素の存在であろう¹⁶²⁾。銀についても、従来そのソースはシフノスに限られラヴリオンの銀が採掘され始めるのはずっと時代が下がってからと考えられてきたが、再考の必要がある。

カストリ・グループを担った人々の少なくとも一部が冶金術の知識を専門化し、それを始めとする閉鎖的な特殊技術によって生計を営んでいた可能性は、カストリとハランドリアニという隣接する二つの遺跡の性格を考える上で、ひとつの洞察を与える。現在では確認できないが、ツンドスの観察に従えば、ハランドリアニにはその広大な墓域に対応する集落が、カストリとは別に存在したと考えられる¹⁶³⁾。もし、そうであるならば、カストリの城塞とおそらくそれよりはるかに規模の大きい仮想的なハランドリアニの集落との間には、一定の関係が成立していたであろう。それは、どのような関係であったのだろうか。

通説では、EHⅢAが騒乱の時期であるために、カストリのように顕著に防御的な集落が築かれたのだとするが、これは明らかに論理的に矛盾している。なぜならば、もしそのような「騒乱」が通説通り「アナトリアからの侵入」によるものならば、防御すべきは在地の仮想的なハランドリアニの集落であり、「アナトリア的要素」をもつカストリではないはずである。百歩譲って、侵入してきた側が防御壁で自らの集落を囲んだのだとしても、カストリのような特殊な立地をとる集落が、それだけで生計を営むことが果たして可能だったのだろうか、あるいは、ハランドリアニの集落を征服した上で、近くの岩山の頂きに有事に備えた要塞を築いたと考えることも可能ではあるが、それならば、なぜその不便な要塞の中で青銅冶金のような仕事を行わねばならなかったのか。

これらの点を勘案するならば、カストリと仮想的なハランドリアニの集落とは、少なくとも一定期間は共存しており、互恵的な関係を保っていたと見るべきであろう。その際、ハランドリアニは伝統的なK—S文化の集落であり、それに対してカストリは冶金術という専門技術を保持する小規模な集団が住みつけた集落であったに違いない¹⁶⁴⁾。カストリの集落を囲む壁も、一般に考えられているように海からの襲撃に備えることだけを目的としているのではなく、隣接するハランドリアニをも意識した、更に言えばハランドリアニから自らの集落（と青銅冶金の技術）を守ることを目的に築かれたのであろう。このように考えれば、アイア・イリニ、レフカンディなどが、カストリ・グループの集落でありながら特に防御的な性格を示さないことも理解されよう。

残されている問題は多いが、従来カストリ・グループと一括して呼ばれてきた現象を検討する過程を通じて、我々は初期青銅器時代後半のエーゲ海、及びそれと隣接するギリシャ本土の様相に対して、通説とはかなり異なる。しかし考古学的証拠とはより整合的な歴史像を得ることができた。

まずキクラデス内部においては、カストリ・グループがEC II BあるいはEC III Aといった独自の呼称を必要とする時期を表しているのではないことが明らかになった。それは、あくまでK—S文化の中で地域的に存在した小規模な人間集団の活動を示唆するものであり¹⁶⁵⁾、EB IIのエーゲ海（ギリシャ本土も含む）における文化的クライマックスという場があって始めて存在し得たのである。確かに含意としては、EC II BもEC III Aもある程度は真相をついている。なぜならば、カストリ・グループはその文化的クライマックスそのものにきっかけを与えたのではなく、おそらく経済的にそれに依存する形でのみ存在できたのであるから、アルファベットによる編年表記を維持するならば、何らかの形でそれが本来のK—S文化（シロス・グループ）より新しいことを示さなくてはならないからである。エーゲ海のEB IIという繁栄の母体のコンテクストを重視するならばEC II Bを採用すべきであろうし、シロス・グループの斉一性とそれに続く地域性の台頭を重視するならばEC III Aを採用すべきであろう。その際注意すべきは、それが決して伝統的な（アルゴリスからの知見を基礎におく）ヘラディックの編年との並行関係を示しているのではないという点である。ことカストリ・グループに関するかぎり、本土で文化内容を比較しうるのはヴィオティアとアッティカに限られ、アルゴリスはほとんど圏外といって良いからである。

また、このカストリ・グループを含むK—S文化が、フィラコピI・グループとどのような関係にあったのかという点も問題として残されている。K—S文化の要素はフィラコピでも検出され、それは明らかにフィラコピI・グループに先行しているが、それは決してキクラデスの全域に及ぼすことのできる現象ではない。というのも、フィラコピI・グループは、カストリ・グループ以上に分布範囲が狭く、知られているのはミロス島（フィラコピ）とパロス島（パリキア）、ケロス島（ザスカリオ）などに限られるからである¹⁶⁶⁾。

先に我々は、カストリ・グループの出現した頃からK—S文化がにわかに斉一性を失い始めるのではないかと述べたが、フィラコピI・グループという現象も、その文脈で理解されるべきものであるかもしれない。図式的に過ぎるのを恐れずに言えば、カストリ・グループとして一括されてい

る文化グループ、南東キクラデスのアモルゴス・グループ、南西キクラデスのフィラコピ I・グループなどは、いずれも斉一的な K—S 文化から派生したものであり、個々の文化内容によってよりはむしろその地域性の卓越を指標として、これらを一つの段階に位置づけても良いであろう。即ち、E C II は文化の斉一性が著しい時期、E C III はそれが崩れて地域による差異が顕著になる時期というように考えるのである。そしてキクラデスにおける初期青銅器時代の終末は、それを強引に他地域における初期青銅器時代から中期青銅器時代への移行期とシンクロナイズさせることなく、キクラデスの初期青銅器文化（キクラディカ）の代名詞といっても良い K—S 文化の要素が全く消失した時点に求められよう。そして相対的には、キクラデスの初期青銅器文化は、ギリシャ本土やクレタが今日中期青銅器時代の範疇に含められている文化に移行した後までも続いたのであろう¹⁶⁷⁾。

一方で、この斉一性が失われかたは島ごとに様々であったと考えられるが、概してギリシャ本土に近いほどその変容のスピードは早く、それから東へ遠ざかるほど K—S 文化の内容が保持される度合いは強かったようである。それは、カストリ・グループの内部でも観察される状況であり、カストリ・グループのナクソス・ヴァラエティとも呼ぶべきスペドスの墓域からの資料に伝統的な K—S 文化の色彩が強いのも、この文脈で理解されるかもしれない。初期青銅器時代の後半（E H II 末あるいは E H III 末）に本土の諸遺跡で観察されている集落の焼壊、文化内容の突然の変化がこの状況と密接に関連していることは、疑い得ないであろう。本土に最も近いアイア・イリニで、III 期（カストリ・グループの時期）末に本土の遺跡同様の大規模な集落の焼壊・放棄が認められるのも、この仮説を裏付けるものであろう。

これに対して、ギリシャ本土の様相はどうであろうか。キクラデスと最も密接な関係のあるアッティカでは、既に触れたように本土タイプのフライ・パンと片把手付きカップを伴う文化グループが歴然として存在する。このグループにはカストリ・グループの要素は現れないが、それがカストリ・グループの要素を伴う遺跡群に対してどのような位置関係にあったのかという点が、今後の課題となろう。これと対照的に、ヴィオティアでは、いわゆる E H II の内容にカストリ・グループが伴っているが、それがアルゴリスからの知見とどのようにかみあうのかが、解明されねばならない。いずれにしても、1920年代末にブレーゲンによって確立され、1960年にカスキーによって修正された本土の編年は、大枠においては依然として有効であるものの、少なくともアルゴリス以外の地域に対して無条件に適用されてはならないことは、本稿の議論によっていっそう明らかになったと言える。I 部で概観したようなカストリ・グループの歴史的な位置付けをめぐる混乱は、レルナからの知見を重く見るあまりに地域差を過少視してしまう本土の編年作業の誤った方法にその一因があるのである。

〔付記〕

筆者は1987年よりギリシャ政府給費留学生としてアテネ大学文学部歴史・考古学科先史考古学部門のクリストス・ドゥーマス教授の指導のもとで研究を続けており、本稿もその成果の一部である。

その執筆過程では、ギリシャ語による草稿をもとにした議論を通じて同教授から大きな刺激を与えられるとともに、奨学金の延長事務等にあたって御尽力をいただいた。また明治大学の馬場恵二教授からは、ともにギリシャ各地の遺跡を歩きながら、古代史の枠に限られない多くのことを教えられた。明治大学大学院の古山夕城氏の熱心な協力がなければ、本稿で言及した僻遠の遺跡のいくつかを実地に踏査することは容易ではなかったろう。なお、弓削達、藤本強、上野佳也、大林太良、伊藤貞夫ほかの諸先生、並びに山形真理子、佐藤文泰、新美倫子ほかの東京大学考古学研究室の諸氏からは、様々な機会に御指導と暖かい励ましをいただいた。本文及び図版の整理にあたっては、同じく考古学研究室の鈴木美保氏の手を煩わせた。記して心から感謝の意を表したい。

APPENDIX: アピランソス博物館（ナクソス）収集品について

「ナクソスの至る所で、私達は、人々がアピランソス村のことを悪し様に罵るのを耳にした。アピランソスは、泥棒の村だというのだ……。」キクラデスの島に生きる人々の間を旅しながらその風俗を共感をこめて綴ったセオドア・ベントは、その著書の中でこのようにナクソス島の内陸にある山奥の寒村アピランソスの当時の風評を紹介している（Bent 1885）。ここで言及されている盗賊行為は一般的なそれであったろうが、1960年代にこの村出身の数学者バルザーニスの努力によって、ナクソス東部の初期青銅器時代の墓域の盗掘に由来する遺物が収集され、それが村の中の古びた建物の一室に展示されていることは、ベントの記述と一脈通じるところがあるようで興味深い。この収集品は、そのごく一部が近年ザフィロプルーによる案内書（Zapheirou 1988 a）に紹介されているのみで、その大半の遺物は公刊されないままにとどまっているが、その中にはカストリ・グループのナクソスでの在り方を考える上で貴重な資料が多く含まれているため、ここに一括して簡単に触れておくことにしたい。

収集された遺物のなかでとりわけ目をひくのは、大量の水差し状土器の存在である。その総数は完形に近いもの（従って表面的な観察によっても我々がカストリ・グループとの関連でとりあげた範疇に含まれることが確実なもの）だけでも、約40例を数える。これらの内訳は、我々がナクソス・ヴァラエティとしたタイプ8のものが最も多く、30例がこれに属する。うち少なくとも10例には、把手背面に羽状刻文を主とする特徴的な装飾が施されている。また胴部に彩文を伴うものは2例あり、その1例の彩文は、頸部と注口部の形態と共にパバサナソプーロスによって報告されているスペドス出土例のそれと酷似する。もう一つの例の口縁部には、目を象ったグラフィティが描かれており、形態的にはタイプ8に近い。目のグラフィティを伴う例は、他にも1点（タイプ8）ある。これらは、胴部に水差し状土器のグラフィティの刻された2例（1例は Zapheirou 前掲書頁63下段の図左）とともに、他に類例がない。残余の水差し状土器のうち、1例は明らかに顕著な頸部を備えており器面は赤色磨研されているが、それにつくりボン状の把手は我々のタイプ2の水差し状土器には異質な形態である。胴部にいわゆる scribble burnish の痕跡を顕著に残す1例は、頸部と口縁部が連続的でありタイプ1に属する。この他にも、異形の例がいくつかある。唯一のベル

・カップは、典型的な黒色磨研の例である（同上段右）、片把手付きカップは、タイプ2とタイプ3の例がそれぞれ1点ずつ存在する。

これらの遺物はすべて出土コンテキストが不明であるが、そこに観察されるいくつかの点は極めて示唆的である。まずタイプ8の水差し状土器の卓越は、パパスナソプーロスによって報告されている既知の墓域の状況から容易に推測されるであろう。しかし、そこには含まれていなかったタイプ1及び2の水差し状土器とベル・カップ並びに片把手付きカップの存在は、ナクソス・ヴァラエティとして我々が把握した遺物組成よりは更に本来の（タイプ・サイトの3遺跡から知られるような）カストリ・グループのそれに近い文化内容がナクソスにも存在していたことを示している。また、タイプ8の水差し状土器に刻されているグラフィティが、明らかにタイプ2の水差し状土器をモデルとしていることは、未だ直接的な証拠はないものの、タイプ8をタイプ2と同一範疇にあるものとして、即ちプライマリーなカストリ・グループの要素として考えて良いことを暗示するものともとれよう。片把手付きカップの1例が、アナトリアを志向するタイプ3で現れていることも、看過できないであろう。

ここでは、カストリ・グループに関連する遺物だけを取り上げたが、同博物館には他に大量のG—P文化、K—S文化の遺物が収集されている。キクラデス最大の島ナクソスの初期青銅器時代の様相を理解する上で欠かすことの出来ないまとまった資料であり、公刊の待たれるところである。

註

本稿では、文中の地名と人名を共に片仮名で表記した。その際、地名に関しては現代語読みでほぼ統一したが、例外もある（アッティキ→アッティカ）。また結果的に長短音は厳格ではない（例 ハーランドリアニー→ハランドリアニ）。なお、ギリシャ語文献は、註ではラテン・アルファベットで便宜的に表し、*を付して希語文献（別項）であることを指示してある。

- 1) Dumas (1983)
- 2) ミロスについては、Renfrew and Wagstaff (1982)、ナクソスについては Dumas (1977) の fig. 2を参照。
- 3) レンフルーは、この内容がポッセルトによって公刊される予定であることに言及しているが (Renfrew 1965)、これは果たされていない。
- 4) 調査が行われる契機も、大半の場合盗掘による遺跡の破壊行為である。
- 5) 周藤芳幸 (1987)
- 6) それは、EB末からMB初にかけて著しい。Overbeck and Overbeck (1979)
- 7) Dumas (1988)
- 8) Konsola (1984)* 及び Hägg and Konsola (1986)
- 9) supra note 5.
- 10) Bent (1885)
- 11) Tsoundas (1898, 1899)*
- 12) Atkinson et al. (1904)
- 13) Edger (1897)
- 14) Rapavasilou (1910)*

- 15) Evans (1921—1935), Blegen (1921)
- 16) フィラコピ: Dawkins and Droop (1911), パリキア: Rubensohn (1917).
- 17) アイア・イリニの概報はヘスペリア誌に, アクロティリの年次報告はマリナトスによるテラシリーズ(I VII)に掲載されている。
- 18) Caskey (1971, 1972) EH の修正編年については, Caskey (1960).
- 19) Bossert (1967)
- 20) Popham and Sackett (1968)
- 21) Mackenzie (1963), Barber (1974)
- 22) Evans and Renfrew (1984)
- 23) MacGillivray (1979, 1980)
- 24) Renfrew (1972)
- 25) Doulas (1977)
- 26) Thimme (1977)
- 27) Doulas (ed.) (1978, 1980)
- 28) Sampson (1985, 1983)*
- 29) Frankfort (1927), Åberg (1932)
- 30) Caskey (1964)
- 31) Caskey (1960) 参照
- 32) Renfrew (1972) *passim*.
- 33) Doulas (1977) p. 22.
- 34) Doulas (1983) p. 47. note 1. Doulas (1988) p. 22.
- 35) Barber and MacGillivray (1980)
- 36) Barber (1971) p. 48. 及び Barber (1978) p. 368. 。後者では, カストリ・グループとフィラコピ I・グループの同時性を示すものとしてパロス島パリキア遺跡出土の未公刊資料が言及されているが, 同じ資料が Barber (1983) では両者の連続性を示すものとして扱われている。なお, この資料は, おそらくパロス博物館蔵の水差し状土器であるが, この例は口縁部を欠いており, 我々のタイプ 7 の可能性もある。仮にそうであれば, これはパリキア本来の文化内容 (EC III B) であり, カストリ・グループの要素の存在を示すものとは言えない。片把手付きカップも存在するという言及については, 表 1 参照。
- 37) Barber (1974)
- 38) Wünsche (1977) p. 51.
- 39) Barber (1981)
- 40) Rutter (1979, 1983)
- 41) Rutter (1984)
- 42) Barber (1983)
- 43) MacGillivray (1983)
- 44) Barber (1984), MacGillivray (1984)
- 45) Zapheiroupolou (1984)
- 46) Sapouna-Sakellarakis (1987)
- 47) MacGillivray (1983)
- 48) Doulas (1977) pp. 25-26. の表を参照。
- 49) Tsoundas (1899)* p. 78. Caskey (1964), Bossert (1967) なお, カストリをもハランドリアニと呼ぶ誤解を招く習慣は, 未だに散見される (Zapheiroupolou 1988 b)。
- 50) この周壁の特異な形態に対しては, レルナ (plate II—4), ロス・ミリャーレスを始めとする各地の類似の遺構との関連が指摘されてきている。エーゲ海域では, 近年クレタのアイア・フォティア (墓域の西の

- 丘上)で、同様の周壁を備えた遺構が検出されており (Tsipopoulou 1988)*, 稜堡がやはり海に面して設けられているなど、実見した限りでもカストリとの類似は顕著である。なお、アイア・フォティアの墓域はキクラデス的な色彩の強い葬制と副葬品によって知られ、ドゥーマスはこれをキクラデスのコロニーと呼んでいるほどであるが (Doumas 1979)*, この遺構からの出土遺物は、墓域からのそれと全く対応しないクレタ独自のものである。これは、すべて時期差に起因するものであろうか (墓域は E C II, 集落は M M I a とされる)。後述するマニカの状況を考え合わせると興味深い。
- 51) Popham and Sackett (1968)
 - 52) 概報はヘスベリア誌, 該期に関する最近の報告は Wilson and Eliot (1984) 以下の記述は後者による。
 - 53) Renfrew (1972) p. 533.
 - 54) Doumas (1977) pp. 22-23.
 - 55) Rutter (1979) p. 6.
 - 56) Wilson and Eliot (1984) fig. 1-f, g.
 - 57) ラッターも他の研究者同様, 片把手付きカップ・デパなどを細部の形態上の 変異を考慮することなく各々のカテゴリーに括り, それをアナトリアの例と比較する。なおラッターは, 並行関係の多くを Spanos (1972) に負っている。Spanos (1972) に対する批判については, Podzuweit (1979) note 1057 参照。
 - 58) Barber (1987) p. 93.
 - 59) Caskey (1972) pl. 80: C-1, 42, 43, 44. fig. 6: C-46. (ケア), Tsoundas (1899) * pin. 9-11 (シフノス), Tsoundas (ibid.) pin. 9-5, 7. (シロス), MacGillivray (1980) fig. 5-58. 119, 299 (タイプ 3), 14, 63, 434. (デロス) など。
 - 60) アテネ考古学博物館 no. 4943, 4944, 11540. なお, 慣習として, 墓の番号は島ごとの通し番号で振られている。そのため, アクロティラキ 142号墓は, シフノス 142号墓在 アクロティラキともすべきものであるが, ここでは慣用に従う。ナクソスなどの場合も同様。
 - 61) ナクソス考古学博物館 no. 5200.
 - 62) MacGillivray (1980) p. 19.
 - 63) Papavasiliou (1910)* pin. 8-1, 5. Sampson (1985)* eik. 84, 85 a (?) (マニカ), Walter und Felten (1981) Taf. 85-130. (コロナ), Theocharis (1955)* eik. 12. (ラフォーナ), Spitaels (1984) fig. 106. (トリコス)
 - 64) Theochari and Parlama (1986) fig. 48-3.
 - 65) Hanschmann und Milöjčić (1976) Taf. 64B-4.
 - 66) Kunze (1934) s. 55.
 - 67) Demakopoulou (1975)* p. 199. eik. 6 right. Konsola (1981)* p. 122. note 24.
 - 68) Goldman (1931) p. 105. fig. 138. 未公刊の例は, Kunze (1934) s. 55. に言及されている。出土地不明の例については, Mountjoy (1980) fig. 1-6 (双把手), 7.
 - 69) ポリオクニ「赤色」期の例は, Bernabo-Brea (1964) Tav. CXLIII, 同「黄色」期の例は Bernabo Brea (1976) Tav. CCVIII.
 - 70) タルススでは no. 467-470 がこれにあたり, 器面に黒色のスリップが施された no. 470 (我々のタイプ 2) は, キクラデスからの例にきわめて近い。他のアナトリアからの類例については, Garstang (1953) fig. 124-10. (メルシン, ただし復元図は適切でない), Orthmann (1966) Abb. 5-4. (イリカ), Kadish (1971) fig. 4. (アフロディシアス), Levi (1961) fig. 97-8. (イアソス) など。
 - 71) Mylonas (1959) pl. 151-156.
 - 72) アイオス・コズマスでは, 4号墓出土例 (no. 158) のような例外も存在する。
 - 73) 本土タイプのフライ・パンについては, Renfrew (1972) p. 536.
 - 74) 未公刊, マラトン博物館。
 - 75) Sapouna-Sakellarakis (1987)

- 76) なお, Sapouna-Sakellarakis は, P. コフィナなる遺跡でもカンボス・グループのフライパンがソース・ボート及びカストリ・グループの片把手付きカップと 共伴しているという 出所不明の情報に言及しているがこの遺跡がピレアスのパレア・コキナを指すとすると, そのアイオス・コズマスとの近接性から判断して, 同様の誤認を犯している可能性が強い。
- 77) Podzuweit (1979) S. 169. Sampson (1985)* p. 243.
- 78) Bossert (1967) s. 72.
- 79) Tsoundas (1899)* p. 122.
- 80) Popham and Sackett (1968) p. 8.
- 81) Tsoundas (1899)* pin. 9-6.
- 82) Doumas (1983) no. 179-183.
- 83) Theocharis (1953-54)* eik. 11.
- 84) Doumas (1976) eik. 3.
- 85) Doumas (1977) pl. 50 b.
- 86) Goldman (1931) fig. 137.
- 87) Walter and Felten (1981) Taf. 84-124.
- 88) Goldman (1956) fig. 249-221.
- 89) Papavasiliou (1910)* pin. 9. Sampson (1985)* eik. 79-82. (1988)* eik. 96, 130.
- 90) Goldman (1956) fig. 249-211, 250-224.
- 91) Kadish (1971) fig. 5.
- 92) Doumas (1976)* eik. 9.
- 93) Bernabo-Brea (1976) Tav. CCX.
- 94) Papavasiliou (1910)* pin. 9.
- 95) BCH 97 (1973) fig. 167.
- 96) アテネ国立考古学博物館蔵
- 97) Doumas (1976) p. 8.
- 98) Lamb (1936) pl. IX no. 422.
- 99) Papathansopoulos (1961-62)* pin. 72.
- 100) Theocharis (1953-54) eik. 9.
- 101) Barber (1981)
- 102) Forsdyke (1925) pl. 1-A-37. Goldman (1956) pl. 249-228, 262-364.
- 103) Papathanasopoulos (1961-62)* pin. 51 b.
- 104) *ibid.* pin. 56.
- 105) *ibid.* pin. 61.
- 106) Tsoundas (1898)* pin. 9-26. (スタヴロス) ただし, これはミニチュアである。Merangou (1984) fig. 5 (イアナゼス)
- 107) MacGillivray (1980) fig. 7.
- 108) APPENDIX 参照
- 109) Sampson (1985)* sched. 60.
- 110) Theochari and Parlama (1986) fig. 48-6.
- 111) Caskey (1956) pl. 47-i.
- 112) Bernabo-Brea (1964) Tav. CXLVIIb.
- 113) Milojcic (1961) pl. 39-23.
- 114) Podzuweit (1979) s. 151. ただし他の指標による形態分類に抛れば, 異なる像も得られよう。ただし本稿はアナトリアの様相を問題としているのではないため, この点に深入りはしない。

- 115) Popham and Sackett (1968) fig. 7.
- 116) Caskey (1972) fig. 5. p. 370.
- 117) Rutter (1979) fig. 1.
- 118) MacGillivray (1980), Hanschmann and Milöjčić (1976)
- 119) Papathanasopoulos (1961-62)* pin. 57, 58.
- 120) Bernabo-Brea (1976) Tav. CCTV, CCV.
- 121) Rutter (1979) p. 20. note 5.
- 122) Wilson and Eliot (1984) fig. 1-f, g.
- 123) Sampson (1985) sched. 64 a-57.
- 124) Milöjčić (1961) Taf. 15-3 (?)
- 125) Doumas (1977) p. 23. Rutter (1979) p. 20. note 5.
- 126) MacGillivray (1979, 1980)
- 127) Doumas の教示による。
- 128) Barber (1987) p. 56.
- 129) Doumas (1976)*
- 130) Tsoundas (1899)*
- 131) Wilson and Eliot (1984) fig. 2-d. (アイア・イリニ), Tsoundas (1899) pin. 8-4. (ハランドリアニ)
- 132) ラッターは積極的にこれをカストリ・グループの要素として認める。Rutter (1979) p. 21. note 11.
- 133) Doumas (1977) p. 26. では、アイオス・ルーカスもカストリ・グループに数えられている。
- 134) Papathanasopoulos (1961-62)*.
- 135) Doumas (1972) p. 126. pl. 1.
- 136) Papathanasopoulos (1961-62) pin. 72.
- 137) Sampson (1985, 1988) に基づく。
- 138) Sampson (1985) p. 386.
- 139) Theocharis (1955)* p. 146.
- 140) Theochari and Parlama (1986)
- 141) Walter und Felten (1981)
- 142) Konsola (1981)
- 143) Doumas (1988)
- 144) メリンクはトロイ I と II との間にエーゲ海の EC III A に相当するギャップを想定して、この状況を説明しようとする。Mellink (1986) p. 149. 及び pl. 16.
- 145) Milöjčić (1961)
- 146) Levi (1961)
- 147) アナトリアの現状については supra 註144文献参照。
- 148) Wilson and Eliot (1984)
- 149) 管見に触れるかぎりでは、クレタにおいてカストリ・グループとの関係を示す可能性のある証拠は、註 50 に言及したアイア・フォティアの周壁のみである。
- 150) Renfrew (1972)
- 151) Barber (1987)
- 152) Barber (1987) passim.
- 153) Renfrew (1984) p. 45.
- 154) Renfrew ibid.
- 155) Barber (1984) p. 88., (1987) passim., Hood (1986) p. 36.
- 156) カストリ・グループのアナトリア起源は、ラッター、バーバー、マックギリヴレイらによって主張され

てきている。ただし、ギリシャ本土の場合と同様に、対比されるアナトリア側のコンテキストは明確でない場合が通例である。「アナトリアとの関係」(これは青銅器時代を通して存在した)と「アナトリア起源」とは、全く別の問題であろう。

- 157) たとえば、エギナ(表3)、ポリオクニ、タルススなど。
- 158) Popham and Sackett (1968) p. 6.
- 159) Barber (1987) p. 102.
- 160) カストリの青銅器は、E Bのエーゲ海で一般的な砒素との合金ではなく本来の青銅(錫との合金)であり、鉛アイソトープ分析の結果も、アナトリアとの近似を示している。
- 161) Theocharis (1955)* p. 130.
- 162) Spitaels (1985)
- 163) 1960年代の初めには、まだ遺構が地表面に見えていたらしい。Caskey (1964) p. 64. 筆者は1988年8月と1989年11月にハランドリアニ及びカストリを踏査したが、ハランドリアニの遺構については確認できなかった。ただし、その際ヒッチハイクさせてくれたエルムーポリから現地に耕作に通う人の話では、農作業の際に遺物にあたることは、今日なおよくあるらしい。
- 164) ただし、分析されている限りでは、カストリからの青銅器とハランドリアニからの青銅器には素材に相違があり、この解釈には消極的な証拠を示している。
- 165) シャッハマイアは、かつてカストリがトロイから来た冶金術師の交易拠点ではないかと示唆したことがあったが、この仮説のほうが、まだしもカストリを時期とする新説よりも事実に近いのではないかとされる。Schachermeyer (1971)
- 166) 1989年12月に在アテネ・アメリカ古典学研究所(ASCSA)で行われた青銅器時代の土器と交易をめぐるコンファレンスの場で、スキロス島パラマリ遺跡からフィラコピI・グループの水差状土器の出土が報告された。同遺跡からは、これまでシロス・グループ、カストリ・グループの遺物が出土しており、それらとの間の層位的関係の公表が期待される。
- 167) Howell (1973) p. 85 参照。

BIBΛIΟΓΡΑΦΙΑ (ギリシヤ語)

- ΔΗΜΑΚΟΠΟΥΛΟΥ, Κ. 1975, *Ειδήσεις από τη Θήβα. : Ανέγρεση Πρωτοελλαδικού αφιδωτού οικοδομήματος*. *ΑΑΑ* 8, 192-198.
- ΔΗΜΑΚΟΠΟΥΛΟΥ, Κ. και ΚΟΝΣΟΛΑ, ΝΤ. 1975 *Λείψανα ΠΕ, ΜΕ και ΥΕ οικισμού στη Θήβα*. *ΑΔ* 30, Α. 44-89.
- ΘΕΟΧΑΡΗΣ, Δ. 1953-54. *Ασκηταριό, Πρωτοελλαδική ακρόπολις παρά την Ραφήναν*. *ΑΕ*, 59-76.
- . 1955. *Ανασκαφή εν Αραφήνι*. *ΠΑΕ του έτους 1952*, 129-151.
- . 1957. *Ανασκαφή εν Αραφήνι*. *ΠΑΕ του έτους 1954*, 103-113.
- ΚΟΝΣΟΛΑ, ΝΤ 1981. *Προμυκηναϊκή Θήβα, χωροταξική και οικιστική διάρθρωση*. *Αθήνα*.
- . 1984. *Η πρώτη αστικοποίηση στους Πρωτοελλαδικούς οικισμούς*. *Αθήνα*.
- ΝΤΟΥΜΑΣ, Χ. 1964. *Αρχαιότητες και Μνημεία Κυκλάδων, Νάξος*. *ΑΔ* 19 *ΧΡΟΝΙΚΑ*, 411-412.
- . 1976. *Πρωτοκυκλαδική κεραμική απο τα Χριστιανά Θήρας*. *ΑΕ*, 1-11.
- . 1979. *Προϊστορικοί Κυκλαδίτες στην Κρήτη*. *ΑΑΑ* XII, 104-109.
- ΠΑΠΑΒΑΣΙΛΕΙΟΥ, Γ. Α. 1910. *Περί των εν Εύβοια αρχαίων τάφων*. *Αθήνα*.
- ΠΑΠΑΘΑΝΑΣΟΠΟΥΛΟΣ, Γ. 1961-62 *Κυκλαδικά Νάξου*. *ΑΔ* 17 Α, 104-151.
- ΣΑΜΨΟΝ, Α. 1985 *ΜΑΝΙΚΑ, Ι, μία Πρωτοελλαδική πόλη στη Χάρκιδα*. *Αθήνα*.
- . 1988 *ΜΑΝΙΚΑ, ΙΙ, ο Πρωτοελλαδικός οικισμός και το νεκροταφείο*. *Αθήνα*.
- ΤΣΙΠΟΠΟΥΛΟΥ, Μ. 1988 *Αγία Φωτιά Σητείας: το νέο εύρημα*. French and Wardle (eds.) *Problems in Greek prehistory*, 31-47.
- ΤΣΟΥΝΤΑΣ, Χ. 1898 *Κυκλαδικά Ι ΑΕ*, 137-212.
- . 1899 *Κυκλαδικά ΙΙ ΑΕ*, 73-134.

BIBLIOGRAPHY (その他の言語)

- Åberg, N. (1933) *Bronzezeitliche und Früheisenzeitliche Chronologie: IV Griechenland*. Stockholm.
- Atkinson, T. D. Bosanquet, R. C. Edger, C. C. Evans, A. J. Hogarth, D. J. Mackenzie, D. Smith, and Welch, F. B. (1904) *Excavations at Phylakopi in Melos*. Society for the Promotion of Hellenic Studies Supplementary Paper 4. London.
- Barber, R. L. N. (1974) *Phylakopi 1911 and history of the later Cycladic Bronze Age*. *BSA* 69, 1-53.
- (1978) *The Cyclades in the Middle Bronze Age*. in Dumas (ed.) *Thera and the Aegean World I*, 367-379.
- (1981) *A tomb at Ayios Loukas, Syros: some thoughts on Early-Middle Cycladic chronology*. *Journal of Mediterranean Anthropology and Archaeology* 1, 167-179.
- (1983) *The definition of the Middle Cycladic Period*. *AJA* 87, 76-79.
- (1984) *The pottery of Phylakopi, first city, phase ii (I-ii) in MacGillivray and Barber (eds.) The prehistoric Cyclades*, 88-94.
- (1987) *The Cyclades in the Bronze Age*. London.
- Barber, R. L. N. and MacGillivray, J. A. (1980) *The Early Cycladic Period: matters of definition and terminology*. *AJA* 84, 141-157.
- (1984) *The prehistoric Cyclades: a summary*. in Macgillivray and Barber (ed.) *The prehistoric*

- Cyclades, 96-302.
- Bent, J. T. (1885) *The Cyclades, or life among the Insular Greeks*. London.
- Bernabo-Brea (1964) *Poliochni, I*. Rome.
 (1976) *Poliochni, II*. Rome.
- Blegen, C. W. (1921) *Korakou*. Boston and New York.
- Blegen, C. W., Caskey, J. L., Rawson, M. and Sperling, J. (1950) *Troy I: the first and second settlements*. Princeton.
- Blegen, C. W., Caskey, J. L., Rawson, M. (1951) *Troy II: the third, fourth and fifth settlements*. Princeton.
- Bossert, E. M. (1960) Die gestempelten Verzierungen auf frühbronze-zeitlichen Gefässen der Agäis. *JDI* 75, 1-16.
 (1967) *Kastri auf Syros*. *AD* 22, 53-76.
- Caskey, J. L. (1956) Excavations at Lerna, 1955. *Hesperia* 25, 147-173.
 (1960) The Early Helladic Period in the Argolid. *Hesperia* 29, 285-303.
 (1964) Chalandriani in Syros. in *Essays in memory of Karl Lehmann, Marsyas Supplement I*, 63-69.
 (1971) Investigations in Keos. Part 1: excavations and explorations, 1966-1970. *Hesperia* 40, 359-396.
 (1972) Investigations in Keos. Part 2: a conspectus of the pottery. *Hesperia* 41, 357-401.
- Doumas, C. G. (1972) Notes on Early Cycladic architecture. *AA* 87, 151-170.
 (1977) Early Bronze age burial habits in the Cyclades. *SIMA XLVIII* Göteborg.
 (1978) (ed.) *Thera and the Aegean World I*. London.
 (1980) (ed.) *Thera and the Aegean World II*. London.
 (1983) *Cycladic Art, the N. P. Goulandris Collection*. London.
 (1988) EBA in the Cyclades: continuity or discontinuity? in French and Wardle (eds.) *Problems in Greek Prehistory, papers presented at the centenary conference of the British School of Archaeology at Athens, Manchester April 1986*. Bristol.
- Dowkins, R. M. and Droop, J. P. (1911) The excavations at Phylakopi in Melos. *BSA* 17, 1-22.
- Edgar, C. C. (1897) Prehistoric Tombs at Pelos. *BSA* 3, 35-51.
- Evans, A. J. (1921-1935) *The palace of Minos at Knossos I-IV and index*, London.
- Evans, R. K. and Renfrew, C. (1984) The earlier Bronze Age at Phylakopi. in MacGillivray and Barber (eds.) *The prehistoric Cyclades*, 63-69.
- Forsdyke, E. J. (1925) *Catalogue of the Greek and Etruscan vases in the British Museum*. vol. 1 part 1. Prehistoric Aegean pottery. London.
- Frankfort, H. (1927) Studies in early pottery of the Near East II. Asia, Europe, and the Aegean, and their earliest interrelations. *Royal Anthropological Institute Occasional Paper* 8. London.
- Gale, N. H. and Stos-Gale, Z. A. (1981) Cycladic lead and silver metallurgy. *BSA* 76, 169-224.
 (1984) Cycladic metallurgy. in MacGillivray and Barber (eds.) *The Prehistoric Cyclades*, 255-276.
- Gartang, J. (1953) *Prehistoric Mersin: Yümük Tepe in Southern Turkey*. Oxford.
- Goldman, H. (1931) *Excavations at Eutresis in Boeotia*. Cambridge, Mass.
 (1956) *Excavations at Gözlü Kule, Tarusus. II*. Princeton.
- Hägg and Konsola (1986) (eds.) *Early Helladic Architecture and Urbanization*. Göteborg.
- Hanschmann, E and Milöjčić, V. (1976) *Die deutschen Ausgrabungen an der Argissa-Magula in*

- Thessalien, III. Die frühe und beginnende mittlere Bronzezeit. Bonn.
- Hood, M. S. F. (1981-1982) Excavations in Chios, 1938-55: prehistoric Emporio and Ayio Gala I, II. BSA supplementary Volumes 15, 16. Oxford.
- (1986) Evidence for invasions. in Cadgan (ed.) The end of the Early Bronze Age in the Aegean. Cincinnati Classical Studies 6. Cincinnati. 31-68.
- Howell, R. J. (1973) The origins of Middle Helladic Culture. in Crossland and Birchall (eds.) Bronze Age Migrations in the Aegean. 73-106.
- Kadish, B. (1969) Excavations of prehistoric remains at Aphrodisias, 1967. AJA 73, 49-65.
- (1971) Excavations of prehistoric remains at Aphrodisias, 1968 and 1969. AJA 75, 121-140.
- Kunze, E. (1934) Orchomenos III. Die Keramik der frühen Bronzezeit. München.
- Lamb, W. (1936) Excavations at Thermi in Lesbos. Cambridge.
- Levi, D. (1962) Le due prime campagne di scavo a Iasos. ASA tene 39-40, 506-571.
- (1966) Le campagne 1961-1964 a Iasos. ASA tene 43-44, 401-546.
- MacGillivray, J. A. (1979) Early Cycladic pottery from Mt. Kynthos in Delos.
- (1980) Mount Kynthos in Delos: the Early Cycladic settlement. BCH 104, 3-45.
- (1983) On the relative chronologies of Early Cycladic IIIA and Early Helladic III. AJA 87, 81-83.
- (1984) The relative chronology of Early Cycladic III. in MacGillivray and Barber (eds.) The prehistoric Cyclades, 70-77.
- Mackenzie (1963) Daybook of the excavations at Phylakopi in Melos, 1896, 1897, 1898, and 1899. (Unpublished transcript by C. Renfrew, Library at the British School of Archaeology at Athens)
- Marangou, L. (1984) Evidence for the Early Cycladic period on Amorgos. in Fitton (ed.) Cycladica, 99-115.
- Mellink, M. J. (1964) Excavations at Karatas-Semayuk in Lycia, 1963. AJA 68, 269-278.
- (1965) Excavations at Karatas-Semayuk in Lycia, 1964. AJA 69, 241-251.
- (1986) The Early Bronze Age in West Anatolia. in Cadogan (ed.) The end of the Early Bronze Age in the Aegean, 139-152.
- Milojčić, V. (1961) Samos I, Die prähistorische Siedlung unter dem Heraion. Grabung 1953 und 1955. Bonn.
- Mountjoy, P. (1980) Some Early and Middle Helladic Pottery from Boeotia. BSA 75, 139-150.
- Mylonas, G. E. (1959) Aghios Kosmas, an Early Bronze Age settlement and cemetery in Attica. Princeton.
- Orthmann, W. (1966) Untersuchungen auf dem Asarcik Hüyük bei Irica. Ist. Mitt. 16, 27-88.
- Overbeck, J. C. and G. F. (1979) Consistency and diversity in the Middle Cycladic era. in Davis and Cherry (eds.) Papers in Cycladic prehistory, 106-112.
- Plassart, A. (1928) Les sanctuaires et les cultes du Mont Cynthe, Explorations Archéologiques de Délos. XI, Paris.
- Popham, M. and Sackett, L. H. (1968) (eds.) Excavations at Lefkandi, Euboea 1964-66, a preliminary report. London.
- Podzuweit, Cr. (1979) Trojanische Gefäßformen der Frühbronzezeit in Anatolien, der Agäis und angrenzenden Gebieten. Mainz.
- Renfrew, C. (1965) The neolithic and Early Bronze Age cultures of Cyclades and their external relations. (Ph. D. dissertation) Cambridge University.
- (1967) Cycladic metallurgy and the Aegean Early Bronze Age. AJA 71, 1-20.

- (1972) The emergence of civilisation, the Cyclades and the Aegean in the third millennium B. C. London.
- (1984) From Pelos to Syros: Kapos grave D and the Kampos group. in MacGillivray and Barber (eds.) The prehistoric Cyclades, 41-54.
- Renfrew, C. and Wagstaff, M. (1982) An island polity, the archaeology of exploitation in Melos. Cambridge.
- Rubensohn, O. (1917) Die prähistorischen und frühgeschichtlichen Funde auf dem Burghügel von Paros. AM 17, 1-96.
- Rutter, J. B. (1979) Ceramic change in the Aegean Early Bronze Age. The Kastri group, Lefkandi I and Lerna IV: a theory concerning the origin of Early Helladic III ceramics. UCLA Institute of Archaeology, Occasional Paper 5. Los Angeles.
- (1983) Some observations on the Cyclades in the later third and early second millennium. AJA 87, 69-76.
- (1984) The Early Cycladic III gap. in MacGillivray and Barber (eds.) The prehistoric Cyclades, 95-107.
- Spanos, D. (1972) Untersuchung über den bei Homer "Depas amphikypellon" genannten Gefäßstypus. Ist. Mitt. Beiheft. 6.
- Sapouna-Sakellarakis, E. (1987) New evidence from the Early Bronze Age cemetery at Manika, Chalkis. BSA 82, 233-264.
- Schachermeyer, F. (1971) Forschungsbericht zur Ägaischen Frühzeit. AA 86, 387-419.
- Spitaels, P. (1984) The Early Helladic Period in Mine No. 3 (Theatre sector). Thorikos VIII 1972/1976. Gent, 151-174.
- Suto, Y. (1987) The "Minyan Ware" and some Problems on the Establishment of the Middle Helladic Culture in the Greek Mainland. Cultura Antiqua 39-8, 1-18 (in Japanese)
- Theochari, M and Parlama, L. (1986) Palamari, an Early Bronze Age settlement at Skyros. in Hägg and Konsola (eds.) Early Helladic Architecture and Urbanization, 51-55.
- Thimme, J. (1977) (ed.) Art and Culture of the Cyclades. Karlsruhe.
- Walter, H. and Felten, F. (1981) Alt Ägina III, 1. Die vorgeschichtliche Stadt, Befestigungen, Häuser, Funde. Mainz.
- Wilson, D. E. and Eliot, M. (1984) Ayia Irini, period III: the last phase of occupation at the E. B. A. settlement. in MacGillivray and Barber (eds.) The prehistoric Cyclades, 78-87.
- Wünsche, R. (1977) Studien zur ägäischen Keramik der frühen und mittleren Bronzezeit. München Berlin.
- Zapheiroupolou, P. (1984) The chronology of the Kampos Group. in MacGillivray and Barber (eds.) The prehistoric Cyclades, 31-40.
- (1988 a) Naxos, monuments and museum. Athens.
- (1988 b) Syros museum. Athens.
- Zervos, C. (1957) L'art des Cyclades du début à la fin de l'âge du bronze. Paris.

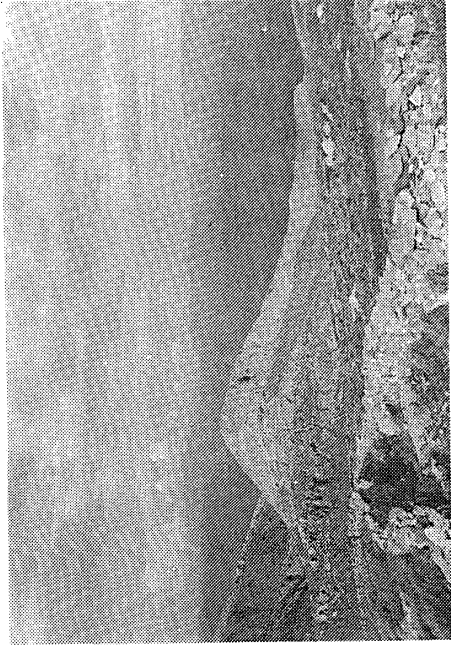
Abbreviations

AA	Archäologischer Anzeiger.
AAA	Athens Annals of Archaeology.
AJA	American Journal of Archaeology.

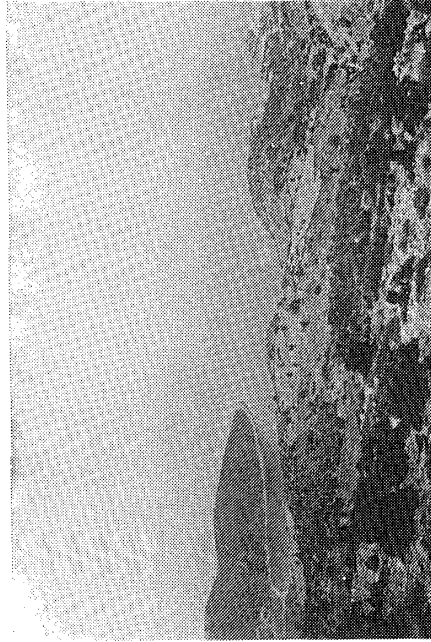
周 藤 芳 幸

AM	Mitteilungen des deutschen archäologischen Instituts, Athenische Abteilung.
ASAtene	Annuario della Scuola Archeologica Italiana di Atene.
BCH	Bulletin de Correspondence Hellénique.
BSA	Annual of the British School at Athens.
Ist. Mitt.	Istanbuler Mitteilungen.
JdI	Jahrbuch des deutschen archäologischen Instituts.
SIMA	Studies in Mediterranean Archaeology.
<i>AA</i>	<i>Αρχαιολογικόν Δελτίον.</i>
<i>AE</i>	<i>Αρχαιολογική Εφημερίς</i>
<i>ΠΑΕ</i>	<i>Πρακτικά της εν Αθηνάις Αρχαιολογικής Εταιρείας.</i>

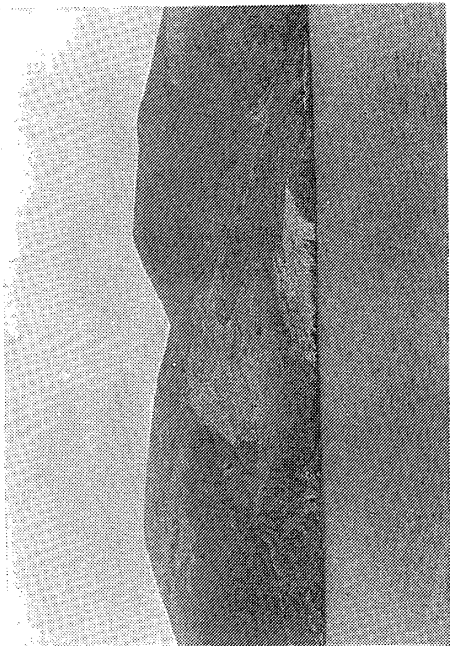
カストリグループと初期青銅器時代のエーゲ海



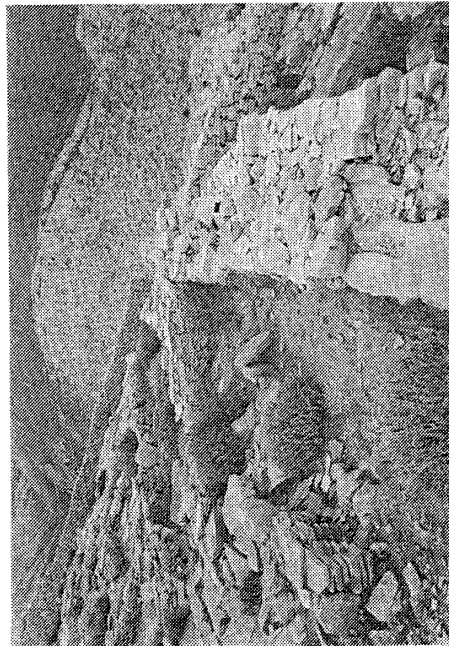
2



4

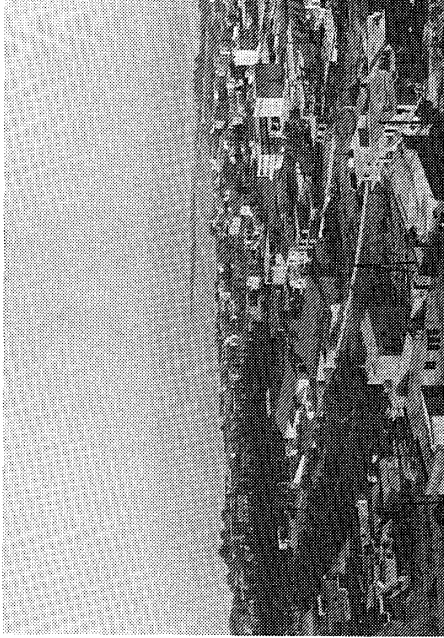


1

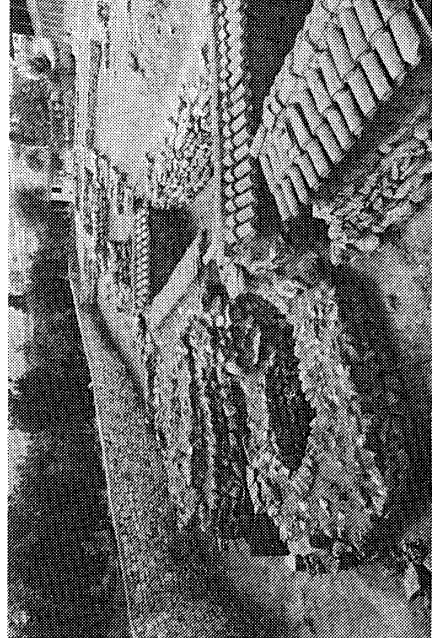


3

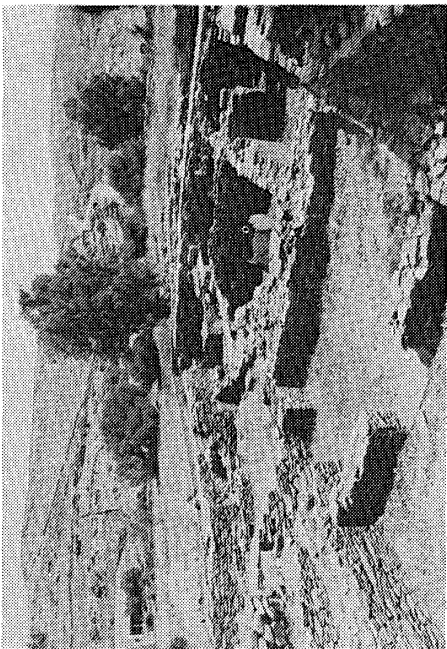
Plate I



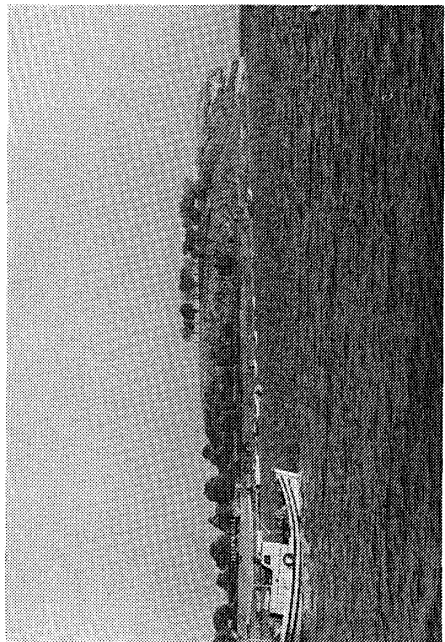
2



4



1



3

Kastri Group and the later Early Bronze Age in the Aegean.

YOSHIYUKI SUTO

In spite of the early florescence of scientific research by Greek and foreign archaeologists, the relative chronology of cultural traits in the EB Cyclades did not become a major focus of debate until recently. Even the standard tripartite chronological scheme was introduced in this region as late as the 1960's. This long indifference to the historical perspective is now compensated ironically with a flood of novel chronological subdivisions which are put forward from various viewpoints. But as has been pointed out recently by Doumas (1988), there is general consensus about the culture sequence in the EB Cyclades except for the historical position of one characteristic group which is variously designated the Kastri group or Lefkandi I in culture group terms, ECIIB or ECIIIA in the traditional system (hereafter only Kastri group). To put it another way, nothing but an insufficient understanding of the Kastri group causes this confusion. It is the purpose of this paper to analyse this confusion through the clarification of the nature and historical implications of the Kastri group, and to put forward an alternative chronological scheme for the later EBA Cyclades which is more consistent with the archaeological data available.

1

The development of archaeological research in the Aegean islands may be divided into five stages. First scientific excavations began in the last decade before the turn of the 19th century by Tsundas of the Greek Archaeological Society on the islands of Amorgos, Syros etc. and by the missions of the British School at Athens on the island of Melos. It is interesting that most of the important materials of the EB period had been discerned and published before 1910, while on Crete and mainland Greece this kind of activity started much later.

The second stage, which lasted about half a century, may be considered to have been rather sluggish. While research progressed spectacularly on Crete and mainland Greece, little new evidence was revealed from the Cyclades.

A renaissance, however, began in 1960 with the commencement of the excavation at

Ayia Irini on Kea by Caskey, who had just established the revised Helladic chronology through investigations at Lerna in the 1950's. Maria-Bossert reinvestigated Kastri fort in 1964 and Doumas and other Greek archaeologists carried out many excavations on various islands. The striking discovery of Akrotiri on Thera, whose date of prosperity, though, is a little out of our scope, took place in the late 1960's.

One can characterize the following decade, which covered the entire 1970's, as the period of synthesis. The first and most influential work is that of Renfrew (1972) and there is also a thorough study of cemeteries by Doumas (1977). Furthermore the records and material from old excavations were carefully examined and published (Barber 1974, MacGillivray 1979, 1980). By the end of this stage, the basic culture sequence had been established as Grotta-Pelos, Keros-Syros and then Phylakopi I.

With the paper on the relative chronology of the EB period by Barber and MacGillivray (1980) the next and contemporary stage began, the stage of controversy. Their prime concern was to divide the ECIII into two subperiods through giving the Kastri group its own chronological position (ECIIIA) which is antecedent to Phylakopi I (ECIIIB). If we look at the earlier opinions of Barber (1974, 1978), we cannot help being embarrassed by this new definition, for in the previous arguments Barber regarded the two groups as generally contemporary and insisted that the difference was due to local rather than chronological variation. Then what made him propose this revised chronological scheme?

One reason may be the fact that through the examination of the material from the Phylakopi excavation of 1911, he reached the conclusion that the later half of Phylakopi I should be synchronized with the MB period outside the Cyclades. Other evidence in favor of the synchronization is a tomb at Ayios Loukas on Syros, where Phylakopi I type pottery was associated with Minyan ware (Barber 1981). The carinated form of the pottery indicates that it belongs to a chronologically advanced group of the ware and should be put in MH and not EHIII.

But if Phylakopi I is set parallel to the early MB period in the Aegean, what kind of cultural assemblage should be put in EBIII? We guess that Barber felt obliged to solve this riddle by assuming that the Kastri group should represent the culture of the EBIII Cyclades although it lacks any kind of direct testimony for this relationship.

This logical but artificial procedure in constructing the chronological scheme soon came to provoke severe controversy over the later Cycladic EBA. The most radical argument was put forward by Rutter who had been interested in the origins of the EHIII ceramic repertoire (1979). In 1983 he suggested that there seems to have been a gap of 100 to 150 years in

the Cyclades, which roughly corresponds to EHIII on the Mainland. Although he later withdrew some points of his previous argument, without doubt Rutter's term "gap" meant originally a substantial desertion of settlements. Simultaneously he called the Kastri group ECIIB. This implies something more than the mere alteration of terminology, for in this way he tried to relate the end of the Kastri group in the Cyclades with the end of EHII at Lerna and other sites in Argolis.

This suggestion was immediately criticized by MacGillivray and Barber. Barber insisted that ECIIIA and ECIIIB were successive stages and rejected Rutter's approach which was based exclusively on the external comparison of material, while MacGillivray pointed out evidence which might denote a synchronism between ECIIIA and EHIII. At first sight, the argument of the latter seems more vital because it was Rutter's contention that the supposed gap corresponded chronologically to EHIII. Then, why did Barber carefully prevent himself from asserting the synchronism at the Workshop in 1984? (Barber 1984, cf. Macgillivray 1984). The reason is clear. Barber must have known that ECIIIA could not correspond exclusively to EHIII, though it should do so. As we will see later, the Kastri group material is usually associated with the elements of EHII such as the sauceboat, but sometimes occurs with such features as the apsidal house which point to EHIII. Does this imply that Kastri group should be put chronologically somewhere between EHII and EHIII as is usually considered as in the case of the Kampos group (ECI-ECII)?

It is obvious that single and simple explanations of archaeological phenomenon generate only naive historical perspective. Is there really no possibility of alternative explanations?

It is dangerous to compare two assemblages when their definitions are still unclear. For this purpose we must define first the distinctive characteristics of the culture in question with typological and/or stratigraphical reasoning and then we can proceed to explore its external relations. Similarly the object of comparison, the contents of the other culture, should have gone through a similar but independent contextual analysis at least in theory.

This is not the case, however, for the later EBA in the Aegean, except for the NW Peloponnesos. There, the cultural sequence is well established at Lerna and was recently examined through the excavations at Tiryns (Weisshaar, 1981, 1982). It is the information from this region that offers the basis for the Helladic terminology, and no one knows to what extent this definition may be valid outside the region, especially in Attica and Viotia.

In the Cyclades, various definitions of the Kastri group have been put forward since the time of Renfrew, but they are often inconsistent. In consequence, there is now a tendency to regard an assemblage as that of the Kastri group if one of the diagnostic elements

is present. Furthermore, when the nature of the Kastri group is considered, only the conspicuous aspects are usually discussed, dismissing other less conspicuous but no less significant aspects.

We have observed that the Kastri group is the crux of recent controversy and needs thorough rethinking. For this purpose, we examine the elements which have been regarded as the distinctive feature of the group on the basis of original contexts and then proceed to establish both its internal and external relationships.

2

One-handled cup

The one-handled cup of the Kastri group has a spherical, sometimes squat body and a funnel-like neck which is often turned out with a gentle curve and ends in a subtly pointed rim. Three types are discerned in relation to the manner of attachment of the handle, which is usually round in section. Type 1 has a handle whose upper end is attached to the rim, while that of Type 2 is attached a little below the rim on the neck. The distinction of the two Types is not clear-cut and there are many intermediate examples. Type 3 is conspicuous by a handle of which both ends are attached to the spherical body.

In the Cyclades, this shape has been reported from Kea, Syros, Delos, and Naxos. Interestingly, not a single example is found from the eponymous site of Kastri, while at least three examples are found at the nearby site of Chalandriani, one of which is a rare black burnished example of Type 3.

In Attica, they are reported from Kolona on Aegina, House A at Rafina, and in the vicinity of Mine 3 at Thorikos.

In Evia, they are most common at Lefkandi and several tombs at Manika contain similar examples. Recently this pottery is reported also from Palamari on Skyros east of Evia.

It is in Viotia, however, that relatively abundant examples have been brought to light. All the examples from Orchomenos have ribbon handles, which is a typical feature of the EH II pottery. According to Kunze (1934) there was another example from Ayia Marina which had a handle similar to those of the Cyclades. At Thebes, they are found from five different localities, and one example is derived from the floor level of a burnt apsidal house (Demakopoulou 1975). At Eutresis two examples are alleged to have been found but only one of them is published. There is a further example whose provenance is not clear (Montjoy 1980).

To the north of Viotia, one example was found in a trial excavation at Pefkakia.

In the north Aegean islands, they are found at Poliochni on Lemnos in period red and period yellow. Typologically more similar to the Cycladic cups are the examples from period red. They always fall into our Type 3.

It is noteworthy that the one-handled cup of the Kastri group never became popular in the coastal area of northwestern Anatolia, especially at Troy. The vast repertoire of pottery at EBA Troy includes some shapes which may be related to the form under discussion, but they lack the fine proportions of their Cycladic counterparts. More similar may be the two-handled varieties, but they are a rare feature in the Aegean. Neither at Thermi on Lesbos nor at Emporio on Chios was the Kastri group one-handled cup been found.

To the south, however, this shape is known at Heraion on Samos, Iasos, Aphrodisias and Tarsus. The example from southwestern Anatolian sites are always Type 3, thus we can conclude that Type 3 represents an Anatolian variety.

There is a group of one-handled cups in Attika and Evia, which is sometimes misidentified with that of the Kastri group. It is best represented by the many examples from Ayios Kosmas and they are often associated with the frying pan of the Mainland variety (Renfrew 1965). Such an association is observed also at Tsepi (tomb 9) and Manika (tomb 7 by S-Sakellariou). This association suggests that they are totally irrelevant to the Kastri group.

beaked jug

The beaked jug is a ill-defined term given to a closed shape of pottery with an outstanding neck connected to the body by a handle which ends in spouts of various shapes. In contrast to the one-handled cup, the beaked jug is a common feature in different periods with a wide variety. In his study on pottery shapes from Troy, Podzuweit (1979) abandoned typological classification while other scholars have identified various forms, which belong to apparently different categories. For this reason, first we will clarify the features of beaked jugs from three type sites, and then proceed to examine the related types in the Cyclades and surrounding area.

Two shapes come from Kastri, one with a short wide neck (Type 1) and the other with an elongated neck (Type 2). Neither shape has a differentiated beaked rim. At Ayia Irini, beaked jugs occur in three shapes, a type with a swollen neck (Type 3), a lentoid flask (Type 4), and small jug with incised decoration (Type 5). All the complete examples have a rim distinctly modelled from the neck below in contrast to the rim of Type 1 and 2

from Kastri. Since the beaked jug is not well represented by the limited excavations at Lefkandi, only these five types are primary beaked jugs of the Kastri group, though not a single type is common to both Kastri and Ayia Irini.

This diversification becomes further complicated when we examine the related shapes from Chalandriani. Besides the examples of Type 5, there is another type with painted decoration (Type 6). One tomb at Ayios Loukas on Syros contained a beaked jug with a trefoil mouth (Type 7). In the Goulandris collection, there is a group of beaked jugs attributed to the Kastri group by Doumas (Type 8). In Attika, there is a form with a sauceboat-like spout (Type 9).

Type 1 is not so widely distributed in the Cyclades. There is a similar example at Christiana near Thera. One example from Rodinadhes on Naxos may belong to this Type. Outside the Cyclades, comparable examples are known from Aegina (Third city), Eutresis (with ribbon handle) and Tarsus in Cilicia.

Type 2 has no related shape in the Cyclades but there are similar jugs at Manika on Evia and at several sites in Anatolia.

Type 3 is also a rare shape and is known only from Christiana and Ayia Irini.

The lentoid flask (Type 4) is reported from Manika and from Poliochni yellow.

It is with Type 5 that we face a type which shows relatively wide distribution in the Aegean. Examples from Chalandriani have a characteristic black burnished surface which is common to one-handled cups and collared pyxis. One of them has a bivalve-like body decorated with bands of vertically incised lines. A very similar example is reported from Pefkakia in Thessaly (BCH 97 fig. 167.).

Type 6 is primarily characterized by mode of decoration, though they are also fairly consistent in shape. They are found from the Spedos and Philoges cemeteries on Naxos together with various painted pottery including the sauceboat. One example is found at Askitaro in Attika.

Type 7 has no related material in the Cyclades before Phylakopi I and the Minyan ware which was associated with it points in any case to a later period than the K-S culture.

Type 8 beaked jug with ribbon or loop handle which often bears incised decoration on its back seems to have been widely distributed on Naxos.

Type 9 has similar decoration on the handle but the neck is more wide and distinct. It may be closely related to the local one-handled cup of Attika, for this type is known from Ayios Kosmas and Askitaro. Also its morphological features suggest a relation with beaked jugs which are widely distributed in Argolis.

From the above types, Type 7 and Type 9 can be safely put aside for typological and contextual reasons.

bell cup

The bell cup consists of two vertical loop handles attached to the bell-shaped body, the rim of which flares out on its top and whose base is usually flat. As has been pointed out by MacGillivray (1980), the general features of the bell cup suggest a close connection with the one-handled cup. This is the first shape which has been reported from all the three type sites. Through the material from Mt. Kynthos on Delos we can put the various pieces from the type sites in one distinct category.

Besides the type sites and Mt. Kynthos, the bell cup is found from an unnamed site on Naxos (Apeiranthos museum), Palamari on Skyros and Manika. This form is extremely rare outside the Cyclades. There is similar pottery at such peripheral sites as Poliochni on Lemnos and Heraion on Samos, but they lack the typical features of the bell cup of the Kastri group.

Depas Amphikypellon

The definition of Depas Amphikypellon leaves no uncertainty. Since a specific typological study has yet to appear, I follow the classification by Podzuweit.

Four out of six examples from Kastri are classified into Type I variant a, that is a shape with a flat base, a body which tapers towards it and handles whose lower ends are directly attached to the base. Such examples are found in Ayia Irini, Pefkakia and Heraion on Samos, though they are more common in Anatolia. At Troy, its chronological contexts are II d and II g.

One example from Kastri is assigned to Type I variant c, which is characterized by a slightly swelled body. Again a similar example is known from Pefkakia in the Aegean and at Troy they belong to II d and II g, though their focus of distribution is located in inner Anatolia.

The last example belongs to Type III with a conical base. As with Type I variant a, this type is found at Ayia Irini, Pefkakia, and Heraion on Samos. At Troy, all but one example are derived from Troy III.

Two pieces are reported from Orchomenos in Viotia. One of them has the painted decoration known as Ayia Marina style which was popular in EHIII Viotia.

It is remarkable that according to the classification by Podzuweit not a single Cycladic

parallel is observed for the material from Poliochni on Lemnos, though other systems of classification may lead to a different conclusion.

shallow bowl[or plate

Important finds from Kastri, a conical cup, two shallow bowls of marble and a saucer of mable, all of them are typical Syros group elements, have been often dismissed, though they cannot be separated from other finds. Also at Ayia Irini the saucer is not confined to phase B but continues into phase C, and this phenomenon is considered to reflect a gradual transition rather than a sudden break in the sequence of habitation there (Caskey 1972). Also at other sites such as Mt. Kynthos or Pefkakia, they are always associated with the typical saucer. Under these circumstances it may be dangerous to search for related materials of this undiagnostic form. Here it is only pointed out that they are common in yellow, not red, at Poliochni.

collared pyxis

This is the only shape of pottery but for the shallow bowl variety which is reported from both Kastri and Chalandriani. The spherical and a little squat body often bears incised or stamped decoration (Bossert 1960). They are known at Ayia Irini, Mt. Kynthos and on Naxos. Outside the Cyclades there are similar pieces at Manika, some of which have the same pattern of decoration as the Cycladic examples. A sherd from Heraion on Samos has similar incised decoration and may derive from this kind of collared pyxis. The collared pyxis with incised decoration is not reported from either Greek mainland nor Anatolia.

The co-occurrence of pottery shapes of relevance are summarized in Table 1. Here we will examine their internal and external associations. For convenience, I refer to sites as primary Kastri group sites when they yield more than two categories of diagnostic pottery without overwhelming foreign elements. When any one of the categories is found in isolation, these sites are referred to as possible Kastri group sites. Furthermore, all sites where diagnostic pottery is discerned among vast materials which are foreign to the Cycladic culture are called sites with Kastri group elements.

In the Cyclades, which site can be regarded as the primary site of the Kastri group other than Kastri and Ayia Irini? Among the settlement sites, Mt. Kynthos on Delos is the best candidate with group B pottery, virtually consisting of the diagnostic pottery described above, although this classification of vessels from mixed material from early excavations

is somewhat artificial and depends entirely on external reasoning (MacGillivray 1980). More interesting, however, is the classification on the basis of the fabric of the pottery (MacGillivray 1979). All the three fabrics are represented in Group A pottery, while only two of them (Fabrics 2 and 3) are represented in most of group B. There is however, one significant exception; the one-handed cup is substantially represented by fabric 1, which is nothing but urfirnis variety. This observation strongly suggests that, at least at Mt. Kynthos, the one-handed cup should be coupled with the group with the sauceboat (Syros group) and not with the Kastri group.

There is not yet sufficient information for Zas cave and Panormos on Naxos, though they are thought to be primary sites of the Kastri group. Kastraki on Naxos and Christiana near Thera are possible Kastri group sites, while Parikia on Paros, chiefly a Phylakopi I group site, and Ano Kouphonisi, chiefly a Kampos group site, are the sites with Kastri group elements.

As for the cemeteries, the most important site is Chalandriani on Syros. Tsundas selected 32 rich tombs for publication out of 600 or so and left only a brief description. Tombs of concern to us, such as nos. 196, 392 and 452 were not included. It may be supposed from the numbers attributed to them that they did not form a single cluster but were located sparsely in the Syros group cemetery. Four burials and exceptionally rich ktermata were found from one tomb at Akrotiraki on Siphnos. Among the ktermata, there are four one-handed cups and a painted footed-cup. The latter has great importance, for almost the same piece is known from Chalandriani (no. 407) and Ayia Irini III. These contexts suggest that this pottery too is one of the diagnostic materials of the Kastri group, though not only its style of decoration with painting but also such morphological features as the ribbon handle and standing foot are entirely foreign to the other Kastri group elements. In other cemetery sites, the only shape which hints at some relation with the Kastri group is the beaked jug.

The following points have been found to be critical; first, local variation is apparent even inside the Cyclades among the cultural assemblages which are relevant to the Kastri group. The most outstanding group is the one observed on Naxos with the Type 8 beaked jug. If the existence of this element indicates some relation to the Kastri group, its conservative character with traditional marble objects and lack of intrusive material are striking. Second, at almost all the settlement sites, we cannot actually distinguish the Kastri group elements

from the earlier, especially Syros group, material.

Manika on Evia is the most interesting site outside the Cyclades for an examination of the co-occurrence of the pottery in question, for some 20 out of nearly 200 graves so far published yielded Kastri group elements (Table 2). One significant feature observed there is the fact that not only elements of the Kastri group but also all the pottery of Cycladic influence is found only from the cemetery and is entirely unknown from the extensive settlement nearby (Sampson 1985). This situation is all the more interesting since Manika is the only site except for Kastri-Chalandriani where settlement and cemetery are being investigated at the same time.

At least five one-handled cups of Kastri group type are found from the floor level of House A at Rafina in Attika associated with saucers, askos, and deep sauceboats. The beaked jug, too, is noted as present and is compared with the one from Chalandriani (our Type 5), though the description by Theocharis suggests that it may rather have been our Type 2. A similar association is reported from Palamari on Skyros, where the co-occurrence of the typical Kastri group elements (Depas, one-handled cup and bell cup) with saucer and sauceboat is alluded to in a brief report (Theochari and Parlama 1986). This phenomenon is also marked at Kolona on Aegina (Table 3).

The dominance of the one-handled cup is remarkable in Viotia, especially at Thebes, where this shape is classified into local group B pottery together with the askos. This observation clearly stands by the view that Kastri group elements are only partially represented in this region, mainly by the one-handled cup, and their context is always EHII in orthodox terminology.

Poliochni on Lemnos is the site which is drawing attention recently as one of the possible homelands of the Kastri group (Doumas 1988). Its elements are found from two successive but distinct stratigraphical contexts: Type 3 one-handled cups and various odd beaked jugs come from Poliochni red, while several remote types of Depas, shallow bowls, and beaked jugs derive from Poliochni yellow.

The most significant point observed in this region is the fact that very few Kastri group elements are traceable among the finds from Troy in spite of the intensive investigations conducted there. It is, thus, strange that so many scholars seek the origin of the Kastri group in Northwestern Anatolia to no purpose. This point is well confirmed by the scarcity of Kastri group elements at Thermi on Lesbos and at Emporio on Chios.

Some related materials especially Depas, are found at Heraion on Samos, though associated material, such as the two-handled tube-like footed cup is unknown in the Cyclades. The finds from the prehistoric cemetery at Iasos seem to be rather inconsistent in Cycladic terms and are difficult to assess. Interestingly, the pottery with Kastri group traits is more substantially distributed in Southern Anatolia at such sites as Aphrodisias and Tarsus. It must be noted, however, that the one-handled cup is always represented in Type 3 and the beaked jug has wider and more exotic variations.

In the following, I will critically examine the principal hypotheses concerning the Kastri group which have been expressed by scholars on various occasions.

Is the Kastri group a universal phenomenon in the Cyclades?

This question may be paraphrased as follows: can we observe Kastri group sites, including the possible ones, recurrently and widely in the Cyclades? The answer is inevitably an negative one. These sites are clearly confined geographically to the triangular zone defined by Kea, Siphnos and Delos, except for Evia to the west and Naxos to the east. Outside this zone, Kastri group elements are represented only in the form of the beaked jug. Absence of these elements in the southern islands such as Melos, Thera and Crete strikingly contrasts with their extensive penetration in Viotia and Attika associated with local material.

Can we identify the settlements of the Kastri group?

Let us leave the discussion of pottery and turn our attention to the settlements. At first glance, it is obvious that the above question should be put contrariwise; are there settlements of K—S culture which do not show Kastri group elements? This significant point has not yet become the major focus of argument, though it is an undeniable fact that most of the settlement sites which are frequently referred to as that of the K—S culture are actually of the Kastri and not of the Syros group which must be essentially representative of the K—S culture as a whole. Why is so little known about settlements of the pure Syros group which must correspond to the numerous cemetery sites?

On the other hand, diagnostic architectural features of the settlements of the Kastri group are not difficult to recognize. They comprise small houses which stand close together with little systematic order. At Ayia Irini, House E has a rectangular plan, which is a canonical feature in contemporary settlements of the Greek mainland, though it may be explained by

the fact that it partially reused an earlier building of Ayia Irini II.

Are the Kastri group settlements really defensive?

This is repeatedly argued on the grounds that the eponymous site of Kastri occupies the summit of a steep hill and is furnished with a strong double wall. Furthermore, this point is sometimes supposed to indicate the uncertain nature of the times (Barber 1987). But is this a common feature of Kastri group settlements? Is this a feature which is particular to them?

It is well known that the location of Ayia Irini takes such defensibility little into consideration. It may be regarded as an exception since it occupies a previously inhabited locality, though Lefkandi, where the earliest settlement was set up by people with Kastri group material, shows similar indifference to strategic location. At Panormos on Naxos, the location of the prehistoric settlement contrasts well with the later fortified settlement on the steep ridge just behind it. Thus, except for Kastri and perhaps Mt. Kynthos there is no reason to characterize the Kastri group settlements as specifically defensive.

Then, what about the location of the settlements of other cultural groups? This line of argument is more difficult to construct, for, as has been stated above, very few Syros group settlements have been appropriately investigated. In Attika, Ayios Kosmas is located on a low promontory and is hardly defensive in location. At Kolona on Aegina, the earliest fortification wall is assigned to as late as the Fifth City, while Askitario, which lacks any evident Kastri group elements, lies on a steep promontory and can be regarded as defensive by the existence of a wall which separates the settlement from the mainland.

The conclusion is that there seems to be no particular correlation between defensibility and Kastri group settlements.

Why are there so few burials of the Kastri group?

This question has already been put forward by Renfrew (1984). In fact the scarcity of Kastri group burials is remarkable. Besides, it is noteworthy that there is no cemetery which is composed exclusively of burials with Kastri group elements. This observation is directly related to our next question.

Was the Kastri group able to exist without the Syros group?

As we have observed above, Kastri group elements are usually found together with the Syros group material. If this phenomenon literally reflects reality, we should see a much

greater degree of continuity than we observe between the Pelos and Syros groups, as has been suggested by Renfrew (*ibid.*). Through the examination of both settlements and cemeteries, the dependence of the Kastri group on the Syros group becomes beyond doubt. Further, this observation leads us to infer that the Kastri group, in its genuine Cycladic term, could only exist where Syros group settlements had already been thriving. This situation must be the crux of the Kastri group and will be discussed later.

Is the Kastri group intrusive?

The Kastri group is regularly considered to be intrusive. The meaning is twofold: first there is a clear distinction between the people of the Kastri group and the indigenous people and second, the people of the Kastri group came from outside the Cyclades, most probably from western Asia Minor.

The evidence from burial associations seems to support the first hypothesis, for such artefacts as the frying pan, which must have some symbolic import to identify the individual, never occur with Kastri group material (and *vice versa*). Thus, if we put aside the possibility of a chronological distinction, this indicates that they must have belonged to different groups in an emic sense. To this extent, the Kastri group is intrusive.

In contrast, the second hypothesis cannot be supported. The only evidence which undoubtedly points to Anatolia is Depas Amphikypellon and there is no need to consider that other elements, too, are originated in Anatolia. For example, the shallow bowl is a direct descendant of a traditional Cycladic vessel and the one-handed cup has wide distribution in Viotia, while the bell cup and collared pyxis only occur inside the Cyclades.

3

What kind of historical process is implied behind the assemblage of artifacts called the Kastri group? We have already clarified the various aspects of this distinct culture group in order to give an answer to this question. Much yet remains to be considered, including the chronological position of the Kastri group.

Erroneously, several features described above have traditionally been interpreted to reflect the relative shortness of the period of the Kastri group. External evidence clearly suggests the opposite situation, for usually Kastri group elements occur in successive stratigraphical contexts (e. g. Kolona on Aegina, Poliochni on Lemnos). Internal evidence also suggests that to some extent the variance among the Kastri group assemblages might be due to chronological differences. The latest material seems to be the assemblage from Lefkandi

I, for it contains a few sherds of Minyan ware, though they may be an intrusion from the upper strata. The earliest manifestation of the Kastri group cannot be fixed chronologically, but as has been suggested above, it may well postdate the establishment of K—S culture.

The most probable explanation for the evidence is, thus, that the Kastri group in archaeological terms was the reflection of the activities of a small body of people who came into frequent contact with the contemporary cultures within and outside the Cyclades. But this explanation is anything but sufficient since the overseas contacts were already established by the time of K—S culture, attested by the presence of long boats incised on the back of Syros group frying pans. Then what made Kastri a distinct group?

It must have been some specialized technical knowledge, most probably, metallurgy: (tin) bronze as well as silver and lead. The only known site of the EBA which left clear traces of metal-working is Kastri, and at Rafina several pits with bronze slag have been brought to light. One decisive piece of evidence published recently is the discovery of Kastri group elements from the vicinity of Mine no. 3 at Thorikos in Attica, where the first EBA mining activity was attested in the area around the famous later mine of Laureion. This hypothesis may also give a clue to the nature of the site of Kastri in relation to the nearby site of Chalandriani.

It is generally supposed that the people of Chalandriani retreated to Kastri fort because of unrest at the time. This view is difficult to support for if the unrest was brought about by an intrusion from Anatolia, it is the settlement of Chalandriani that should be fortified, not Kastri with its Anatolian elements. Even if the intruders did construct a fortified camp there, it must have been impossible to live there constantly on such a barren rock without any supplies from the outside.

The more logical explanation, therefore, is that the two sites were united by a reciprocal relationship. According to this hypothesis, Chalandriani was a traditional self-supporting village, while Kastri was a small camp of people who guarded carefully their specialized knowledge with its fortification wall. This might be the reason why Kastri was fortified while Ayia Irini and other sites are not. It may also explain why the people of Kastri could be buried in the same way as people of Chalandriani, but with their own kterismata.

This alternative hypothesis is highly speculative, though it explains the observed facts in a more consistent manner than the traditional hypothesis, which gives the Kastri group a distinct chronological phase. Other lines of arguments are needed, especially one based on purely metallurgical evidence which I could not deal with in this paper. (cf. Gale and Stos-Gale, 1984).

The way of co-existence or adaptations of the Kastri people with the traditional Cycladic people may have varied locally, and some camps were abandoned in a short time without losing their original character, while others were absorbed in the local communities in the long run. The speed of metamorphosis might have been swifter in the region near Argolis, where drastic culture change took place at the end of EHII.

Although we cannot infer the motives which stimulated the whole process involved, the following period, ECIII, is actually a period of regionalism. The Phylakopi I assemblage, which is usually considered to be representative of the EBIII in the Cyclades, never pervaded throughout the islands and there must have existed other culture groups such as the Amorgos group which retained the traditional K—S feature more strongly.

Finally I believe that the end of the EBA in the Cyclades should be put at the chronological point, when the elements of K—S culture finally disappeared. This point needs not to be synchronized with that of surrounding areas and it may well postdate the end of EHIII or EMIII.

NOTE

Only minimal bibliographic citations are attached to the English version and the Japanese text should be consulted for further reference and detailed notes.

I would like to acknowledge the kindness and encouragement afforded to me by Professor Christos Doumas, who made it possible for me to study in Greece with a scholarship from the Republic of Greece, State Scholarships Foundation (I. K. Y.).

Special thanks are due to Mr. M. Hudson who kindly undertook the task of improving my English text.

LIST OF TABLES

1. Sites mentioned in the text (see. fig. 1)
2. Kastri group related pottery at Maika on Evia, based on Sampson (1985, 1988).
3. Kastri group related pottery at Kolona on Agina, based on Walter and Felten (1981).

LIST OF FIGURES

1. Map of the South Aegean and sites mentioned in the text.
2. Map of the central Aegean islands.
3. Early Cycladic vase forms, reproduced from Barber and MacGillivray (1980) p. 148.

ILL. 2.

4. Settlement plan (a) and map (b) of Kastri, reproduced from Bossert (1967) plan 2 and plan 1, respectively.
5. Finds from Kastri: 1, bell cup, height 8.2 cm.; 2, collared pyxis, height 8.2 cm.; 3, marble shallow bowl, height 3.7 cm.; 4, conical cup, height 5.6 cm.; 5, proto duck vase, height 8.2 cm.; 6, Depas Amphikypellon, remaining height 14 cm.; 7, beaked jug, remaining height 16 cm.; 8, beaked jug, remaining height 17.8 cm, reproduced from Bossert (1967) Abb. 4-1, 2; 5-3, 5, 1; 4-4; 3-1, 2, respectively.
6. Finds from Lefkandi: 1, bell cup; 2, Type 3 one-handled cup; 3, Type 1 one-handled cup; 4, shallow bowl; scale not mentioned, reproduced from Popham and Sackett (1968) fig. 7, 5, 7, 8, 1, respectively.
7. Finds from Ayia Irini: 1, saucer; 2, Type 3 one-handled cup; 3, bell cup; 4 Type 4 beaked jug.; 5, Type 3 beaked jug; 6, Depas Amphikypellon; 1-3, 4-6 are to the same scales respectively. reproduced from Caskey (1972) C-13, C-46, C-2, C-49, C-14 and C-47. in fig. 5, 6 and 7.
8. Various one-handled cups of the Kastri group and related shapes: 1, from Thebes, AD 28 (1973) pin. 231.; 2, from Orchomenos, Kunze (1934) Taf. XXII-3.; 3, from Ayia Irini, Caskey (1972) C-34, Pl. 80.; 4, from Ayia Irini, C-1, *ibid.*; 5, from Akrotiraki on Siphnos, Zervos (1957) no. 183.; 6, from Poliochni yellow, Bernabo Brea (1976) Tav. CCVIII-i.; 7, from Poliochni red, Bernabo Brea (1964) Tav. CXLIII-b.; 8, from Heraion on Samos, Milošćić (1961) Taf. 21-1.; 9, from Karatas-Semayük, Melink (1967) Pl. 1-83, fig 46.; 10, from Tarsus, Goldman (1956) Pl. 266-467.; various scales.
9. 1, Type 8 beaked jug from Spedos cemetery on Naxos, from Papathanasopoulos (1961-62) pin. 56 a.; 2, collared pyxis from Mt. Kynthos, MacGillivray (1980) fig. 6.; 3, spouted collared pyxis from Naxos, Zervos (1957) no. 193.; 4, painted footed cup from Akrotiraki on Siphnos, *ibid.* no. 125.; 5, Type 5 beaked jug from Chalandriani on Syros, *ibid.* no. 196.; 6, Type 5 beaked jug from Chalandriani, *ibid.* no. 195.; various scales.

LIST OF PLATES

- A. 1. Kastri from the sea.
2. Kastri from Chalandriani; Andros and Tinos in the distance.
3. Kastri, room 11 and fortification wall.
4. Panormos on Naxos.
- B. 1. Ayia Irini, House E-D, from the south.

LIST ON PLATES

2. Manika on Evia: general view.
3. Lefkandi on Evia.
4. Fortification wall of Lerna.